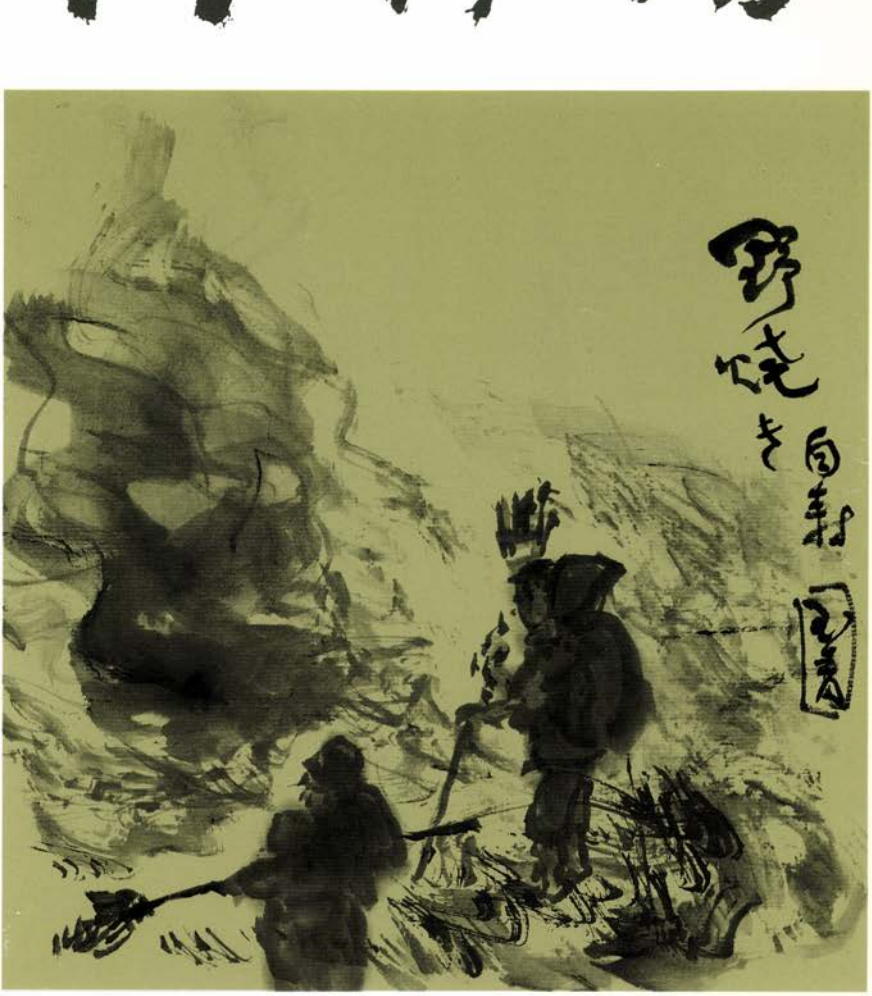
川柳塔

平成十四年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻八九七号



No. 897

二月号

日川協加盟

予告

◎テストケースとして厳冬期の本社句会を次の通り変更します。三月からは従来通り午後五時半開場となります。

二月六日(水)午後一時～五時・締切り二時半

アウィーナ大阪　四階　金剛東

◎**川柳塔九〇〇号記念川柳大会**

五月四日（土）アウィーナ大阪

詳細は本誌九〇頁をごらん下さい

◎**第26回　全日本川柳　二〇〇二年　沖縄大会**

六月九日（日）沖縄ハーバービューホテル

◎**第八回　川柳塔まつり**

十月六日（日）アウィーナ大阪

◎**国民文化祭・とっとり　2002**

十月二十六日（土）鹿野小学校　体育館

■新刊

髙杉鬼遊川柳句集

序文――橘　高　薫　風

四六判・二五四頁・上　製

頒価　二〇〇〇円（送料共）

消えるから雪は刹那を浄く舞い

水死体　時計は防水自動巻き

如月や江下　北川　作江たち

三八銃わが青春は弾丸の下

核のない夜明けを鳩は待っている

吉兆も飲み屋も同じ靴でゆく

今日は　ではさようなら風になる

◉**お申込みは川柳塔社事務所へ**

〒545-0005

発行所　川柳塔社

大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六

ウエムラ第2ビル202号室

電話　〇六・六六二九・六九一四番

年賀状の馬力

河内天笑

愛子さん囲んで御所は早い春　草丘
愛ちゃんの泣き声がするお正月　田鶴

「戦」の幕あけとなった新世紀の出来事をみな払拭するように２００１年12月1日、日本国中をぱっと明るくして皇太子ご夫妻に、待ちに待った赤ちゃんが誕生しました。敬宮さま愛子さん。何と親しみ深いお名前でしょう。愛子さんが芳紀十七才をお迎えになる２０１８年には、地球から有人ロケットが火星へとびたち、無事に軟着陸を果たせたら、月面着陸から丁度半世紀ののちの快挙になります。6名の搭乗員のうち一人は日本人に決まっているそうです。

人和む詩と舞との美ら島へ　司図子

国文祭あなたの席をあけて待つ　由多香

今年もビックイベントが目白押しです。五月四日の川柳塔九百号大会、六月九日の第二六回全日本川柳沖縄大会、そして十月二十六日の第十七回国民文化祭とっとり大会へと、全てに参加して元気な川柳人パワーを発揮したいものです。

夢フェスタ夢がかたちになってくる　宏　章

地元鳥取の期待の大きさを語っているようです。

煌めいて海は王者というねり　千津子
生きて行く力となった山がある　ひかる

神戸の海と富士の山。自然を畏れ尊ぶこころの句は、私へのこよなきお年玉でありました。

馬にたてがみ人には高きこころざし　麦　彦
馬小屋で生まれたことになっている　鬼　桜
馬の鈴　春野に誘われるような　(八)千　代
初春の香に埴輪の馬も目を覚ます　幸
あるがまま曝して軽い駄馬の脚　(保)絹　子
しっかりせいへっぴり腰の一馬力　石花菜
天駆ける馬に飛びのり逢いにゆく　千鶴子
これからが勝負だ天馬にもなろう　如　水
これからもバカバカ走りたいものだ　はるお
さすが午どしの賀状とあってたくさんの名馬がわが家に来てくれて私に馬力をつけて下さいました。

ビンラディン何処かで見てるだろう初日　草　風

ブッシュ大統領とビンラディン氏との対立の円満終結を祈るばかりです。

いい切符手にしたよ君オーレオレ　良　子
自費出版ぼくの花火を打ちあげる　幹　斉

よろこびの二句。ワールドカップの切符よかったですね。そして三月二十一日は幹斉さんの花火を見に行きましょう。

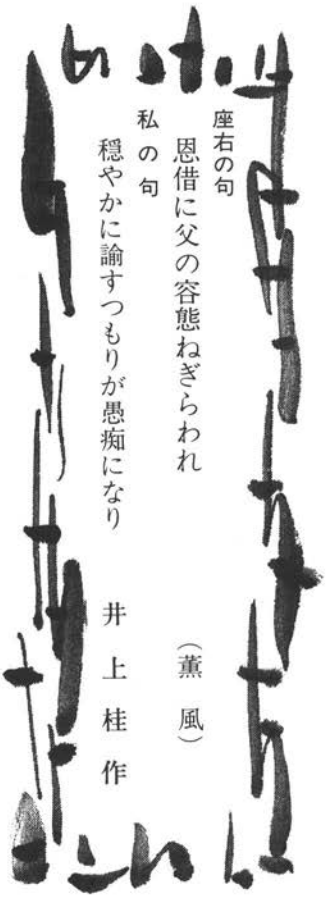
老骨だけ残して若い血に染まる　瓢太郎
老骨に鞭は打たない走らない　寿美子
老いて子にさからうように自立する　愛　恵

マイウエイを行かれるお三方はご立派。

花のある人が好き好き春の風　草　映
逢えるひと逢えないひとに賀状書く　比呂史
美しい日本語声を上げて読む　咲　二

ある年に絵入りの賀状を百枚書いて体調を崩し、正月を棒に振った苦い思い出があります。「年賀状はもう書かぬ」と決めたものの、毎年いい句を、特に今年のように私に馬力を下さる素敵な年賀状をいただくと、「ようし、来年も書くぞ」という気持にさせて下さいました。

七十年生きて知らないことばかり　たもつ
健康のほか欲ばらぬ年新た　あかり
笑いじわゆたかに今日がある余生　美與子
沢山の心こもった年賀状をありがとう。



座右の句
恩借に父の容態ねぎらわれ
私の句
穏やかに諭すつもりが愚痴になり

（薫　風）
井上桂作

川柳塔　二月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　年賀状の馬力……河内天笑…（1）
国文祭あなたの席をあけて待つ……小林由多香…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
自選集……板尾岳人選…（54）
水煙抄……東野大八…（59）
麻生路郎物語（2）……波多野五楽庵選…（86）
愛染帖……（91）
同人特集　夫婦百景（その一）……（94）
■エッセー「光秀様」……西村哲夫…（97）
誹風柳多留二四篇研究　38……（98）

国文祭あなたの席をあけて待つ

小林由多香

平成十一年十月号のこの欄に書く機会をもらった時、「今のわたしに書く機会、しゃべる機会を与えられればもう一も二もなく、平成十四年に鳥取県で開かれる国民文化祭のことを書き、しゃべることしか頭にない」と書いたが、今回もこのことになり真に恐縮であるがご容赦いただきたい。

鳥取県での開催が内定した平成七年から、全国の川柳仲間に訴えつづけてきたこの活動もあと半年ばかりで終ることになる。

去る十一月群馬県吉井町での第十六回大会で、「来年十月鳥取県鹿野町で会いましょう」と、大きな拍手の中で群馬県から鳥取県へ引き継がれた。正に胸の熱くなるような感動の場面であった。

「第十七回国民文化祭・とっとり2002」はいよいよ、「ふるさとふれあい夢づくり」をテーマに鳥取県で開催される。文芸祭川柳大会は十月二十六日鹿野町で「因幡伯耆の空にあふれる詩歌」をサブテーマとして開催が決まりプレ大会も既に終えたところである。

鹿野町長さんの「全町民で取り組みます」

苗香の花……宮西弥生選…(100)
「どうせ」……川内叭笑選…(102)
一路集「二」……中原みさ子選…(102)
「梅」……福原悦子選…(103)
初歩教室「ふらふら」……吐田公一…(104)
秀句鑑賞┌同人吟……森茂美…(106)
　　└水煙抄……長谷川呂万…(108)
追悼　椎江清芳さんさようなら……吉田あずき…(109)
各地柳壇（佳句地十選／野口節子）……(110)
柳界展望……(128)
二月各地句会案内……(130)
■編集後記……楓楽・義子…(132)

座右の句

凧の糸伸ばして風に逆らわず　（茗人）

私の句

僕いつも鉛の服を着ています　夏目健一

という力強い言葉どおり、本番成功に向けて人口五千人ばかりの鹿野町が燃えている。

大会の会場となる鹿野小学校そして体育館も、昨年四月城下町にふさわしいたたずまいで新築開校したばかりであるが、併せて川柳の小道など周囲の環境も見事に整備された。

更に頼もしくうれしいのは、町長さん、教育長さん、役場職員、町会議員さんの川柳への挑戦は涙が出るほどである。役場のロビーにはそれらの作品が展示されて、訪れる町民にも国文祭を強くアピールしている。

この大人たちに負けぬようがんばっているのが中学生、小学生である。中学校では以前からクラブ活動に川柳を取り入れ、熱心な活動ぶりは再三テレビでも報道されていたが、昨年からは小・中学校の全校生徒が地元柳人を講師に迎えて作句に取り組んでおり、その上達ぶりは実にすばらしい。

去る群馬大会では応募者数三千七百十八人、応募作品数一万四千五百九十二句の小中学生の部で見事頂点の文部科学大臣奨励賞、そして第二位の群馬県知事賞をも受賞して、大会成功に向けて大きな弾みをくれたばかりである。

静かな温泉、蕎麦のおいしい、人情味ゆたかな鹿野町が、皆様のおいでを心からお待ちしております。

「十月鹿野町でお会いしましょう」。

河内天笑選

サラブレッドよりも幸せ草千里
振り向かず忘れ上手になり生きる
シャネルより温い私はユニクロ派
聞かなくて済むことばかり馬の耳
掌に大事なことを書いておく
年齢という哀しさで自我を折る

富田林市　藤田泰子

ハナ歌の訳は春まで秘密です
熱く語って変人にされている
お返事に詰まるとセキが出てしまう
オツリはいいわといささか酔っている
復調を後ろ姿に見せている
クワバラクワバラ女の電話網

東京都　播本充子

貧乏の楽しみ方を知っている
試着室の鏡に同情されている
私の破れかぶれの自尊心

藤井寺市　太田扶美代

銀髪をおしゃれと言わす深い知恵
食べ飽きてまだ食べ足らぬ米の飯
好きにならないようにお返しを贈る

和歌山市　古久保和子

エビ跳ねるように咳する掛け布団
天袋二度と日の目を見ないかも
あの手この手も結局妻の守備範囲
一足の靴から父親のすべて
流行に遅れていても一張羅
草紅葉更地のままで年を越し

鳥取市　植田一京

極楽と地獄たっぷり生きてきた
まだ明日が明日があるさと積み残す
おまけかも知れぬ余生に花が咲き
ときめきもまだまだあって生きられる
ふる里の料理が今も口に合い
もう遥か昔になった始発駅

嘘ついているな目ン玉泳いでる
プロセスは問わぬ結果は棒グラフ
アフガンへ今は届かぬ白い鳩
帰る家あるからふらり旅に出る
スカタンをするから人間おもしろい
嘘泣きも少し覚えた女の子

香川県　川崎ひかり

人間の匂いがしない人が増え
役人の目隠しをする札の束
ある時は男になって生きる寡婦
歯車に油僕にはワンカップ
刑終えた人を赦さぬ世間の目
満点はない同居でも別居でも

宇部市　平田実男

クリスマス我が家もライトアップする
からくりを許せぬ正義疎まれる
褒め言葉下さい前へ進めない
十二月運命線が狂い出す
煩悩を停止　飛行機雲を追う
向き合って子等と丁寧語で話す

横浜市　清水潮華

杖ついて年相応の影法師
二本しかない脚だから大切に
昇りより降りがほしいエスカレーター

豊中市　田中正坊

テロ恐くないがツアーやめにする
死さまざま臨終図巻読んでいる
百年の歴史の中に僕もいる（大毎社会部百周年）

寝屋川市　岸野あやめ

初日の出元気印の三世代
喜寿記念古い手鏡買い換える
霞草一度は天下取らせたい
携帯は体裁だけでオフのまま
家計簿のピンチを母は悟らせぬ
メル友はこわい恐いと言い聞かす

芦屋市　黒田能子

五十回忌宴のような賑やかさ
一人でもライバルいると頑張れる
面倒見よくていつでも疲れ気味
堅物がユニークな服着はじめる
ITに無縁紙ヒコーキ飛ばす
雪原につけた真っすぐな足跡

岸和田市　原さよ子

ずばり言う友はけむたし有難し
飲み代はどこかでうまく操作する
多機能の携帯操作四苦八苦
肉騒動老夫婦にはかやの外
飾らない男の中にある温み
スポーツ紙のぞき見したくなる見出し

五分の魂(たま)わが菜園を食い荒らし
躾糸ゆるんだままで嫁に出し
年の瀬や黙って並ぶくじ売場
職安に行ってプライド捨てて来る
十五の娘嫌がる父の露出癖
露ほども神疑わぬ自爆テロ

唐津市　樋口輝夫

新宮に合わせがんばるやつも居る
餅花の余り貰った六地蔵
流失の頭脳が貰うノーベル賞
腹割って話せば分るお人柄
会長のご逝去先は内緒です
人形の無垢なひとみに裁かれる

唐津市　山口高明

皇室の産声敬や愛子姫
貸金庫にプールしてある保釈金
それなりに炎を包むAカップ
心やさしい芸者が下戸の傍に寄り
タリバンが逃げて床屋はヒゲの山
竹の箸泣き泣き金歯捜してる

唐津市　久保正剣

全身を笑顔に好きな人と逢う
パソコンは妥協する気がまるで無い
悔しくて寝つけない夜の詰将棋

香川県　瀧井勝

当り前の事を古老に褒められる
溺愛の猫がみっともない肥満
旅終えて帰る我が家は更に良い

香川県　神保坊太郎

横丁を曲りくねって来た噂
語り部となって話を掘り起す
徘徊じゃおまへんと花ほめてゆき
踏まれないとこへ飛んでけ花の種
衛星を跳ね返って来たい話
ネコまでが変な瞳で見る猫かぶり

愛媛県　中居善信

憎まれ役を演じ続けて黄昏れる
一歩手前で止める器量がまだ出来ぬ
草葺きの屋根にころころ雪が降る
ブランドの好きな女と居て疲れ
子連れでもいい嫁さんを連れて来い
若い人の特権だろう離婚劇

松山市　丹下美津子

謡い初め夫に合わす舞扇
天馬駆ける新宮さまのご誕生
胸張って重たい過去を切り捨てる
口は重法昨日の敵は今日の友
リストラは無いが残業手当減る
仕事にも馴れた自信か頼もしい（ローム3年目）

高知県　赤川菊野

借金もボーナスもない十二月
直線を歩く男の向こう傷
あんな男夫だったら串刺しに
今ここに私生きてる新世紀
ナツメロを唄うと青春顔を出し
宇宙から見れば地球はゴミの山

青森県　西谷大吾

借金も預金も無くて年を越す
初春へ一気に走る縄電車
吊るされた鱈の眼に雪が降る
とぼとぼと歩んだ道が黄昏れる
地吹雪に負けてはならぬ明日がある
忍従の橋を渡れば浄土かな

黒石市　相馬一花

世の中を丸く治める嘘とホラ
あかぎれもたこも知らないへそピアス
糖尿を癒してくれる雪が降る
よろめいて餅搗きをする老いの意地
饅頭もお酒も好きな二刀流
健康に見える人から逝く不思議

弘前市　福士慕情

言うことを聞かない子供　聞くペット
老母が呼ぶ子供の名前みんな言う
ハーモニカ忘れられない歌がある
砂文字のＬＯＶＥが残っている浜辺
秀才と悪餓鬼記憶する恩師
本流を避けてメダカと遊んでる

弘前市　櫻庭順風

運転の調子を覗く草刈機
直線に跳ねた礫は眼を抉る
右の眼を抉った礫泣くばかり
不意の怪我礫おろおろするばかり
おろおろを怪我が指示した救急車
失明が生徒でなくてよかったね

弘前市　蒔苗果林

峰の雲散るよに脳天から目覚め
目覚めると咳もすたこらころび出る
駸駸と現象を呑む深夜です
深夜放送切れば真冬の闇吼える
老いるほどお臍が曲るほんとかも
闇に溶ける心地眠りに合格か

弘前市　高瀬霜石

ああ無職妻の寝息を聞いている
錆止めになるから笑う泣く怒る
リフォームも柱の傷は直さない
見おさめになるだろう背に会釈する
あてにならない年金を今日も積む
明日からまた頑張るさ布団干す

弘前市　宮崎ヒサ子

知らなくていい事どんどん耳に冬
一本の電話師走を走らせる
鉛筆が左右気にして進まない
消しゴムが使い過ぎたと言っている
袋詰め川へざんぶと負の部分
葉を落しこざっぱりしたプラタナス

弘前市　今愁女

立春は名のみ津軽は吹雪　茫茫と
降り続く野辺のあたりに雪女郎
氷柱から点滴もらう四温かな
雪の上情死をしてる寒椿
軒しずく頻りに春を穿つなり
雪の憂さ逆さにとって雪まつり

弘前市　岡本花匠

情っ張りの津軽見直す冬ねぶた
胸底に鬼をかくまい豆を撒き
振舞の昇馬のごとく年男
三宝に帰依して福寿願う父母
冬越しの生きて喜ぶホッ懐炉
子は都　雪を褥の故郷の父母

東京都　後藤早智

真夏日を境に狂うカレンダー
ある時はシニアの列に押しやられ
老いたのか歌舞伎がとても面白い
クラス会幾星霜が止まらない
日本を留学生に透視され
黄紅葉脳が静かに洗われる

横浜市　菱田満秋

訓練は整然として避難する
戦死者を出さぬいくさは金が要り
知恵くらべカラスにいつも負かされる
一匹の猫が入院許さない
野良猫に遭い目の奥を覗かれる
売っているから禁煙が続かない

横浜市　保田絹子

早足のそれより早い歳の暮
粗炊きに猪口一杯の至福顔
小春日に浮かれくしゃみに襲われる
音読をして大脳の活性化
手探りのニトロで命拾いする
万葉の断片綴る明日香路

川崎市　和泉あかり

笑っても孤独は音をたててくる
タンポポがはりついている線路わき
ウエストをまかせたゴムがゆるみだし
おもいだし笑いが好きな一張羅
二世帯をつなぐ階段疲れぎみ
聞こえないふりで元気をとり戻す

静岡市　安本晃授

矢印のない一本の蟻の道
仕合せを知ると靴音軽くなる
尾を振らぬ男を裁く風の精
風に叛く己を縛る縄をなう
春の辞書買って万花を揺り起す
割腹の刻を描いている冬木立

さいたま市　八田敏

咲き終えて大輪菊も地に還る
丹精の菊始末する辛さかな
冬至芽に夢を託して菊の処理
ベランダは秋から春へ早替り
寒い日と風には休む万歩計
炬燵から戦争を見るドラマ並み

富山県　増田紗弓

想像の壁をつくっている内気
身上書虫くい跡も彩になる
美人だと思わないでネ名前から
予報官気の毒そうに雪だより
生きものがいる足跡を雪の中
脱輪へ知恵があれこれ寄ってくる

富山市　島ひかる

手の届くところで富士を見た歓喜（金時山から）
マサカリを担いで富士をハイポーズ
金時茶屋　強力の娘が守りぬく

ささやかな気持夫へ長寿箸
青春キップ楽しんでいる時刻表
馬が合うはずだ一緒の干支だもの

京都市　小西未佐子

若いねにニンマリせぬはいくつから
意地になり乗る一日の乗車券
いらん事考えぬようばたばたと
出したなら当るが如く言うラジオ
炊きたてに胡麻塩飯の上はなし
積み上げた趣味教え合う老いたのし

京都市　高島啓子

幼稚園からラブラブですぐ大人
定位置に爪切り判子おいてある
分身の術で生きてるかすみ草
公平な評価がイチローに下る
目には目を私もしてたことがある
初恋の人亡くなっていた同窓会

和泉市　岡井やすお

天上から地下の土竜は叩けまい
午年の初午不況蹴っ飛ばせ
如月や月給二日分何に
開け放ち炬燵囲んで雪見宴
大阪城花見魁梅林
腰曲げて花見せている梅の枝

加齢と共に失うものと得るものと
旧友と再会果し気を貰う
おばちゃんと声かけられてほっとする
ああんと口を預けた歯科医好男子
いとしこいしの綺麗に老けて芸に味
人ごとと思った八十路目の前に

茨木市　島元ふみ

修善寺に源氏の哀歌語る湯気
体重をぐんぐん増やす宿の膳
不況ですホテル何処でも空いてます
開国へお吉も努力した下田
妻に来た花束写真撮らされる
階段は知らず知らずに手摺り持つ

交野市　森本弘風

悲しみよ縁があったらまた会おう
宇宙有限神はどこかにきっといる
くわえ煙草でギャルが運転するダンプ
万馬券馬も笑ったように見え
窯だしの皿名人は割り続け
坂道はそっと女房に手を添える

河内長野市　加島由一

祝砲はとどかぬ町の青テント
爪を切るひと時僕に返ってる
はるかな空舞いたく風を待っている

岸和田市　岩佐ダン吉

欲のない男に負けてばかりいる
憎しみを捨てて私も軽くなる
良い人に会った一日燃えている

堺市　河内月子

梅さくら花芽をたんとつけてくれ
バス電車座ってるのは若い人
トイレにもストーブ置いて冬仕度
真夜中のぶきみ枯葉の落ちる音
月高くコンビニの灯の温く温くと
ガサガサの足にクリームをたっぷり

堺市　志田千代

富士山は侵略されたことはない
暇だから氏神様へでも参ろ
メガネかえ爺の頭痛が続いてる
てにをはの間違い妻の乱となり
のそのその冬のゴキブリ足をする
道問うた人よあんじょう着いたかナ

堺市　源田八千代

待望の新宮様に沸く日本
魁けて寒梅凛と香り立つ
朱の鳥居くぐり梅見の列につく
天神さんで翡翠の牛のストラップ
年ごとに鬼遣らいする声の減り
福豆も歳の端数を食べるだけ

大波小波母が病む兄が病む
紅一点まじりネクタイ派手になる
ここいらで捨ててしまおう女偏
一冊の詩集と好きな椅子にいる
ライバルも賞味期限が切れました
昼御飯すめば夕飯待つ夫

吹田市　山本希久子

新聞を隅まで読んだことがない
退屈になると一言多くなる
パソコンも妻も相手にしてくれぬ
律義にもミスを咎める改札機
納得がいかないままに幕が下り
一人でも乾杯したい時がある

吹田市　石原靖巳

寒い朝熱い味噌汁美味なるか
淋しくて赤いセーター着ています
気分転換に皿洗うよい時間
若いけど解る言葉でよく話す
寂しくて女独りの厚化粧
化粧する鏡に嘘を見抜かれる

吹田市　大谷篤子

敬愛の愛にあります倫理観
隣国に孔孟老子ある深さ
駿馬駄馬それぞれの役生きている

吹田市　瀬戸まさよ

狂牛病鍋は魚の総出演
逃げて行く二月私は追いかける
子育ての知恵の交換咲くベンチ

高石市　浅野房子

これからが冬本番だ春遠し
治らぬと分っていても医者通い
炊飯器だまって捨ててある乱世
負けるのが分っているが吠えている
文明がにんげん怠け者にする
わたくしが飽き性だとは思わない

豊中市　吉田あずき

不況風わが身に合うて暮しよし
何もかも無から造って来た自信
忘れたとはっきり言える歳となり
季のうつり感じ取るのもゆとりなり
いのち産むはかり知れない神の業
ライバルと同じ痛みだこらえねば

箕面市　岩津ようじ

旗を振れはーい尻尾も振ってます
誤爆でしたで片づけられたその命
この病気治りませんと医師保証（肺気腫）
神さまの思し召しかもこの不況
天命に逆らうごとしクスリ漬け
金持ちはケチケチだから金貯まる

羽曳野市　三好専平

フクちゃんもアフガンの子と握手する
テロの余波守礼の門に人が来ず
プーチンがアメリカの尻追いかける
アップでは撮るなと妻があばれだし
夢ひとつあればなんとか生きられる
三日坊主が十年日記買うてくる

羽曳野市　吉川寿美

喝采なくともわたくしなりの春を舞う
一つ捨て一つ拾って荷が馴染む
身の裡に未だ茜を抱く生よ
羽音高く孫の巣立ちも遠からず
鍋磨く忘れ上手になりたくて
ウソ泣きがとってもうまいコンパクト

東大阪市　谷口義

若い人にこちらから挨拶をする
若いころの写真はなぜか恥ずかしい
帽子かぶりたったひとりの人を待つ
食物の好き嫌いならないのだが
外に出てみんな無口になる二月
成程と思う戒名つけてある

枚方市　寺川弘一

変換キー押すだけでよい文化です
愛してるから同じ深さになる痛み
それもよしどうやら孫も世渡りが下手
土に還ればみみずの餌になるもよし
間違いないさこんなに長い列だもの
明日があるから簡単に今日過ごす

枚方市　海老池洋

願いごと叶わなくても初詣で
神様に白紙委任をするいのち
歓迎会盛大過ぎた左遷の地
お前も犬かチワワ　チンチラ　マルチーズ
過労死と重ねたくなる落ち椿
褒められて背伸びの直らない私

藤井寺市　高田美代子

枯れ葉ほろほろ何時まで流転くり返す
ストレスは預けて初春の酒を酌み
喜んでお受けしますと頼もしい
お別れも出会いもちょっとした刹那
タイムイズマネー朝寝もしていたし
横綱は外人さんで国技館

藤井寺市　鴨谷瑠美子

クリスタルグラス　キラリと神がみえ
風の中淋しく凛と木守柿
ハンガーに女の宴の後がある
他所見してお手する犬は妻に似る
寄せ鍋に話す気持で食べている
ほどはよし宴たけなわに黒田節

八尾市　髙杉千歩

鬼遊句集北へ南へ旅立ちぬ
鬼は外もう豆まきはやめました
如月やさてこれからの処世術
妻という字がなつかしい小雪舞う
よくやったひとりよがりの冬炬燵
ご破算になるまで余生楽しまん

八尾市　宮崎シマ子

茶柱ものみこみ今日の賭に出る
声かけられ思案がふうと空にとぶ
同居してルールは嫁に合わしとく
雷が鳴ると北国雪になる
つれづれに開けたアルバム喋りだす
古時計夫は軽い脳梗塞

八尾市　高橋夕花

縁あってふたりで登ったきつい坂
まつたけに遠いわが家の栗ご飯
年甲斐もなくバラ大輪に憧れる
哲学のみちはゆきつもどりつ恋
シクラメンの愁いがつづく風の町
菊盛り老いにし人の美しさ

八尾市　吉村一風

熟れた柿おいしい色で青い空
長風呂を確かめ合うて老いふたり
見直されおからよろこぶ母の味
飽食の世に渇くことばかり増え
会釈する眼が温かいやわらかい
話しかけると花ゆれながら笑ってる

八尾市　神原まさと

凡才は秀才の苦が分らない
孫入院爺はうろうろするばかり
一匹になった金魚が動かない
あの列はボジョレヌーボー解禁日
砂糖より甘いと舌が言う熟柿
子も孫もクワイ食べる気ないらしい

八尾市　宮西弥生

新宮の未来寿ぐ幕が開く
玄奘三蔵山河いくたび道を説く（薬師寺にて　2句）
三蔵のロマン癒しの弦弾む
四季咲きを待つ枝ぶりも冬の章
よいこらさ同い年寄り冬登山
シナリオにない突然が来たある日

八尾市　井尻民

それなりの夢追いつづけ七十路
縁起いい靴で父さん送り出す
穏やかな笑顔を置いて去って行く
ため息をつける居場所を探してる
札束を枕に春の夢を買う
必要とされてばあちゃんいい笑顔

八尾市　生嶋ますみ

親ばなれ出来ないままに親になり
半額セールちょっと派手目はがまんする
迷惑をかけないための医者通い
十分もすればたこやき入る余地
病む人にリンゴせかせかすりおろす
あと何回箸をとるだろ誕生日

大阪府　澤田和重

乗せられて踊るアホーにされている
美容師の好む頭で気に入らず
皮サイフカードがでかい顔でいる
玄関とトイレは掃除手を抜かず
使いようで恐い包丁研いでいる
うんざりの聞き手相槌ずれている

大阪府　米澤俶子

饒舌な女無口を煙たがる
その時はその時なりと腹くくる
オーバーなお世辞の裏にある悪意
良妻度六十点が限度です
安心を売りに保険屋ノックする
思い出になれば苦労もなつかしい

大阪市　前　たもつ

平凡な暮らしを願うお元日
人並みに古稀を迎えて誓うもの
妻に書く誓約書なら教えます
忘れぬよう誓いを書いて貼っておく
表向き誓詞通りに四十年
氏神さまに果せぬ誓い詫びに行く

大阪市　西出楓楽

空港でちょっぴり被るテロの余波（マルタ島紀行）
イムディーナの街は迷路で人不信
商人のシャイへ買わずもがなを買う
地中海の碧に溶け入る昼の月
フランクフルトでフランクフルト食べました
命名は愛ちゃんと知る旅の空

大阪市　神夏磯典子

ガス　電気　まだまだ安心出来る国
隠し芸ああの人も庶民だな
まだ欲しいものがあるから大丈夫
うどん屋でやっと重たい荷を下ろす
テロ悲し狂人病かも知れぬ
無駄口が多くて蓋がしまらない

大阪市　川久保睦子

飲む友も注ぐ友もなしロゼワイン
秋だから輝いてみよ草紅葉
過去の修羅消そうわたくし髪を切る
スカウトの目が原石を見逃さず
タンポポが古里を恋い風に乗る
美しい彩だ空気まで美味しい

中流の意識失くしたおつきあい
つらい日も泣くより笑うことにする
野心持つ熟女が増えて姦しい
心にもないこと言えと影法師
安いからバナナ気安く食べられる
楽しみは深夜ラジオできく落語

大阪市　板東倫子

ゆっくりのリズムに合わす老いの馬
纏め役上手になったお人好し
いつ来ても菊人形は美しい
団欒はポチ中心にして平和
亀の歩み私も傘寿一歩づつ
午前さま刺身の色が変ります

大阪市　鈴木トヨ子

陰徳を積んで己をいやしてる
この地球いくさで人口調節か
鳥達も師走の空を飛び回り
久し振り国旗アイロンかけられる
レントゲン納得出来ぬすねの骨
宗教も多種多様あり恐いこと

大阪市　小林トメ子

ロボットに負けぬ誇りの作業服
若き日の誓いが少しほろ苦い
晩学の辞書に眼鏡と虫めがね

大阪市　小林周信

ひらめきを求め多めに唐辛子
明日まで黙っておれぬいいニュース
相槌も打って油断をさせておく

大阪市　大塚節子

つわぶきが寄り添うように庭の石
外は雨一人くず湯を飲んでます
冬蜜柑器量よしから手がのびる
ガス燈に一羽毅然とゆりかもめ
ひよどりが落していった枇杷の種
ご機嫌の悪い紅葉が散り急ぎ

大阪市　奥村五月

スタッフと認められずに縁の下
丁寧に挨拶くれる茶髪の子
外車乗り家賃三月もためてはる
ばあちゃんが家で一番お金持ち
グルメ族終り明日からダイエット
山ほどの苦労をしてもやせぬ母

大阪市　清水絹子

友が来るわたしも好きなおぜんざい
女友達だけが元気な同窓会
若い日の失敗談を子にきかせ
地雷ない国に産まれて四季に花
陽が上がるよいしょの声や生駒山
エスカレーター亡父の帽子にすれ違い

大阪市　中澤伽羅

歯を磨く心おきなく食べてから
言い訳の額の汗はほんまもん
ぼんやりとしているようで抜け目ない
体力は無いが口だけ達者です
根が正直言うて言いたいこと言うて
紙屑を広げ直して探すメモ

大阪市　津守なぎさ

白内障の手術済ました除夜の鐘
また鳴った元気の証拠腹時計
寝もやらず時待ちかねた流星群
影法師月と対話をする散歩
一口の水が嬉しい手術あと
追い越すと追いかけてくるカーチェイス

大阪市　川端一歩

デコボコの道を歩いて元気なり
失業者三百万の越冬譜
きのうより漢字テストがよくなった
真珠婚知らぬ間に過ぎている
ボーナスはないが仕事が忙しい
ユーモアの分かる人ならついてゆく

大阪市　清水利武

血と汗で納めた税を無駄遣い
安くても今更背広買ったとて
銀行が何で献金するのかな
老人の懐狙う介護保険
角力取　浪花の春をふれ太鼓
川柳塔昼の句会で活気づく

伊丹市　山崎君子

戦の文字花にかえたい初詣で
万両沢山あかにとけこむ車椅子
寒い夜温い夢見て若返る
広場うめてカラスサミット不気味なり
タコ焼がバラの香を消す昼さがり
金髪も福笹を売る今戎

川西市　西内朋月

酔い醒めの水差しがある枕もと
夕暮れになれば忘れる二日酔い
新聞も本も斜めに読んでいる
てっちりが恋しくなってきた夜寒
嬌声の輪からはずれて飲んでいる
黄いばんだレシピが残る台所

川西市　米原雪子

食事より散歩待ってるポチの顔
暗い世に輝く姫の御誕生
触れてみて納得してる老婆心
味覚の秋体重計は無視しよう
絵手紙を見つめ優しさじんわりと
リストラに企業戦士も影薄く

三田市　久保田　千　代

発想の転換はかり謎解ける
辻褄を合わせた嘘が見えかくれ
飾ること止めて本音でおつき合い
子沢山親と住むのが名乗り出ず
人らしく生きる顔して税をはね
当たるはずないと買ってる宝くじ

西宮市　西　口　いわゑ

一巻の絵巻の如し銀杏散る
秒針に深夜のいのち刻まれる
お互いにねじを巻き合う夫婦です
叱ったりほめたり鬼を手なずける
すすきの穂突然消えてみたくなる
ひたすらに歩いた道だ悔いはなし

西宮市　山　本　義　子

都会ぐらし七彩の服着て眠る
横着を息ぬきなりと笑い生く
見た目だけの優しさなんか無用なり
体型でケチと言われたことがない
嫌いきらい言うてる頬が笑ってる
老いた膝に雪の穂高をインプット

西宮市　門　谷　たず子

老いの円周ふたりの回転木馬かな
番外編旅の途中の俄か雨
泣き言は言うまい夫と障子貼る
神の采配素直に受けて生きのびる
余生とやゆるり草食む駄馬二匹
年月の重さ軽さよ花暦

西宮市　緒　方　美津子

おでん煮て妻の忘年会つづく
戦の字の絶えぬ新聞やるせない
戦争は嫌といってるサザエさん
譲られぬ嬉しさもありまだ女
犬好きは犬に油断をしてしまう
夫の顔側にいるから見ていない

西宮市　菊　池　トミヱ

湖東三山紅葉の下を寺に行く
銀杏散る真っ直中の御堂筋
時雨来てスカーフかぶる紅葉がり
突然が一番恐い独り者
公園のベンチ一人でだれを待つ
除夜の鐘噛んで含めて諭すよう

尼崎市　長　浜　澄　子

ひょんなこと思い患う冬の雨
姑逝ってまだそのままの小抽出し
きな臭い話を拒むヘッドホン
ひたむきな風に誘われ無垢になる
立ち入らぬ線心得る雪やなぎ
迂闊にも同じところで泣かされる

尼崎市　春城武庫坊

やる気出す胸一杯の深呼吸
花を見る歳には歳の思いあり
落葉浴び我が人生を振り返る
頑張ったなんてほんまか雲が聞く
鳩時計昭和の声で鳴いている
十二月八日わからぬ人にまた出会う

尼崎市　春城年代

櫛の歯のこぼれおとうと帰らない
万葉よりねじり花咲くなつかしさ
二の腕の太さを疎む先祖代々
叶わない希望大事に抱きしめて
体質のアレルギーやだねったらやだね
罪のない聞き違いを許される

兵庫県　大谷幸次郎

不都合は落葉で隠し山眠る
雑草という草はない野草展
寺の屋根ペンペン草が目立ち過ぎ
行く秋を揺れて教える枯薄
見るだけの買物だろう妻の伴
貧しさと戦う日々が家計簿に

奈良県　渡辺富子

それぞれの正義へもめている世界
ジハードへ人間のエゴ見え隠れ
デュエットをしようと女目で誘う
ジベタリアン大和撫子死語にする
生きるためこっそり涙拭くピエロ
みちのくの情っぱり煽る雪が舞う

和歌山市　桜井千秀

淋しさをバネに磨きをかけて置く
四股踏んだ跡見に戻るふるさとよ
瞑想の真っ只中に流れ星
天秤にかけられ無念噛みしめる
耳鼻科の椅子で気付く私の誕生日
収集癖子供の頃もそうだった

和歌山市　福井桂香

うたかたの夢をまさぐる冬薔薇
急いでは改革の風宙に舞う
一杯のそばで心を揉みほぐし
百薬の長へ胃ぐすり手放せず
手抜きした夕餉の膳に並ぶ寿司
現ナマの凄さ口元がゆるむ

和歌山市　木本朱夏

イタリアの長靴が蹴る島マルタ（マルタ島紀行）
神殿の岩の割れ目をかたつむり
甲冑の騎士と腕組みハイポーズ
中世の城塞浮かべ海蒼し
ポンコツの日本車走る旅愉し
マルタ遠望蜂蜜色に霞むなり

割り勘で本音の酒が飲める仲
例外の規定が生んだ社の疑惑
事故のつど不備欠陥が顔を出す
口下手がこんなにホロリさす手紙
戦友会出世頭は一つ星
物不足の頃にはあった人間味

和歌山市　青枝鉄治

トップの座へわんさストレス抱え込む
なあにこれから亀はぼつぼつ歩むのだ
未練などさらさら無いという未練
列島を隈無く襲う不況風
もみじより食い気の妻と京の旅（秋の京都　2句）
方向音痴の妻よオイオイ何処へ行く

和歌山市　田中みね

神様からまだ荷下ろしの許可がない
明治生れ米にこだわる朝ごはん
身の丈に合った暮らしが温かい
雰囲気が好きウーロン茶で乾杯
故障したもの揺すって叩く癖抜けず
愛子姫と決まり地球がみんな沸く

和歌山市　吉村さち子

クリスマスツリー輝く寺の庫裡
じゃんけんを真顔でしてる差し向かい
仏像の豊かな耳に蓋せねば
不況などどこ吹く風の丸い鼻
暗転の間に食べるにぎり飯
命ある限り夕焼け唄う窓

和歌山市　楠見章子

二人三脚時の流れに逆らわず
新しい私に出合う誕生日
春を待つ私の胸の花畑
信心を真似る父のごと母のごと
着メロが私わたしという娘
追い越されました若さと負けん気に

和歌山市　牛尾緑良

神さまの気力が樹々の芽を揺らす
現れる夢の生家にちちとはは
妻木晩田（むきばんだ）歩けばロマン眠る土地
生真面目なわたしジョークが笑えない
牡丹雪の軒まで響く朝の鉦
胸のすく科白も同期だから言う

米子市　林瑞枝

鳥たちに聞きたい話溜めて冬
山彦のように反応する仲間
賑やかな席が大好き耳の穴
お茶席は諦めている膝小僧
嬉しくて悲しくて振る鈴一つ
地獄にも極楽があり蜘蛛の糸

米子市　木村富美子

米子市　政岡日枝子

振り向けば己の影に脅かされ
冗談を握り傷だらけの両手
因縁をまたいで仲間になっていく
信仰の山に禁制生きている
間引き菜のやさしい味を食べている
間があくと悪い噂が湧き上がる

米子市　鷲見正子

奉加帳本家の嫁の後に書く
拘置所に在る日の丸が目に痛い
のら猫にみんなやさしい遊園地
牛の目は慰めなんか受け付けぬ
還暦の証　入れ歯を手に入れる
父ちゃんが信仰をする山の神

米子市　澤田千春

アルバムに笑い転げる旅一つ
父が吹く笛　魂をゆりおこす
母そっくりと言われ何とも複雑な
困りはてそっと振りたい母の鈴
快いときめきくれたガイドさん
人生の迷路にほしいリトマス紙

米子市　田中亜弥

トンドさんの燃え具合から吉とする
わたくしを燃やす藁ですうず高く
口コミのうどんわたしが偵察に
鍋焼に情けを入れてくれました
価値観の違いゆずれぬものがある
余生とは楽にくらせる部屋がよい

鳥取市　武田帆雀

運動ですよありがたい雪を掻く
花と光とメロディーの街歩く
店舗改装伸るか反るかの十二月
みの虫はあれで極楽ブーランコ
無駄力出さぬのんべんだらりなり
泣かせたのは左　拭いたのは右の男

鳥取市　倉益一瑶

万華鏡　恋の破片を詰め込んで
まだ赤を翼の下に秘めている
行方不明の魂さがす黄昏よ
花道のないまま消えてなるものか
ウインクで孫がわたしの骨を抜く
透明な時間船旅から拾う

鳥取市　徳田ひろこ

聳えたつ塔を空っぽにはできぬ
嬉しさを増幅させるロゼワイン
なるほど偉いとパソコン褒めてやる
どじなのは貴女ご存知だったはず
照準が合うまで破門して欲しい
飄々と生きて峠はどの辺り

鳥取県　埒　寛子

コウノトリ女帝をおつれしたのかも
無礼講というが課長は地獄耳
慇懃無礼まかり通って御当選
おくやみ欄に彼を見つけた朝のこと
事故現場目をそらしつつ手を合わす
補聴器はいやな話でつまり気味

鳥取県　谷口次男

ニュータウンいろんな訛往来す
色気ある矢切の渡しの渡し船
テロ以来飛行機見ると斜に構え
ハワイにも那覇にも行こう安全だ
口だけが元気で困る人もいる
ひっそりと死んで静かな葬儀なり

鳥取県　鈴木公弘

来る年も生きる予定の賀状書き
めし食ってから難問は考える
ご近所のお叱りたまにありがたい
嘘うまい人を司会にしておこう
戦争は止めろ止めろと武器を売る
資源ゴミ姿を変えてまた会おう

鳥取県　新家完司

海鳴りは溺死者たちの唸り声
人妻の夜を想像せぬように
バブル期に買った金庫が欠伸する
振り向けば薄紫の貧しい日
挨拶もせずに死ぬとは失礼な
合掌の意味は異教徒でも分かる

倉吉市　最上和枝

こちらから笑えば赤ん坊笑う
いい友と喋ればお腹空いてくる
花だって笑っていない時もある
ありがとうの五文字を何時も持ち歩く
混み合いを茶髪に席を譲られる
好感を持ってる人に無視される

倉吉市　米田幸子

空っぽの頭で策を練っている
火遊びをしたと背中に書いてある
借金と親をセットで引き受ける
神様の死角で爪を研いでいる
ありがとう何度言っても言い足りぬ
胸に穴ぽっかり開けて子の船出

倉吉市　淡路ゆり子

出る杭は打たれて強くなる世間
やる気だな釘が真っすぐ打てている
向かい合う炬燵で夫の髭伸びる
ありがとう病んで他人の情け知る
ストレスをいやす安物皿を買う
地球儀を回して探す水飲み場

島根県　多々納　テル子

胸底の悩みを癒す鈴をふる
四コマの漫画のように今日も生き
迎え火の静かな海へ神集う
流れには素直に添うてついて行く
ありがとう唯それだけで和む愛
ひとつずつ予定を畳む年の暮れ

島根県　伊藤　寿美

二人だけの縄電車です降りないで
病院から帰れば誰も居ない家
擦れ違う人皆幸せそうに見え
気がつけば枯野に立っているわたし
凍てついた心が滑る冬の景
冬晴れ間寒い言葉を裏返す

松江市　銭山　昌枝

ハックション厨で朝が動き出す
毎朝の味噌汁の具に期待され
嫁姑闘い抜いて七回忌
ああすれば痩せると解っていてやらぬ
錯覚で四十余年一つ屋根
可も不可も無くて第九で締め括る

出雲市　竹治　ちかし

上だけを眺めて暮らす深海魚
幸せが過ぎると消化不良する
人間の勝手で決める美男美女
簡単に大往生と他人は言う
わたくしの手帳に棲んでいる私
その道の人にはすごい只の人

竹原市　小島　蘭幸

師の一句やがて涙になってくる
五十三歳になってもやんちゃばかりする
師は風になった私は葦になる
風に包まれてやさしくなる羅漢
四コママンガで終る人生なのだろう
父のふところにあるのはきっと淋しさだ

竹原市　時広　一路

筆不精一筆箋で足りるペン
慰めてくれるつもりか海の凪ぎ
目覚しを遅らせている乾電池
寒風へヌードで踊るサルスベリ
満腹感知らぬ賽銭箱である
いい日旅立ち歳に合わせて組む予定

竹原市　森井　菁居

保護色の敵にうっかり気を許す
祝ロイヤルベビー師走の風温し
電子辞書持ってなくとも生きられる
縄文の原風景を見た洞
アクシデント神の戒めかも知れぬ
心凪ぐ等身大の影法師

美祢市　安平次弘道

わがままな女に夢を破られる
要領が悪くて義理が果せない
裏切り続くめまいがひどくなる
皮下脂肪秋から冬へ溜まり出し
朝昼晩薬飲むのが仕事とか

唐津市　仁部四郎

世界史は神が書いてるわけじゃない
世界史に不動の地位の国はない
一面にキッタハッタと国の旗
一面で偉人に見せる首相たち
人類の歴史に俺も一頁

唐津市　宗水笑

職安にプライド捨てた人の列
事件にはしない内輪の吹出物
十二月愚鈍の者も忙しかり
お互いの達者が嬉し年賀状
達者かの外はどうでもよい年賀

唐津市　井上勝視

赤信号みんなで渡る族議員
母娘には父さえ拒む埒がある
悪友が財産だったといま気付く
ああそうか一周忌かと他人事
あれこれと遺言じみる手術前

唐津市　市丸晴翠

携帯にだけ喋ってる反抗期
六度目の悍馬に春の風が凪ぐ
退職の父のバトンに母元気
食卓に薬忘れて母元気
根回しが効かぬ野党の議員席

熊本県　岩切康子

マッサージ眠った細胞起こさせる
道すがら峠三つの綾錦
本物の餅花確かと見届ける（吉井町）
またひとり友達癌にさらわれた
遅くなりコンビニ通り宿に入る

熊本県　高野宵草

通院の時間も惜しい師走の陽
店味でおせち今年は我慢する
カラオケで流した憂さに酔っている
洋と和の神のハシゴで呑みまわる
霊長の自然淘汰か武器さわぐ

熊本市　永田俊子

職探しに私心を捨てたイエスマン
ガム噛んで喜怒哀楽を押し殺し
狩猟末裔やっぱり男は武器が好き
世を嘆き欄間を睨む鬼の面
アドリブが上手でつなぐ花言葉

香川県　清川玲子

水たまり身繕いする恋雀
即答が出来ぬ献体するしない
政治家の答弁善処で切り抜ける
火縄銃が手柄話をしたいらし
温もりが欲しくて路地の店に行く

香川県　池内かおり

天体ショー星のシャワーを浴びている
底冷えの街に夜業（よなべ）の音が無い
ユニクロの店にも慣れたおじいちゃん
カルガモを皇居の堀に浮かべたい
ふかふかの布団で飢餓の子を思う

香川県　成重放任

月光仮面孫の相手に疲れ果て
旅先でロマンが咲いた恋女房
あの人が逝ったと安堵する人も
鈍痛に手術の覚悟決めさされ
すき間風内緒話をもってゆき

松山市　宮尾みのり

系図まで持っていそうな古都の鹿
親として楔見えない処に打つ
三度三度一緒に食べている不満
カラフルな女で嘘も身にまとい
地球儀を回し日本は有難い

高知市　北川竹萌

まごころへ真心返る海苔の味
蕷蓣（やまいも）を送る返しの昆布くる
食べ物は美味い人生これからだ
九十入りほっとする間もなく忙し
酒二合夫婦楽しく夕餉済む

砂川市　大橋政良

朝の茶にいいおとずれがあるだろう
風船の空気が抜けてゆくあせり
ネクタイの上を転がる美辞麗句
底辺にうずくまってる僕の影
人生の節目傘寿の傘の中

弘前市　一戸ツネ

饒舌の影は孤独の泣き上戸
絵の具皿きれいに洗う十二月
難聴もかすかに分る弥陀の声
人生をガラリと変えたホームレス
冬の窓玻瑠ポロポロと人恋し

弘前市　高橋岳水

冬将軍怖るる心待つこころ
死に恥を掻かない程の身だしなみ
人混みに紛れて募る孤独感
生き残るための泥水なら啜る
忘却の森をさまよう痴呆症

胴巻に鍵を下してパスポート
三割の負担風邪も引けません
物置きがないからゴミにしてしまう
モンゴルに食われてしまう大相撲
同居して水の量にも気を遣い

弘前市　須郷井蛙

欲望は溜池に沈んだままだ
血圧が上がって煙草止める日々
三回忌真の別れをははに言う
根回しと媚びを売ってる猿芝居
失望を隠す挫折の舌下錠

弘前市　小寺花峯

時として濁りもするが母の詩
遠い日のあれもこれもがセピア色
四割減反帳尻割れる米づくり
藁焼いた空にちちへの木守柿
計画の昨日も今日も雪に消え

弘前市　相馬銀波

もう一度巡りあいたいあの女に
人当りソフトで芯は頑固者
リストラの友に出逢った万歩計
もてなしに心がなごむ里帰り
綺麗ごとばかりでこの世生きられぬ

十和田市　阿部進

出る杭に育てた母の塩加減
無料パス賞味期限が伸ばされる
宴会にまず和ませる音痴役
銀行を助ける利子をくれてやる
感動とさくらも混じるアンコール

横浜市　菊地政勝

つくるより買って済ませる節料理
えり巻きの狐に光る擁護の眼
ゆずられた席にまだある躊躇心
皇室も女人時代という噂
動物も生きる権利で山を下り

横浜市　小野句多留

腹立った顔を鏡が宥めてる
足が向き気が向く方へ一万歩
宝物それは私の元気です
女房を褒めて貶して愛してる
日記帳三日坊主が溜まってる

横浜市　田中笑子

治っても風邪が心に巣くい出す
はしたなくつい誘われて投げキッス
いい人が好きになれない何故かなあ
会場で会えない人が居たトイレ
いい年がいい年してと言う勿れ

横浜市　山下省子

母からの地酒飲むなと添えてあり
魂の宿ることばがとぶ叱咤
隻腕で泥舟支えくれた恩
夫婦茶碗のまわりに暮色しのび寄る
迷惑な話黙ってめがね拭く

富山市　舟渡杏花

定年が過ぎて侘しい長い影
俄か主夫炊事に動く長い距離
湯を沸かすだけで独りの朝になる
サポーター並みに疲れるハイビジョン
猫の目の届かぬ陰で衣替え

富山市　酒井輝

幸せは干した布団の陽の匂い
妥協する味と値段のヤジロベエ
大切な事も忘れる日を恐れ
漬物の我家自慢が出る季節
他所の子のちょっと見ぬ間の育ちぶり

可児市　板山まみ子

下校の子紅葉の道を一里半
先生に自己診断を先ず述べる
会合に媚薬少々盛ってゆく
赤い羽根胸に福祉を説く講師
寒くなり女房の味が濃くなれり

静岡県　薗田獏沓

早春の富士晴れ渡り句が生まれ
セピア色の父母の写真が宝です
主治医に守られ永らえる米寿
連れ添ってダイヤ婚へと命延び
事もなく台風去って茜富士

富士宮市　渥美弧秀

生きている只それだけで罪である
釘を打つぐらいは出来る日曜日
給料の差は人間の差ではない
掛け声がないと登れぬ八合目
世話やいてそれで結構嬉しそう

愛知県　早川盛夫

盾突いた頃が懐かしい三ヶ日
飽食の街で元旦鮭茶漬
ジェスチャーの大きい人で淋しがり
厚生省許可疑いもなく取り寄せる
住所不在にくたびれ戻る賀状

京都府　稲葉冬葉

国際的援助交際する日本
信仰にがんじがらめの死への使者
ＩＴを神の声ほど信ずるな
同じとこばかり読んでる眠た目で
音がせぬ雨よ干し物忘れてる

京都市　都倉求芽

半世紀のドラマ抱えて一堂に（小学校同窓会）
次々に起る人の怪神の謎
カニを食う味覚も海も旅も好き
事多き年に学んだ驚いた
孫四人夢が広がる今世紀

亀岡市　井上森生

ジーンズにダイヤが光る長い指
温もりのお寺に似合う寒椿
雪面に赤い椿の団らんよ
乱れ咲く椿は失恋を知らぬ
ウォークの楽しみ増えた喫茶店

大阪市　松尾柳右子

ロボットに勝る笑顔を持っている
分ってる名前の出ないもどかしさ
テロ事件見ながら安定剤飲んだ
逆立ちをしても贅肉行き場なし
水よりもガソリン安く買えるらし

大阪市　榎本日の出

書き終えた賀状抜き取る訃の知らせ
地響きを立てる作業も暮れの街
もてなしの心ほこほこ雪景色
七色のくすり出揃うデイパーティー
健康な自分にあげる努力賞

大阪市　津守柳伸

歯車が合わなくなってまだ夫婦
勧誘員水もしたたるいい男
うっかりとちゃっかり夫人秋の旅
紅葉をくねくね見入るいろは坂
旅帰り膨れたカバン楽しそう

大阪市　榎本舞夢

ポイ捨てのゴミと一緒に当りくじ
無洗米これに始まる妻手抜き
持って死ねん金をあんたはどないする
文明の街は次第に旬を消す
冥土へは裸で来いと仏様

大阪市　川原章久

小泉のじゃじゃ馬日本どこへ行く
尻馬に乗ってどこ迄従いてゆく
B52再び悪夢蘇る
長生きをして下さいと細い文字
病癒えレターに添えて旅土産

大阪市　岡本久峰

正論を吐いて梯子を外される
向き合えば話すことなし老い二人
上司の唄聞きもしないで拍手する
お日様を一人じめした散歩道
さりげなく別れる朝の共稼ぎ

大阪市　安達はじめ

皇太子さまお生まれの頃ふと偲ぶ
ルミナリエ今年見に行くことにする
年の瀬のプランあれこれ忙しい
一枚の暦わたしを追い回す
除夜の鐘少し煩悩けずらねば

大阪市　町田達子

時に歩を合わせて初心忘れない
段取りよう面倒なこと先済まし
追いついて追い越してから強い風
化粧品ならべて鏡との戦
来年も揃って食べよう晦日そば

大阪市　本間満津子

願い事間に合いません流星群
ルックスと頭があってなぜもてぬ
残酷な誠実さ故逆らえぬ
橋の杭一本抜くと壊れそう
燃えつきた灯を見て他人は通り過ぎ

大阪市　小糸昭子

こうのとり日本の空を飛びまわる
年金の枠でちょっぴりお洒落する
でこぼこの鍋が知ってる亡母の味
占いで心晴れたり曇ったり
メモ帳と仲良くしてる物忘れ

大阪市　津村志華子

不況風貧しいウソを教えこみ
孫の守りママに内緒と競馬場
子と交わす酒は大事にとってあり
外灯の自分の影に脅される
おはようの声も小さい休肝日

大阪市　鶴田遠野

赤富士が雪にかがやく冬の朝
雑誌手に尋ね尋ねるグルメ旅
建前に大きなエプロン掛けて行く
食べ放題むさぼるようにかにを食う
ぼんやりと見とれています車中化粧

大阪市　長谷川会美

漢字「戦」無事に生きてくのもいくさ
南海地震あいたくないなあいそうな
目と脳を磨いてくれる冬星座
脳のしわへらした分は顔に来た
手話できる前に難聴先すすむ

大阪市　渡部さと美

欅の苗くれた翁は白寿とか
箸ほどの米つつじだが律義者
寄せ植えのぶなにも春の匂いする
ニュータウン郷土の訛り笑い合う
今日こそは大手を振って鰯焼く

大阪市　杉澤汀

スーパーの大根葉っぱついてない
息吐いて吐いてしっかり深呼吸
十二月八日結局なにもせず
ペイオフの解禁かんけい無いわたし
歩かないから足の体操欠かせない

大阪市　玉置英子

敵ながら天晴れカラスと向かいあう
図太さに太刀打ち出来ぬ熟女たち
粗食とはいわず母さんダイエット
ありがとう言えるゆとりが少なすぎ
ワンテンポ遅れじいさん歌が好き

大阪市　寺井東雲

九合目吹雪き勇気の下山する
素っぴんの小麦の肌の君が好き
つけぼくろ美のポイントを知っている
カラオケでスポットライトひとり占め
ベルギーに先ず一勝のキックオフ

大阪府　籾山隆盛

横糸を頼りに夢を織っている
晩酌で消費増大しています
税務署とうちのと違う計算器
女という字楷書で書くとむつかしい
お悔みで禅問答をして帰り

松原市　小池しげお

老いるとは病をかこつ日々と知る
見られてる意識ぶざまなへまをする
気にしなというから逆に気にかかる
君だけとそんなことばに酔わされる
孤囲いのぞけば凛と寒牡丹

池田市　栗田久子

鬼は外たまには内に入れてやれ
通天閣人の情けが溢れてる
何が良く不況日本へ密入国
これでもか攻めの手ゆるめぬ薬漬け
はしゃいでる巷メールの花盛り

池田市　藤井計光

ライバルとの差も長生きで埋め合す
悩み忘れ妻が元気で日日好日
きびしさと抜けた所のある上司
八十路来て平平凡凡悔いはなし
痛い所上手に避けて話する

池田市　岡本吉太郎

床の間の石はブームのその昔
菅公は梅の香に酔い絵馬に酔う
地鎮祭祝詞聞いてる風みどり
眼鏡拭き拭き反論を組み立てる
カメラへの作り笑いがうまい人

茨木市　藤井正雄

交野市　山川日出子

愛子さま揺り籠守る花の精（十二月七日）
大宇宙のチリが光の雨となる
流星群ぴたりと当てた英博士
タリバンでターバン脱いだタリバン兵
柳田さん解放されて髭を剃る

箕面市　出口セツ子

倦怠期愛の演技をしています
呪われているのか風邪が治らない
生きていることは幻かもしれぬ
受験子が毎日ゲームしています
ポジティブに明日へ歩めと梅の風

吹田市　早川棲世

道鏡が出そうな女帝容認論
余生不遇もみじは黄褐色が好き
昭和という馬鹿な時代へ殉死する
わがために老い妻の影もう媚
子のなきは元気なうちに死ぬべき歟（か）

吹田市　穴吹尚士

朝飯はまだかと猫に起こされる
食欲をなくした猫にいわし焼く
捨て猫に心残して歩を運ぶ
酒呑まぬ猫にまたたび買うてやり
猫はもう拾わないでと妻の声

吹田市　太田昭

湯豆腐のくずれて温い掘り炬燵
人声がもまれて発車ベルが鳴り
男ひとり葱きざむ音リズミカル
馬鹿になれぬ自分の顔が馬鹿に見え
老い二人話す言葉が減ってゆき

大東市　児玉蛙

持って逝けぬ金をせっせと銀行へ
ありがたい年金受けて呆け出した
ポケットにさぐりを入れに来る携帯
一滴も飲めぬ男の酒談義
十字路で迷いが覚めて軽い足

豊中市　安藤寿美子

菊と酒愛した父を偲ぶ宵
日本は気の好い神サン仏サン
仏壇から毎日罰をあててくる
化粧品売場で相手にもされず
ゲームオーバーにしてよラマダン　クリスマス

豊中市　湯浅馬洗

戦中派も余命いただき傘寿過ぎ
ぬいぐるみの犬の目と合い今ペット
改革を後に引かせぬ新語賞
財源に庶民の酒が狙われる
診察待ち考える人あちこちに

尻馬にのって今年を駈けて見る
商店街お寿司屋さんに福は内
鬼平のような上司に来てほしい
芽の出ない夫に妻もきれかかる
税務署がうちへ催促するものか

四条畷市　吉岡　修

この冬は雪がありそうスキー場
のど飴の変な甘さが大きらい
浅瀬なら入ってみてもいいんだが
隠しごと無くて信用されてない
自分史の中にねつ造ないだろか

岸和田市　高須賀金太

花持ちの良いシクラメン有難い
フロントの見通し甘いタイガース
知らぬ間にアフガン地名覚えてる
正月の国内ホテル笑み戻る
海外をやめておせちを予約する

岸和田市　井伊東吉

赤い実に元気をもらう冬の庭
冬の陽の温さにふとん干し上がる
大阪弁使こても別れ悲しいね
私の半径広げEメール
退屈な自分史フィクション足しておく

岸和田市　宮野みつ江

妻よりも長生きしそうどないしよ
肩書がとれて自分の顔になる
ゼロ金利こたえる預金ない暮らし
惚けたときぼろりでそうな胸の内
酒たばこ止めても長寿保証ない

岸和田市　木村正剛

リストラのうわさ聞いてる年の暮れ
旅行やめ豪華なおせち注文す
焼き松茸テレビで見てる茶碗むし
助けられ初心忘れず生きている
捨て台詞吐いて敗者と認めてる

岸和田市　藪野けい子

安心の近い旅ではもの足らず
減反をよそに豊かな稲穂ゆれ
寅さんの台詞が効いて座が和み
二次会へ用心の札忍ばせる
狂牛病から安心の豚かしわ

岸和田市　長谷川呂万

好きですとずばり答えてはや二世
マニュアルを台詞のようにウェートレス
助けてと願かけに行く無信心
空腹でつくる美味しい献立表
日本の児和食のうまさ知らず生き

岸和田市　原　苑子

流星に瞬時の呼吸を合わせてる
愛子さんと言う親友が居てくれる
わたくしの根っこを探す生家跡
言い訳を聞いている間に庭は雨
蝉の殻まだ枝にある冬日差し

堺市　山本半銭

有限と気づかず無駄にした月日
陽が昇る時が何より好きになる
真剣に誓った時は声にせず
携帯のメール打つ指つい見とれ
夕日背にママチャリ急ぐ保育園

堺市　矢倉五月

気怠さを騙す点滴二百ミリ
傍にいる妻の有難さに慣れる
ぽちぽちと一人暮しに慣れておく
花嫁の父だ立派に泣いてやる
ここまでの僕に及第点あげる

堺市　和田つづや

皇女生誕明るく今年往かしめる
ヨーロッパの色で輝く陽の光（ロンドン）
掃除機も鼻うた混じり旅終える
すき透るスイスの味で祝い酒
孫と屠蘇青春不滅の味がする

堺市　神原文

入院をすると病人らしくなり
定期券ここ数年は同じ歳
客が来てひとまず止んだ妻の愚痴
どっしりと動かぬ妻の低気圧
せっかちで虎の逆転見ず帰り

堺市　村上玄也

日曜日瀬戸大橋が空いている
五十路過ぎ肩の力は抜いている
橋渡る勇気もなくて共白髪
娘の酌で四角い顔が丸くなり
安売りのロース肉でもまだ買わぬ

堺市　齋藤さくら

野仏と夕陽を秋の絵の中に
沢山のドラマを生きた女偏
肩車親子を染める夕茜
満天の星と踊っているワルツ
若さとや胸のリボンが踊ってる

富田林市　中井アキ

頼られている幸せを噛みしめる
吹く風の情け待ってる風車
プライドを捨てて治った肩の凝り
想い出は異国に置いて来た夕陽
一言の情けに溶けるわだかまり

富田林市　大橋鐘造

富田林市　片岡智恵子

宝くじやっぱり夢のまま果てる
パントマイム多くなる日の老いふたり
褒め上手明日へ向ける道しるべ
しまいまで聞かず失敗くり返す
振り返ればいつも手を振る母がいる

大阪狭山市　矢野梓

思い切り物捨てられる十二月
あれこれとメモ一杯の十二月
ダイエット来年からにする宴
てっちりに故郷の話盛り上がり
良いガイドでした別れを惜しむ旅

和泉市　西岡洛酔

ふる里の味荷造りに愛を込め
小春日に妻が日課の花鋏
七十路を歩む心に四季巡る
一泊の旅でも妻はよく喋り
ブランドへ女の志向果てし無く

河内長野市　水谷正子

風邪治り難波の空気吸いにゆく
会長を軽々受けてよう休み
初春もリハビリ室にあるツリー
リハビリに常連が居て花が咲き
離縁して一から気張ろタイガース

泉佐野市　山本蛙城

老の字が嫌い熟の字なお嫌い
不器用がよかったらしい生き延びて
勿体ないと溜めた衣類を屑に出し
どうせ土に還る撒こうが埋めようが
コトバ大賞独占米百俵その他

和泉市　中川楓

寄せ仏おしくらまんじゅう冬日和
過去形で重い話を軽く言い
一日が二十四時では生き足らず
君の声聞けば心が膨らんだ
ひと声に風邪うつりそう電話口

高槻市　傍島克治

めでたさも賑わいもなく寝正月
とばっちり受けない距離でみる喧嘩
寒空の満月友に屋台酒
努力するけれど当てにはせんといて
悪口言うので補聴器外せない

高槻市　江原秀夫

来る年へ高まりはなく八十路坂
脱皮して駿馬迎える去年今年
あのときはよかったなあと除夜の鐘
花道の真下奈落のいばら道
大海ですくんだ手足井の蛙

枚方市　鈴木政子

フリージアと水仙の背くらべ十二月
ブルカ脱ぎタリバン女性自己主張
道真展夕日に染まる美術館
タリバンの拠点大阪弁だ噛んだはる（カンダハル）
今時は雑用こなす男が持て

枚方市　安達忠央

さあ勝負勝利の神と鬼ごっこ
神業の旨さおでんの隠し味
夢を追い貧乏神と古希迎え
神の御名けがすなテロも戦争も
滅多には来ない便りに眼鏡拭く

枚方市　宮川珠笑

百均でストレス解消してる妻
炭疽菌よりも税務署から封書
心まで裸になって露天風呂
居眠りの顔は演技をしてくれず
バイキング皿を汚さず酌ぎ回り

枚方市　森本節子

朔日はやっぱり佳き日皇女誕生
感動の記事レンズに落ちた一しずく
パーマの日先ず書き込んで十二月
水に囲まれ近江路の美術館（佐川美術館）
生きのびて三年日記三冊目

守口市　井上桂作

不景気も開き直れば怖くない
冷戦が終れば次はテロ騒ぎ
テロ不況松下までがリストラを
ついでにとシャツ脱がされるお洗濯
流れ星数えるうちに風邪もらい

守口市　結城君子

ポインセチア正月近しとあわてさせ
アカペラの流れ聴く宵柿甘し
障害手帳受けた日からの赤い服
全自動の頑固一徹にはまける
かけ足の師走の速さについてけず

寝屋川市　江口度

うっかりと息が出来ない炭疽菌
不況風どこ吹く風の七五三
戦争にだんだんなじむ自衛隊
結んで開いてまだまだ倒産続くなり
金の無い方がお歳暮贈らされ

寝屋川市　平松かすみ

ご誕生ホットニュースへみな笑顔
幸福な夢を見させる蕎麦枕
母さんは毎日つけた福の面
福耳で贋のダイヤが照れている
福笹を授かりながら火の車

寝屋川市　角野仁清

注連縄に成れず牛舎の藁でいる
暮らしまで賭けてはいない正義感
ネクタイを締めると俺が僕になる
自叙伝を書けばお縄になりそうで
ぎこちないユーモア君が好きだから

寝屋川市　籠島恵子

なるようにと開き直って十二月
耐震は地震保険というそなえ
わたくしの機嫌を返すフライパン
冬枯れや根っこに届く日射しかな
夕やけを隠してばかり友の家

寝屋川市　冨山ルイ子

朝の挨拶鏡に向かい先ず笑顔
炭疽菌の恐怖ハガキに決めました
生きる気力なくした友の手を握る
あとひと月肩の荷降ろす日も近い
歳だからと許されている何もかも

寝屋川市　高田博泉

年金をもらって天国近くなる
リストラの波に日本揺れている
ペイオフに銀行マンの血が凍る
天敵は自分の中にある自信
転居する度に栄転した昔

寝屋川市　森茜

ユニクロで纏めて孫とUSJ
古き佳きアメリカ歩くUSJ
音沙汰のない気がかりな年賀状
冬を飛ぶ蝿の態度がでかくなる
枯葉踏む土から温い陽の匂い

寝屋川市　坂上高栄

今年こそ決めた心も都合主義
電線の星も揺れてる虎落笛
屁理屈をこね正論をかき回す
腕組を解いて監督立ち上がる
愚痴多い人と親身に付き合えぬ

寝屋川市　太田とし子

初春をぐっと睨んだ祝い鯛
雀が三羽親子かそれとも三角か
交番の電話鳴ってる昼下がり
よく来たと言うてはくれぬ貸した金
さよならと言いたい人の長い尻

寝屋川市　堀江光子

土地の水褒めて話は酒となり
ただ一つ残る渡しへ乗りにゆく
森羅万象秋の光に洗われる
怒るほどたやすくは無し叱ること
新世紀こそと願うた平和だが

寝屋川市　北岡波留吉

ささやかな弁当に染む母の味
守備範囲に優しい嫁がいる安堵
歩くのが基本ですよと遍路笠
宿坊が一際映える満願日
素晴らしいゲームでしたと金婚日

寝屋川市　酒井勇太朗

顎髭を剃ったに妻は気がつかず
無気力をうつ病ですとことも無げ
同じ日に内親王がわが家にも
やっと来た無かったことにと言う便り
調弦が出来ぬ男も琴を弾く

羽曳野市　徳山みつこ

三シートひとり占めしてエコノミー
どんどんお食べバアチャンのにぎり飯
何もないダストデヴィルの舞う砂漠
岩山のサボテン天を突いて立ち
川の字で名残りを惜しむロスの夜

羽曳野市　西村りつえ

深くして美人気取りの冬帽子
耳底に朗詠残し友が逝き
手を掛けぬ花も律義に蕾つけ
若づくり後姿が邪魔になり
もう一度履きたくなって赤い靴

羽曳野市　川口信子

シンプルに生きるほのかに燃えながら
言い訳で恥の上塗りしてしまう
いい人にめぐり逢う日の言葉かず
いろいろな先生がいる縄のれん
忘れたい事は忘れぬ脳の意地

羽曳野市　酒井一壺

母だけで育った友の四人組
葬式に飾る写真はみな若い
マフラーとネクタイだけの若返り
歳よりも若さ張る歩き振り
同じ歳老けてる人と若い人

羽曳野市　安芸田泰子

木枯しへ出番待ってるおでん鍋
約束を破った小指病んでいる
正論が流されて行く多数決
此所だけの話ころころよく転ぶ
紅葉みな散り終えて山眠り初む

藤井寺市　中島志洋

鬼は外心の鬼も追い払え
節分の鬼より怖い山の神
燃えている二人寒風苦にならず
体力の衰え口でカバーする
次の世もきっと貴方と共白髪

藤井寺市　楠　昭子

ときめきを抱いてお誘い待っている
こだわれば余計みじめな葦になり
平凡に見えても筋を通す父
笑い声響いてメリークリスマス
変声期風邪を引いたのかと聞かれ

東大阪市　安永　春

鳴門いも蒸かすの焼くのどれも好き
二病もち努力実らす娘の元気
愛子様もピンからキリの愛子ちゃん
温い目でおきばりやすと事始め
強勢の運にあやかる豆をまく

東大阪市　指宿千枝子

あれこれと二〇〇二年も誓いたて
神さまに誓って嘘を言っている
老眼鏡と仲良しになり二十年
眼鏡かけなおし百聞確かめる
白椿一輪そえて夕餉にし

東大阪市　北村賢子

まっさらな心で仰ぐ初春の天
別れ惜しむ父いつまでも動かない
その時へタイムスリップする史跡
サラサラと流れておくれ私の血
スポットを浴びてなおさらしんどなる

八尾市　内海幸生

百人百様同じ時報からはじめ
買わぬはずではなかったかジャンボくじ
好きですよ拝金主義でないけれど
ダイエット禁酒が一番なら止める
部下叱る言葉を撰って言えぬまま

八尾市　村上ミツ子

高野山紅葉歓迎してくれる
合祀法要こころに区切りつきました
とうさんの星とおはなししています
ばあちゃんの糠床もらう遺産分け
ユニクロへ行くのにかかる交通費

八尾市　長谷川春蘭

黄に赤に年惜しむ灯よ街の灯よ
ちゃんちゃんこ軽さを好み着馴れけり
まだ青きものも浮かべて柚湯かな
子供等の個室は城のクリスマス
うつされてうれしい風邪をひいており

八尾市　篠原いつふみ

石橋を渡り終って蹴躓く
銀行の金利恥かしそうに付き
損得で親は反対などしない
メモ帳のしるし誰にも言えぬこと
沸騰点見せる男の心意気

神戸市　山口美穂

今朝の冷え湯気たつ味噌汁うれしくて
手にたっぷりクリーム塗って除夜の鐘
失せ物がここに居ますと声をあげ
複雑な思いシニアの仲間入り
今年もまたいい年重ねるのがテーマ

姫路市　古川奮水

銀杏が落ちて御堂筋広くなる
宝くじハズレでもよい友と酔う
青竹を勧めた同期消えている
流星群次周私は星に居る
流感の予防注射がよく流行る

相生市　中塚礎石

順番が狂うことあり墓参り
うとうとが噂話に寝る床屋
割り勘の下戸カラオケで元をとり
腹の中とっくに読んでいる目つき
前置きがまだまだ続く金らしい

伊丹市　小熊江美

ときどきはストレス解消カラオケへ
指切りで和解の心つげている
母さんが和裁一途で子を育て
秋日和旅の誘いが重なりて
つき合いを上手にこなす人気者

三田市　北野哲男

大将の位をくれる縄のれん
左手はもう添えず出すご返盃
涙腺の緩さ星見て紛らわす
同じ距離二割は多い万歩計
頑なな笑い袋を孫が開け

川西市　松本ただし

足踏みも駆け足もあり過去の道
赤と黄の絨氈敷いた御堂筋
イスラムとクルスがやってる腕相撲
カレンダーに追いかけられて書く賀状
街灯のデザイン変る県境

尼崎市　田辺鹿太

親と子の隙間を埋める鍋の湯気
若かった母の記憶と丸い餅
雪辱を期して定年から遊ぶ
失敗を語れる歳になりました
飲む食べる古希から妻の全盛期

尼崎市　内田美也子

皇室へ新風招く愛子さま
忙しさの中で温もり抱く師走
甘えたらあかんあかんと冬の海
姉いもと間に亡母が生き還る
川柳の風刺きかせて初日記

尼崎市　的場十四郎

ときどきは会ってほしいと拗ねてはる
冗談も笑いも入れて行く見舞い
味噌汁の味さわやかに和の家族
つまずいた道の出合いが縁となり
神詣で茶髪交じえて七・五・三

尼崎市　松下比ろ志

重い荷を下ろしてほっと定年日
古本と言えば何とも黴くさい
胸の内悟られぬよう笑顔出す
冬の海空を写して深くなる
月を浮かべて川は瀬の音淵の音

西宮市　奥田みつ子

亡き人を病室に呼び秋夜長
櫨まっか心新たに退院す
一月ぶり我が家に待っていた写真
紅葉して時の移りもまた哀し
小芋煮る誰にでもなし我が為に

西宮市　井上松煙

挨拶を交わすと温い冬の風
歌うたう頭をからにする時間
出迎えた犬に安らぐちびた靴
眼鏡越し見られていると落着けぬ
靖国の騒がしく神安らげず

西宮市　秋元てる

手の届く所に辞書もテレホンも
気の合わぬ人には故郷の事言わぬ
言いたくない時は言わなくてよい仲間
風景の一部になって日向ぼこ
残る椅子一つに光る数多の目

西宮市　牧渕富喜子

手の内は決して見せぬ敵だろう
ジャンケンのパアでいつでも負けている
じりじりと囲まれて行く地図がある
声聞いただけで会いたいなと思う
ルミナリエ一日早く訪う神戸

西宮市　亀岡哲子

沙汰のない人を気遣う雲流る
ユニクロのシャツ温かく聖夜なり
ペットにはなれずネオンの街の猫
万華鏡の奥で回っている目玉
すっくりと花壇の中の葱一本

宝塚市　嵯峨根保子

イメージはいつも花野を行く帽子
マクド　ユニクロ若い財布について行く
カラス啼かぬ日あっても医者に同じ顔
同い年若さは活気ある無しで
茶碗むし七つ道具を入れるよう

奈良市　米田恭昌

跳ね馬の勇姿いななく初春やよし
賢夫人だって夜叉になりたい時もある
ねぎ刻む腕も上った赴任先
わざわざ来てついでがあったと孫を見に
他力本願祈るしかない百度石

奈良市　天正千梢

旅人になって故郷の落葉ふみ
足元もかき消されそう霧流れ
人の世のかなしみ流す山の水
足音はたしか宇宙の一員だ
地球の動きを実感した日の出

大和郡山市　坊農柳弘

水仙の誘いに私の春の画布
ＩＴのシュミレーションが疎ましい
義理チョコに思わぬ鬼が引っ掛かり
山茶花の紅へ優しく雪の精
思い出は祖母の民話と掘りこたつ

橿原市　居谷真理子

抱き人形一緒に死んでくれそうな
胸の内思案熟してくる温み
思い出を肴に飲んでいる目付き
愛人は少し不幸なほうがいい
無為の日も十時になれば眠くなる

香芝市　大内朝子

豆の芽が産声あげている大地
ときめきの紅を鏡に笑われる
どっこいしょ声の弾みで立ちあがる
損なことみすみす知っている頑固
握手して一気に溶けてゆく根雪

和歌山県　中後清史

無視された風が背骨の火を煽る
有頂天やがて男の樹が枯れる
妻の顔色を伺う日の負い目
選り好み猫の恋にもあるらしい
洗練をされたマダムの草書体

和歌山市　松原寿子

支えたくて犠牲フライを繰り返す
まなうらで途切れた夢が重くなる
面影を抱きセーターを編んで見る
峠から視点ずらして演技する
根性の芯は折れたりなどしない

和歌山市　川上大輪

入居者募集私のこころ空いてます
まだ虹が出ている走るなら今だ
どうしようキャッシュカードが痩せていく
窓開けて今日も景色が変わらない
間違いだらけでみんな正しく見えてくる

和歌山市　細川稚代

御儀式御名めでたく愛子様
初雪がすっかり消えた朝寝坊
自信過剰だんだん友が減ってゆき
こだわりをすてると呪文とけていた
亡夫の忌がめぐる山茶花真っ盛り

和歌山市　玉置当代

紅葉狩り歩調を合わすスニーカー
初年金先ず母さんにプレゼント
親と子の価値観の差で揉めている
次世代を担う宮様お健やか
新宮様の御祝いに沸く年の暮れ

和歌山市　山根めぐみ

ハイハイと誰がお茶など入れるかい（男女共生）
呆けた振りこれで護身が出来るなら
奥様ですかホームヘルパーですわたし
作り笑いして友情の上すべり
欲の手が三角くじの底まぜる

和歌山市　西山幸

着膨れていよいよ冬が重くなる
生き残ろうと裸木たちは背を伸ばす
木枯らしに押されて影も従いてくる
錆びついた釘にも使命感がある
針箱の中も掟が生きている

和歌山市　山口三千子

叔母がガン生ある内に行く師走
地図頼り四人姉妹で乗る列車
気が勝って居ても足腰ついて来ず
表面に出さぬが積んで来た自信
不条理な言葉を丸くして返す

和歌山市　福本英子

心まで貧しくなるな暮れの街
ボーナスの帳尻合わす屋台酒
反応の無い亡夫相手にクリスマス
逃げ隠れ出来ぬ亡夫へ手向け花
激辛の映像ごくり唾を飲む

海南市　三宅保州

私にくれないチラシ何だろう
狂ったらどうにもならぬ時刻表
節水を口実にしてストレート
忘れたいことはなかなか忘れない
梅にまで外国産があろうとは

海南市　谷口義男

阿呆になる事も一つの処世術
生涯時計現在何時示すだろ
後何年生きて行けるか預金帳
目を皿に番号探すたからくじ
百歳の時代古希ではまだ若い

鳥取県　羽津川　公乃

小刻みに起床を延ばす寒い朝
お隣は旧正月の杵の音
頼もしい声で夫の福は内
磨いても光らぬ玉で済みません
診察券二枚こなして昼にする

鳥取県　原　みさを

澄んだ目がじっと見ている神のエゴ
神様が近頃よそ見して困る
寝不足があれからつづく千一夜
戦争と平和チャンネルは裏表
アフガンのつめたい素足神無月

鳥取県　津村　八重子

ともし火がゆれると亡夫の声になる
こじんまりと個性いかしたセンスだな
電線の雀よ今朝もありがとう
辻に立つ地蔵いとしや吹雪く夜
初セリのカニ万歳の手を上げる

鳥取県　西原　艶子

海光る鰐伝説の浜を行く
平穏を祈り拍手強く打つ
落葉散る道キャンバスになっている
十指みな介護の味を知り尽くす
沈みゆく夕陽に祈ることばかり

鳥取県　石尾　かつ乃

子に残す日々の歩みのメモノート
足跡を残し安らぐ仕舞い風呂
三日分の手入れあしたは旅に出る
意のままにならぬ人間居て楽し
ドラマ今　夜空を飾る流れ星

鳥取県　土橋　睦子

友情をたしかめ合っている手紙
古稀はまだ遊び盛りと襷掛け
危ない所に挑戦したいかたつむり
反則もお目に見てる駐在さん
無職にも昼の日課は決めてある

鳥取県　田村　きみ子

負けて勝つそんな教育いまおぼろ
美しい嘘に転んで見たい春
花粉症始まる春はもうそこに
ハウスもう春ですキュウリ　ミニトマト
雪パラリ背伸びはしない春ごたつ

鳥取県　土橋　はるお

パチンコ台に合掌をしてかかる
受け皿は居るのに嫁が決まらない
何でも旨いお爺さんの舌鼓
咳払いして玄関のブザー押す
ポンコツに近い親父の軽トラよ

鳥取県　石谷美恵子

ブルースもワルツも知らずてんてこ舞い
感激の余波がひたひた胸に沁む
にっこりとしたいけれども義歯忘れ
今ここで言わんときっと悔い残す
老いの海また波立たす一つの訃

鳥取県　西川和子

ゆうゆうと猫が横切る無人駅
意見してみれば素直に聞く茶髪
二時間をかけて病の母見舞う
呼びかけに笑ったように頬動く
千の鶴届き点滴一つ減り

鳥取県　吉田孔美子

営業十五年自信の脱サラ
必須だ貯金叩いて免許得る
作業場も乾燥蔵の改造だ
保健所め胡散臭そうにチェック
十年目きっと新築して見せる

鳥取県　橋本多哥由

臍の緒を切った時から弱虫だ
父親に小言を食って家出する
人生に嘘をまじえて破滅する
難しい話はせめて聞きとめる
せめてもの救いに罪を被っとく

鳥取県　奥谷彩子

うれしさをパッチワークに綴じ合わす
ライバルに勝つ隠し玉ポケットに
古希の坂まだまだ女捨て切れず
粉飾をそいで本音を洗い出す
冬木立つめたい空に背のびして

鳥取県　林露杖

湖心なる元湯櫓に煙る雨（東郷温泉　2句）
皺腹を浮かべ出で湯の香に浸り
老いふたり一タス一でなくなった
不機嫌も老いの甘えとみていとし
ゴキブリの骸が一つ霜の庭

鳥取県　上田俊路

自衛隊やがて軍歌も出る怖さ
おみくじに大吉と出て迷い出す
迷うたら温泉に行き考える
混浴の裸婦が視線を迷わせる
霧晴れて絆の色を確かめる

鳥取県　さえきやえ

生きるよろこび柚子をくばって温い冬
柚子風呂に入りにおいでごんた君
写経終え雪のお大山に手を合わす
風評被害牛も家族も病んでいる
動かれる余生は宝あせるまい

午男らしく元気な夫であり
玄関を飾る葉ぼたん作りあげ
賽銭に願い沢山入れておく
裏大山男姿でそびえ立つ
脱税で夫の立場もふみにじる

鳥取県　権代康女

夢はまだ捨てるな明日も陽は昇る
思い切り笑った顔になぜ涙
数えるほど札束持った事がない
持ち駒も底つく不況まだつづく
スキャンダルスターをめしの種にする

鳥取県　黒田くに子

よろこびに沸く列島は日本晴（御慶吟）
永久の世に希望あらたなご出産
目も耳も怯えた今年忘れよう
元旦の計の帳尻合ってない
発泡酒税の見送りさあ乾杯

鳥取県　山本正光

独居老淋しく無いと負けおしみ
新宮が暗い世相を照らされる
ラディン氏の遊びしようとかくれんぼ
重いほど宝石つけて脱税する
監督も妻の監視はむずかしい

鳥取県　太田幸枝

動けない花は寒かろ切なかろ
嫌な奴無礼知りつつ無視をする
人妻にアカギレを見ぬよい時代
年金の暮らしが控え目にさせる
匿名の意見なるほど芯がある

鳥取市　夏目健一

家までも捨てる愚かな恋に賭け
永住の城だと自慢墓地を買う
魔女のいるこの街角は要注意
つまずいた小石を教え子に伝え
好きな蟹食べたいけれどかゆくなる

鳥取市　杉本孝男

恵まれた余生で好きな酒届く
手のひらの池に私の浮気浮く
宿り木を抱いて緑の中にいる
窓ガラス磨いて馬の絵馬届く
どたん場ですごい啖呵を母が吐く

鳥取市　冨山檳榔樹

古文書に今よりきつい子の躾
引き際を知らず天狗の鼻が折れ
男と女涙の温度差が違う
十年後の約束逃げ道はある
髭面を見ると剃りたくなってくる

鳥取市　美田旋風

野菊にも大輪に咲く夢がある
つぼみから通った花をつみ取られ
泥舟に乗ってたぬきに笑われる
珍しい人に出合って歳がばれ
案内のなかった祭りすんでいた

鳥取市　前田一枝

冷静をよそおう暮れの空財布
旧姓で呼ばれ想い出熱くする
再会は風が背中を押したから
誘われたコーヒー愚痴も混ぜて飲む
リストラとデフレ淋しい語が並ぶ

鳥取市　福田登美

あの人が歌うと酒がまずくなる
玉音で戦争が止み生き延びた
酔ってても軍歌の節は間違えぬ
飲み過ぎて上を向いては歩けない
老いた脳穴場の道は覚えてる

鳥取市　岩原喬水

説明のいらぬ言葉だありがとう
友人が言葉一つについて来る
ほいほいと甘い言葉に乗る　私
負けた日は妻の言葉が身にしみる
美辞麗句言葉の裏に気がつかぬ

鳥取市　春木圭一郎

好きなことする時間なら作り出せ
老人はみな金持ちのように言い
足して二で割る考えに策がない
動けるうちは動けと妻に使われる
投げ返す石はいつでも持っている

鳥取市　岸本孝子

内緒ごと大きな声で念押され
旧道を歩き人間取り戻す
ありがたや五年日記を買い替える
母の手が金をかけずに子を飾る
泣き笑い今年も無事に暮れました

鳥取市　近藤佳子

自然死をお頼みします家族どの
紅葉のさくら夕日とひびき合う
母さんの忘年会は食べるだけ
季は巡る忘年会は雪もよい
欲のかずふえて今年も暮れてゆく

倉吉市　松本よしえ

鬼灯の袋の中にある宇宙
つれづれの花占いも信じよう
いくつかの出逢いも忘れ今の人
一時期の事と突っ張り見守ろう
神様と生きる銃弾持たされる

鳥取市　岸本宏章

倉吉市　牧野芳光

曲がらないように鏡の目を睨む
汗をかくことを忘れている机
拒んでるような気がする蒼い川
損をすることもときどき言ってみる
玄関に笑う鏡を吊っておく

倉吉市　山中康子

万年青の実玄関さきでご愛嬌
スクラムを組んで真紅に炎えている
皇室に八年振りの宝もの
スマートな馬にあやかる寸足らず
下馬評へ積んだ努力の金メダル

倉吉市　野口節子

馬鹿話の中にはいつも居る私
私と同類らしい昼の月
友達と逢って禁酒の封が切れ
人間が好きで友達たんとある
どうぞどうぞお遊びなさい掌の中で

倉吉市　猪川由美子

恋心おんなの寿命のばします
四角四面に疲れルーズを試ってみる
几帳面なひとり相撲に疲れ出す
純と真紀子ハラ探り合い政動く
女宮に次の重圧雅子さま

米子市　青戸田鶴

柿いくつ食べただろうか冬に入る
摩天楼にジェットとび込む末世とも
宇宙から癒しの星のシャワー見る
あと先は知らずわが道歩くだけ
打てばひびく友の電話を待っている

米子市　門脇晶子

絵馬堂にひしめきあった願いごと
やさしさに鳴りひびくのは母の鈴
師走の財布鈴が鳴ったら止らない
花火となった流星群に願いごと
この世には地獄極楽みんなある

米子市　中井ゆき

とびの輪の中で平和なお正月
のど痛し酒でうがいをしてみよう
地獄絵もそれ程恐くなくなった
ゆっくりと余生は好きな色でぬる
やさしさを時々ゆする鈴の音

米子市　永井三津子

苦も楽も鼓動と残る句作帳
五十路過ぎ今なお母に叱られる
境界に植えた樹木で揉め始め
化粧するおしゃれ大好きまだ女
死神に打ち勝つご飯たんと食う

ああ傘寿思いあらたに鈴を振る
食事もうまい静かな余生ありがとう
あれこれと余生をつなぐ夢いっぱい
溝ひとつ跨いで姉と手をつなぐ
子が鳴らす鈴が奇妙に胸さわぐ

米子市　光井玲子

あけまして今木版に駿馬彫る
澄みきった巫女の鈴から福もらう
相撲降りても小錦はもてている
何の因果か罪ない牛が責められる
まろやかな余生家族と水の音

米子市　神庭詩郎

ハワイしか知らぬが持ってるパスポート
要介護2少しは自分で事が済み
点滴の延命本人知っていず
しがらみを断てず合間をぬって生き
病棟が二十四時間動いてる

米子市　木村春枝

日本海奔馬の如き波しぶき
お茶席にかしこまってる膝小僧
子等帰り単調な声行き来する
留守電の反応キャッチされている
春の駒野に遊ぶ日も近くなり

島根県　森茂美

物忘れするがどっこい生きている
林道を造れば野獣下りてくる
歳月の重みを刻む孤児の皺
テロをやる側も正義の名をかりる
自衛艦手薬煉引いて海を征く

島根県　榊原秀子

長らえて出合う獅子座の流れ星
すいすいすい忙しそうな流れ星
かわいらしいツリーの荷着くクリスマス
街灯の明かりがうるむ霧の夜
ゆっくりと二〇〇一年終らせる

松江市　安食友子

能面でカモフラージュをしてる闇
回すなら賞味期限を篤と見て
テンションはぐさり刺さった語りから
灯明が揺れる墓参のコールかも
ときめきが大胆になる傘の中

松江市　津川紫晃

春の絵馬人間の欲うんと積む
小春日で首筋あたりからジョーク
海も冬なんの色気もなくほえる
馬鹿になる薬時々ポケットに
悪口は言うまい風が運ぶから

松江市　川本畔

花は地に紅ひきながら思い断つ
句碑深く亡母の声聞く昼下がり
ダンボール　ホームレスにも冬がくる
極まれば持ち上げられる川の石
紺碧の海に迷いも座り込む

出雲市　岸桂子

ハンサムな医者だと思う回復期
影法師亡母の形になりたがる
昭和一桁宇宙旅行はあきらめる
平凡がよし平凡が物足らず
生きている証　納税書が届く

出雲市　板垣夢酔

達磨の目二つもらって威張りだす
良心と悪魔が喧嘩して困る
空よりものんびり電車乗り継いで
バスが来て話半分して別れ
太陽に可愛がられた吊し柿

出雲市　小玉満江

初冠雪白く気高く出雲富士
愛子ちゃま老いも若きもおめでとう
背もたれにすがって愛の唄を聞く
不作法を足の痛みのせいにする
見栄張った赤もだんだん褪せて行く

出雲市　佐藤治代

友情の深さ一生涯の友
輪の中で笑わせている淋しがり
恋猫を怒鳴ったことを悔いている
一年に一度逢う日の血が騒ぐ
もう七十まだ七十と恋をする

出雲市　園山多賀子

残り火を煽る情けの風に逢う
ファスナー今朝は私の意に背く
身辺整理亡夫は私に任せきり
温かい視線だ会釈して置こう
還らない谺は呼ばぬ掘炬燵

出雲市　久谷まこと

摘み草の背に柔らかい梅日和
地方紙で家出の猫を探してる
大勢に押され自分の居場所失せ
建前と本音相手により変わる
携帯のベルがデートの邪魔をする

出雲市　小白金房子

ご出産へ毛筆太く記帳する
一年の早さ歳暮の香を包む
熱燗のうまさ出店の灯に座る
ぼちぼちの人生哀しく酒で逝く
黒豆の艶ありがたき初春をもる

出雲市　城　多　喜

少しずつ歪になってゆくハート
み仏に許しを乞うた罪一つ
裸木よ空に想いが届いたか
人並と言う階段で蹴つまずく
コーヒーが過去の話をききたがる

出雲市　石　倉　芙佐子

だあれも知らない海が私の中にある
皇女様銀のお船に乗ってくる
灯台守も星もきらきら笑いあう
神々の国から嬉しいプレゼント
もう春へ息吹を見せる白い梅

出雲市　青　山　久　子

憎しみを捨てて涙が透き通る
ジェラシーを刈ってやさしい眉になる
様々の視線躱して翔ぶ帽子
津軽三味木の葉はらはら胸に散る
葉脈が透けてほんとが見えてくる

出雲市　伊　藤　玲　子

憂さ刈って心機一転春を行く
心にもおしゃれ楽しい話聴く
冬の陽は背中いっぱい貰っておく
欲あって胃腸医歯科医はしごする
極楽のまわり綺麗に掃いている

出雲市　吉　岡　きみえ

いい話ばかりひろってたのしもう
発端はいつもボタンのかけ違い
メニューなどいらぬわたくしだけの箸
不況の谷間で地味にして生きる
腹割った話もう一度考える

岡山県　山　本　玉　恵

泣けるだけ泣けよと胸をくれた人
青臭い意見も聞いて知る世相
ストレスも吹っとぶ新宮御誕生
決断をまた迷わせる罪な風
背伸びして待てど幸せやって来ぬ

岡山県　大　石　あすなろ

決断へずばり切りたい花鋏
きなくさい噂に騒ぐ村雀
どうせ一生あけっぴろげでゆくつもり
楽隠居などととんでもない話
いつだって母の笑顔に癒される

岡山県　福　原　悦　子

産声を聞いて陽気な坂となる
人生の反省迫っている師走
昨日の悔い胸に納めて朝の靴
忘れたい傷へ他人が触れたがる
丸い鼻心美人でいてくれる

岡山県　矢内寿恵子

御生誕祝う民草のひとり
大正生れぜいたくするのも命がけ
生きざまの風はそれぞれ彩を持つ
秋の天戦嫌いの戦中派
甘く見た世間に返り討ちに合う

岡山県　小林妻子

自販機の釣りくれるとこ探してる
小泉さんに任せダンボールのくらし
困った事ないかと言われてもこまる
老人の守りする玩具考える
老人のマーク車に貼っている

岡山県　富坂志重

親からの遺産悪筆ふで無精
取りあえず生きる用意と死ぬ用意
浮き沈みいく度通る人の道
客は浮き草チラシ見て店かえる
突き当たりようやく気付くのんきもの

岡山市　川端柳子

行きずりの人皆やさし初春の馬車
とし上のお人だ哀しみ分けずおく
悲劇は別今日は美味しいもの食べて
裸木になって待ってた落葉道
おばあさんと呼ばれたショックまだ癒えぬ

岡山市　井上柳五郎

不用品山とあるのに捨てぬ老い
じいちゃんとまだ呼ばせない七五三
月命日般若心経父母と子に
またふえる再会できぬ喪のたより
店じまい特別客の招待状

倉敷市　小野克枝

手間ひまをかけて素顔の美を隠し
六十の娘を叱る母が居る
付き添いの交替が来て朝になる
嘘つきが本音をこぼす丸い月
落日へ君は野の花ひそと咲く

広島県　藤解静風

喜多郎の笛ひびき合うものがある
どのペアも妻が采配ふっている
明日は必ず来ると想っているいのち
無駄な日もあって世間がおもしろい
見通しの甘さを運の所為にする

広島市　森田文

鉛雲一気に秋を閉じ込める
言うことは明日に月の美しさ
釣れぬのを釣り場のせいにして帰る
のこぎりにも剃刀にもなる扇
空翔ける馬にまたがる子の賀状

竹原市　三宅不朽

いつからか親父と言う語軒でゆれ
箸枕　人に枕のあるように
ごみの意地燃えますこの彩この炎
炎えきれぬ椿よ神もまよえるか
先生がまた増えましたナニナニ賞

竹原市　岩本笑子

走るのは妻にまかせる十二月
ミカンむく五本の指はまだ達者
破魔矢買う娘息子をしたがえて
十二月猫の手も借り年賀状
両手拡げて午年の気を受ける

竹原市　石原淑子

満中陰母は仏になり給う
お点前もポットが決める湯の加減
ときめきを秘めて凛々冬のバラ
これからを見据えるつもり庭を掃く
おしゃべりの小鳥に内緒万年青の実

竹原市　古谷節夫

戦争とテロは許さぬ天の声
風になる句を封筒に詰めている
ここからは本音で話そ二人きり
道草で拾った知恵が生き続け
喝采は日記に残し夫婦ゴマ

鳥取市　山本益子

もやもやの気分をいやす冬の星
養生訓肝に銘じて生き伸びる
現代子平気で臍を覗かせる
人間は寒い時こそ胸を張れ

鳥取市　西村黙光

孫の守りあっと言う間に陽が落ちる
孫多彩中学生と零歳と
天を突く泣き声迷いふっ飛ばす
でかい声祖父そっくりと保母の世辞

米子市　白根ふみ

沈黙が伝わってくる野仏の
小走りのナースやさしく受けこたえ
去年ことし検査その後に感謝する
弱音など置き去りされる年の暮れ

鳥取県　近藤春恵

母さんの背なは丸くて温かい
人妻にふれて恋して火傷する
主婦多忙のんびり出来る日が欲しい
赤白黄自己主張して菊花展

鳥取県　国森武子

気がかりが一つなくなり元気づく
目がさめる連夜の雨に小言言う
さまざまな人生と余波こえた顔
川柳が私の一部支えてる

出雲市　富田蘭水

サンタは私だ今夜いそがねば
当たらぬと知りつつまだ買う宝くじ
残菊に己の姿みる師走
あれ以来飛行機見る目違って来

松江市　佐野木みえ

引潮の海に悩みを捨ててくる
ライバルの視線感じる闇の中
遠くまで来たなと思う道祖神
不整脈霧の大橋渡り切る

松江市　小川注湖

趣味多忙退屈などはしてません
また遅刻どうも持ってる癖らしい
忘れても諦めがよい安い傘
アルミサッシュ蝿も私も守られる

西宮市　刈田泰司

言いわけが下手であとからほぞを噛む
言い訳を手紙ですれば誤字脱字
入れ歯ですチューインガムにてこずって
水割りのグラスの嘘が透き通る

神戸市　池田善守

無知恐怖怒り殺意はテロの道
いい嫁を演じたツケが今届く
政治家の議論タテマエしか言わず
人生ドラマ苦労ばかりのオムニバス

京都府　丹後屋肇

金婚式ブーケでおおう照れ笑い
同窓会駿馬も駄馬も杖をつく
仲介人はにかんでいる肩を押す
差別語にアナウンサーが大慌て

滋賀県　中宗明

我が子にもど根性あり安堵する
ハードルを跳び越え進む若さあり
近隣に吠えるペットで気を遣い
古希迎え速度が速く時刻む

大和高田市　岸本豊平次

三姉妹背なの丸さが大中小
同窓会名前喉まで出てる顔
欠席を告げれば他にもあった風邪
十二月八日も所詮多発テロ

豊中市　樫谷郁子

親子とは似てますなあと子が喋り
背の曲がり鏡がいつも追いかける
遠景に消したい影が見えかくれ
過疎の村消した噂が生きており

吹田市　野下之男

この世からまさかが絶えぬ面白さ
老い二人腕を組まない決めはない
波風を立てて喜ぶ人もいる
これ以上安く出来ないハンバーガー

過信した足掬われる容赦なく
また増えた薬真面目にてんこもり
新築の招待無人駅で降り
損得を考え選ぶ自己嫌悪

高槻市　井上照子

今年こそ毎年言って変りなし
色紙を切ったり折ったり孫の守り
七五三にお産がつづく祝ごと
あれもこれもみんな芝居の中である

河内長野市　植村喜代

さりげなく喋っていても目を配り
酒ちびり星の見えない地下酒場
下手な嘘聞いてる妻につねられる
どっこいしょ何時からついた悪い癖

河内長野市　井上喜酔

電飾の師走に走る不況風
たっぷりと愛情こもった宅急便
大山の雪も頂き夫婦旅
不況風吹いて政府に手腕なし

枚方市　二宮山久

ダウンしてこの世の裏ももろに見え
立板に水より早い徹子さん
深刻な不況に黒が大流行
アベックの茶髪神妙初詣で

大阪市　中田あい子

なにわ柳壇今年の10秀

—13年12月29日朝日新聞発表—

（太字は本社同人）

川柳塔社名誉主幹　橘高薫風選

最優秀句

参観日眠るあの子は私の子　前田侑香

秀句

津津浦浦光差し込む呱呱の声　**岡本久峰**
北斎の富士の向うにある宇宙　岩屋美明
こころざし父の日父の靴みがく　西村夕子
ドーナツの穴は天使の食べた跡　水野黒兎
春風に尻もちをつく一才児　**丹後屋肇**
金髪の太助に買った初鰹　**堀良江**
星座の名一つ教えて行く夜店　吉松隆太郎
祭り寿司田舎教師の頃を不図　遠山勇
死ぬほどの練習積んで無欲かな　山森一弘

番傘川柳本社幹事長　田中新一選

最優秀句

越えて来た自信が風と向かい合う　池田はるみ

秀句

苦しみをくだいた末に円を描く　堤一郎
つらくても鏡の中に味方いる　井本健治
危機耐えて男の空は高くなる　吉松隆太郎
情熱がまだ残ってる旨いめし　**石森利昭**
不器用な父の背中にひそむ愛　笠田幹治
ふるさとへ戻らないかと祭り笛　嶋澤喜八郎
ありがとう母を看取った我が妻よ　藤井則彦
命火を燃やしホタルでまいもどる　茂本隆子
死ぬまでが賞味期限である理想　棚原修

自選集

初光皇孫愛子さまに先ず
喜寿の屠蘇元日にはや命乞い
新世紀一二三四七八究
平和来よラマダーン過ぎクリスマス
憂国忌男一匹泣く日あり

橘高薫風

柚子熟れて人に香りの季がめぐる
朝のパンここでも柚子は準主役
坂下る眼に柚子のいろ雲の色
蝶の羽すこし裂いたは柚子の棘
冬眠の巣穴に柚子の酒醸す

八木千代

振りこ電車飯は新幹線にする
五十年空気のようでハイ眼鏡
胃カメラは快調でした年の暮れ
もう歳で仲良くなった喧嘩独楽
来年の手帳へとんど書いておく

舟木与根一

ハナ・ハト・マメ・雄蕊雌蕊の知恵くらい
嵐にも耐えて柳の力瘤
転んだらおしまい杖を持たされる
ランク保持家計へ主婦の肩が凝り
日溜まりに浸かるとファイト抜けてくる

石川侃流洞

去る者は追わぬとみんな居なくなる
ひた走るわたしの背なが的らしい
いい匂いするのはいつも隣です
てきぱきとやらねば秋の陽が落ちる
肥えるのがこわいと言うは口ばかり

小林由多香

身贔屓か城は紅葉と松緑
城参上今年も松は薬袴
世は乱れ濠に仲良く鯉と鰰(ばら)
外濠は青藻蔓延り水濁る
城下街住めば輝く天守閣

野村太茂津

新聞の題字ばかりを追っている
また明日へ明日へと伸ばす不精髭
ああ彼も逝った！喪状に手を合わせ
七度目の午年を待つ暮れの空
もう逢えぬひとをひっそり恋うベンチ

榎本吐来

父越して行けとエールを子に送る
三代目ぼちぼち屋号重くなり
新人類に面接マナーいろはから
意気は買うがそれは無謀と叱っとく
したたかに生きて素顔は覗かせぬ

堀端三男

バー街の一つにわたしのコントある
独り居に耳かたむけるビブラート
今宵の雨　女ひとりを沈ませる
反骨の血父ゆずりかも冬木立
パロディーに近く本物影ひそめ

八十田洞庵

大切な亡父の足跡見失い
楽天家何の苦もなくアッチャ向いてホイ
ソバカスが増えて長寿の貌になり
日没の早さに尻を叩かれる
火事泥に寝呆けた親父間違われ

西田柳宏子

旧暦のおだやかな味七日粥
唇もさむしこぼれた冬いちご
チンと鳴るレンジへ草もちよもぎ餅
いつの日か笑い話にしましょうね
手袋を替えてもジャンケンポンに負け

西村早苗

仕舞風呂今日の一日何をした
売り買いはしないが株価気にかかる
別姓の妻に頭が上がらない
野球シーズン終わり鼻毛でも摘もう
長男のペースにのって酔いつぶれ

野田素身郎

ちっぽけな机が僕のテリトリー
正直な数字に喝を入れられる
コーヒーとビールの値段見比べる
耐えている拳はきっとバネになる
十二月八日に憶うことがある

玉置重人

元の部下から宿題をＦＡＸで
ＯＢ会　私家版の題まだ弾む
ゲートルは巻けるが捨てて半世紀
手術後のレンズで遠くから会釈
チェスクロックおしゃべり止めに使えぬか

竹内紫錆

叱り方ひとつにもある上手下手
たかが風邪甘くみていて悔やむ床
思い思い家族出かける趣味の道
鉛筆の芯の丸さが気に入らぬ
逆もまた真なり負けてない理屈

河井庸佑

幸せな夫婦へ届く躍る文字
今を咲く季節の花や子の育ち
別々の好みがあって夫婦箸
菜園の出来余らせて老い二人
北風が予定時間を狂わせる

恒松叮紅

元気を出して新しいみずのえうま
生きること許され朝の歯を磨く
恋をして梅桃さくら見にゆかん
おしどりの番(つがい)がとんでゆく愉快
鴛鴦がくる湖の大掃除

土橋螢

よい暮れにする敬宮愛子さま
紅葉に慈母観音の笑みがある
新聞のお悔み欄はもう見ない
足腰は弱いが口はまだ達者
年寄の財布を狙っている身内

月原宵明

もう少しみどりが欲しい地球色
溜池の底で醗酵する民話
そして静かに腐葉土になる落ち葉
暗室の現像液に出る旅情
丹精のバイオようやく実を結ぶ

斉藤劦

知らぬ間に迎えた喜寿が怖くなる
餅二つ食べて遠くへ初詣で
正月は楽し封切る金粉酒
酒うまい煮〆もうまいお元日
正月も食後の薬のんでいる

宮口笛生

まろやかな余韻で届く年賀状
忘れてたやさしさに会う年賀状
おみくじが大吉もう一度読みなおし
今年またゼロからのばす夢を抱く
生きるとはこんなに激しい人の渦

藤村〆女

きさらぎの白さに負けた立ちくらみ
かわいそうかわいそうにと雪の花
仮の世の仮の住いも雪の中
騙されてみようぽつんと雪の音
雪しんしん恨みが少しずつ消える

波多野五楽庵

芳地狸村

カンツォーネ流れてきそうナポリ湾（ナポリ　5句）
ぴちぴちの魚がはねる朝の市
吹き抜けの天井を誘うアーケード
素晴らしいカンツォーネの別れ宴
美しさ誇る港の夕景色

黒川紫香

皇孫ご誕生みんな明るい笑顔だな
思わずも口に出ましたいいニュース
向こう岸の声も運んで来る風だ
とても白い息を吐いてる女の児
園児バス出てから弾む立話

小西雄々

野火走る男のドラマ幕上がる
ファンタジックな鏡が何時もけしかける
夕焼けの情けを知らぬ都市砂漠
走ること忘れ無冠のやせ蛙
火も風も潜り余生の読書欲

遠山可住

けもの道父と歩いたことがある
川沼々森の涙を包み込む
グーチョキパー先人の知恵極まれり
ダイエット当用漢字お前もか
また一つあの世へ近い歳もらう

正本水客

手さぐりでできた人生をよしとする
花のない季節も私のすきな月
満月に関係のないくらしよし
お互いにかかわりのない電話きる
二番煎じの話をだまって聞いている

木村あきら

揚柳が早く目覚めて動き出す
防風林松は雄々しく村護る
東天にキラッと光る星一ツ
丹頂が居付いて欲しい春の節
雑踏を抜けると碧い空がある

森下愛論

霜柱溶けて春呼ぶ前奏譜
愛の輪のかげろうとなる華残像
余生にも余裕を見せる夢を追い
嫉妬心置き忘れてる枯れた老い
メル友に老いの頑固が壁となる

板尾岳人

あなたには言えぬ秘密は一つだけ
あれ以来お酒を飲んだことがない
梅一輪お元気ですかまだ茶
白寿までまだ三十年ありにけり
雪解けの水を掬うて水の音

お陽様を無視して回る洗濯機
浮ついた気持一家の踊り好き
プロポーズ月があんまり冴えすぎる
影法師走るとやはりついてくる
石投げて波紋なかなか収まらず

工藤吟笑

元日も雀やっぱり早く起き
前向きに生きて笑いを忘れない
三食はぜいたくと言うコタツ番
こぼれたる種が負けじと先に生え
アメリカの誤爆誤爆信じない

越智一水

歯車の軋む日もある夫婦独楽
欲望の行き着く先は地獄かも
臓の傷治らないままもう二月
何のため生きると人に問われても
アンテナは人の噂が好きらしい

川島諷云児

影法師お前もいくさ嫌いかい
アフガンの飢餓へ名月きっと泣く
テロを指示する神なんか居るもんか
地球儀のここでもテロの血が流れ
いくさする準備に法を一つ変え

両川洋々

すりへった歯車合わぬ老夫婦
低金利ペイオフこれからどうしょう
菊誉めて冬芽を約束して帰る
渡る世間チクリとついているドラマ
アメリカオンリーで世界動かぬ同時テロ

阿萬萬的

神官の祓い今年は馬で来る
何歳になっても床し除夜の鐘
硝子戸を磨いただけで壬午迎え
十二月憩う暇なし二十四時
賤が家もメで飾ればお正月

田口虹汀

ハワイアンの友達みんなおじいちゃん
ウクレレとレイ携えて逝き給い（松谷友一氏）
野生馬の背なでUFO追いかける
境内の笛に誘われ月のぼる
妻の前では少年にすぐ戻り

河内天笑

原稿募集

五月号掲載の、同人の原稿を募ります

「私の健康法」

四百字詰原稿用紙一枚半～二枚（六百字～八百字）

締切りは**三月十日**、本社事務所宛

ただし、原稿の採否、添削は編集部に一任して下さい

編集部

板尾岳人選

例えばの話を鵜呑みする喜劇
トンネルの出口へ虹を追いつづけ
手も口も達者で惜しい物忘れ
指切りが好きで約束してしまう
確かめてまた確かめる預金帳

逗子市　神戸みず帆

言葉にはならず心に刻む恩
手拍子で昔の唄をたぐり寄せ
静寂がしばらくあって出る本音
隣席が次のページを待っている
統計に俺の数字が抜けている

川崎市　中村泰竜

風呂敷をギュッと結んで義理果たす
貝殻が淡い初恋連れて来る
最後まで笑顔で聞いたお人好し
青空に絵馬の願いが届きそう
我慢していればいい事出会うはず

東京都　清原悦子

腹さぐるなんと悲しいすれ違い
諦めたチャンスをくれた母の鈴
ごまかしが許せぬ父の千里眼
嫌われる怖さが歳のサバを読む
急がずに明日へ希望を取っておく

富山市　松見たえ

ボジョレ・ヌーボーなどと騒いでいる平和
言うだけは言わせる酒を注いでやる
まだ期待しているらしい叱り方
ふるさとに四季折々の母がいる
水門を開けても民話戻らない

札幌市　三浦強一

お別れのテープが切れずついて行く
誘導のサイン見落し藪の中
A面に入れた言葉で勝負つく
改革へ向けてひと跳ねとんでみる
同じ服街で見かけて仕舞い込む

横浜市　鈴江純子

メールなら一行ですむ長電話
渋滞のせいで堪能した紅葉
お気持ちと言われお布施の額をきく
コスチューム乙女の気どりで踊らせる
イチローと我が子は同じ歳なのに

横浜市　長島亜希子

記念日に一番うまいお茶を買う
ハイテクへ退化していく手と足と
コスモスと話がはずむ遍路笠
上げ底のお菓子が届く歳暮どき
どの馬も平和を願う年賀状

横浜市　近藤道子

へとへとに疲れ悩みのない枕
嫁さんの速度に合わす車間距離
どうもどうも調子いいのが寄ってくる
整理終えいち番下に用がある
気がつけば今日も二人はベジタリアン

横浜市　芦田鈴美

赤い糸縺れ解きつつフルムーン
親指が会話しているアイ・モード
不況でも飛躍御多幸祈ってる
ピンポンが鳴ってさよなら長電話
蹴っ飛ばせ馬に期待の不況打破

横浜市　吉田裕峰

不景気でサンタ今年は社会鍋
これと言う外にすることない夫婦
雨もりを気にしてくれて来たちらし
身辺の整理卒寿の旅支度
木枯しが不況の風で風邪を引き

河内長野市　大西文次

初夢は七福神と舟に乗る
鬼は外豆を上手に避ける鬼
悲しみをやさしく包む風に逢う
北風が人恋しいと戸を叩く
水溜まり何度も越えて今日がある

河内長野市　柏本靖子

気が付けば慣らされていた使い捨て
まだ夫婦つづいていますお蔭さま
花嫁へ我が家の雑煮伝授する
一言が過ぎた足らぬで和が崩れ
西部劇さながら懸賞金がつき

篠山市　円増純子

去り際の手の感触が洗えない
亡母の譜にあっただろうか凪の海
友情と背中あわせにいた妬み
さまざまに揺れ反省の樹は育つ
有り余るファイト空転ばかりする

京都府　前上英一

京都市　山本礫

紙コップ軽い話にのりたがる
ほろ酔いの人正論とはかなしいな
父の背の修羅を家族は気付かない
実直な男の眩暈まだつづく
詫状に添えるかなしい物語り

神戸市　伊勢田毅

仏にも夜叉にもなって子を育て
良薬と信じて今日も酒を飲む
遺産分け見馴れぬ顔が隅にいる
初詣で妻に内緒の願いごと
福耳を信じて影がついてくる

神戸市　山口光久

垢や染みきれいに流す除夜の鐘
今年こそ今年こそはと飲むお屠蘇
糟糠の妻今日も笑顔で側にいる
居酒屋に明日の生気を買いにゆく
焦らずに蟹と歩いて策を練る

和泉市　横山捷也

釣り皮を持つバーゲンの同じ柄
露天風呂みんなまあるい顔が浮く
ライバルの居ない二度目の職に就く
理想には遠いがのんびり生きている
雑魚ながらそこそこもっている野心

吹田市　木村無禄

一面を拾い読みして評論家
アフガンに申し訳無い蟹を食べ
歳などと言うまい僕はいまだ古希
あと三十路白寿へ申す果たし状
幸不幸いまだ頑固で生きている

吹田市　須磨活恵

春ですね笑い袋を用意する
アドリブでグサリ邪心に釘を打つ
知恵袋しわを伸ばして使用中
達筆な手紙の返事がまだ出せぬ
傷心へ鎌を研ぐよな冬の月

八尾市　松葉君江

頼まれて頼んで決める娘の縁談
酔うほどに嘘とほんとがいりみだれ
箱鮨をほめて戴く寒の入り
ジンクスに耳を貸さない青リンゴ
一病を持って散歩の花の道

島根県　武島ちよえ

筒抜けのわが家だけれど人が寄り
奉仕です雨天決行休ませぬ
無視すればちくりと痛いバラの棘
疲れます雑木林のざわめきに
すんなりと通してくれぬ節目です

松江市　松浦登志子

唐がらし赤い心で口閉ざす
柿赤く葉っぱ落として自己主張
遠くから着のみ着のままきた手紙
夢みてる大空みてる籠の鳥
視線から逃れるようにカニ歩き

松江市　三島淞丘

不況風靴も重たい職探し
雪うさぎ解けて南天の実二つ
コンビニのおでんチンして独り酒
干し柿が暖簾のごとし軒の下
珍しく七福神がこちら向き

出雲市　川島和歌子

健康で倖せ思う旅日記
紅葉も滝の流れに影落す
佇みて苔むす寺に木の葉散る
秋も逝く淋しさ誘う寺の鐘
海鳴りの寝付けぬ夜の旅枕

米子市　足立由美子

鈴つけたまま帰らないものがある
おだやかに余生支えてくれる椅子
疑問符がいっぱい落ちている余生
好きな事好きな時間にする余生
安心を枕の横に置いて寝る

鳥取県　竹信照彦

嫁かずともよいに嫁ぐと末娘
還暦の峠の茶屋でクラス会
倒れても頭もたげて乱れ菊
太陽の恵み痛感して冬日
再生のゴミに出てくる規格外

鳥取県　吉田弘子

馬の合う夫婦でないが四十年
悟りかな夫の小言聞き流す
法律上老人となる二月三日
野仏の無念無想の顔が好き
一日一善ぽんこつが積む努力

倉吉市　牧田賀寿恵

機嫌よく飲めるお酒にありがとう
七転び八起きをさせる親の背
なれそめの頃から夜霧好きになる
人気者それはやっぱりお母さん
欲すてて静かに肩の荷を下ろす

岡山市　藤原一平

ライバルの弱み握っている余裕
呑めぬ酒度胸だめしに呑んでみる
ふる里へ帰って仮面塗り直す
この人も善人なのか嘘が下手
誰にでも出来る笑顔がまだ出来ぬ

願い事すべてが叶うまで祈る
思い出の中から抜けれないでいる
金持ちになっても遣う当てがない
友情の壊れる音をご存知か
ご存知と思うが好きと言っておく

倉吉市　森川　あらた

不況波テトラポットに立つ不安
戦争という身勝手で病む地球
派遣艦家族の思い乗せられず
大根の白さ北風よく似合う
青い空梢に残る柿の色

和歌山県　村中悦男

席ゆずるランドセルから見える親
這い上がるチャンスをくれた七転び
ハードルを越えてチャンスと手を結ぶ
仲人の口を信じていい余生
母逝って記録破りの寒さ来る

和歌山市　土屋起世子

しっかりと裏打ちしてる自尊心
裏を読む力足りずに落とし穴
子への鞭だんだん細くなる世相
営業の鞄洩れてる鼻薬
誘惑の影がくすぐる虚栄心

和歌山市　武本碧

喜怒哀楽その都度酒を友とする
もう一人の私に愚痴を止められる
気乗りせぬまま聞き流す裏話
マジシャンの手からぽろりと落ちた嘘
火の鳥になった私のノアの舟

和歌山市　上地登美代

母の歳越えても母は越えられぬ
旅の宿友の素顔に花が咲く
時折は親に無心の円満よ
地図にない峠に見える紅い海
百歳の笑顔人生ほんまもん

和歌山市　松尾和香

古希に来ていま人生の祝いうた
慟哭よさらば今日も夕焼けだ
無我無心慈悲は天から陽の光
てのひらが満ちてひらいた玉手箱
宿命がわたしを招く迷い道

田辺市　大峠可動

ビートルズママも聴いてた反抗期
呼び水と種火残して春を待つ
うら声を覚え本音はかすれがち
日も月も年も逃げ足急ぎ足
遺伝子に逆らいながら添いながら

大阪市　浦田綏子

大阪市　尾崎黄紅

日本も昔はあったかたき討ち
見事完敗戻れば酒が待っていた
見られてる予感どこかで見た予感
一合の酒にも負ける歳になり
何事も三歩手前の傘寿です

松山市　高橋宏臣

朝一番花の元気を見て回る
正直な影だ歳までよく似てる
腕力を甘くみたのか曲がる釘
直筆で語るわたしの負け惜しみ
ため息とともに誤算の地図たたむ

今治市　渡邊伊津志

夕焼けと競演サルビア燃え上がり
波長合う相手を探す箸の秋
古稀過ぎてからペンギンの仲間入り
ハヒフヘホ以外の笑い気にかかり
岩を噛む波が男の海になる

今治市　塩路よしみ

賞味期限過ぎて鏡が怖くなる
ノルマない人生生きてみな半端
虹の橋渡るに遠いかたつむり
場所柄もわきまえないで出たい首
おめでたい大内山に呱々の声

香川県　伊勢八重子

老いの顔昔を問えば冴えてくる
まん丸い月に溶け行く今日のウツ
向かい風強くてやる気湧いて来る
ふれ合って少し未練なバス下りる
子にゆだね心おきなき秋の風

愛媛県　宮本末子

カラフルな傘にかくれた雨女
鳩時計栄養剤で復活し
古里の世代を替えた風の色
八十路まで針で稼いだ腕力
一人より二人の方が近い道

高知市　小川てるみ

残さずに食べて器がほめられる
怒ったら怖い油も火も水も
亡父の背に記憶の糸がつながらぬ
目標へとても届かぬダイエット
人生のオアシスがまだ遠すぎる

高知県　百田幸

新品はすぐに使わず終う癖
口下手を考え深い人にされ
肝心の用は忘れた長電話
同じ舌持ち早口の真似できぬ
戦中を思えば不況苦にならぬ

抜け道も近道もない風も冬
今日もまたわたしを溶かす辞書を繰る
丘一つダムで合掌冬眠中
深爪の痛さ知ってた遠き人

広島県　馬場利子

小食の利を知り病魔寄せ付けぬ
食物を薬に医療費はゼロに
健康法どっさり詰めた宝箱
健康な妻とひ弱い組み合わせ

尾道市　光吉裕

なにはさて登竜門という魅力
きみに逢うこのときめきはなにだろう
人の世の毎日変わる風の色
ちょっとしたこころづかいのある町よ

竹原市　正畑半覚

米無くて泣き余っても泣く戦中派
古稀過ぎて雑煮の味は変らない
食い意地の反応もろに皮下脂肪
威勢よく午が駈け来る初日の出

倉敷市　家守政子

暮れの鬱晴らさんとして鏡拭く
真心を総身に嫁くと決めている
冗談のうちに内緒をほのめかす
食足りてモラル薄れて行く悲劇

岡山県　土居ひでの

暗い世に明るい光内親王
夕焼けにとけ込む亡母の影浮かぶ
迷路から抜けて明るい月あかり
月あかり影は謀叛を考えぬ

岡山県　国米きくゑ

白が好き朝のミルクの白が好き
金が好き光琳屏風の金が好き
銀が好き職人肌の銀が好き
青が好き五月の空の青が好き

岡山市　大森純子

皇室の春を寿ぐ朱南天
嫁ぐ娘が呉れた安堵と寂しさと
寒風が百貨店へと味方する
満月へ愚痴こぼさぬとする誓い

海南市　堂上泰子

お清めの塩に今年も守られる
好きにせよ勝手にせよと縛りつけ
いろいろは忘れて夫婦睦み合う
太っ腹見せて財布もやせ我慢

和歌山県　中村君枝

大切な財布にも鈴つけて置く
十二月やらねばならぬ事ばかり
ローカルの電車時計にしてる野良
恐ろしい空気を連れてくるお客

和歌山県　森下順子

和歌山市　根田美子

ここだけの話と聞いて疑わず
本当の涙は人に見せません
一年の計を考えくたびれる
今日の顔これで行こうと眉をかく

和歌山市　橋爪佐一

老眼鏡世話にならずと自慢する
同窓会少ない髪に櫛を入れ
広告が増えて師走の風を知る
割り勘の元を取ろうと酔いつぶれ

和歌山市　永廣昇太郎

推敲をしても字余りひっこまず
苦労の字幸とよむ妻いとし
迷い道許す家内の広い胸
ネクタイを緩めてビールの道をあけ

和歌山市　今一歩

師走風心は街へ飛んでいる
賀状書き師走にちょっとお正月
無口一番下手な弁解波が立ち
鼻息の荒さも消えて釣り三昧

奈良県　江波正純

いいニュース飢えてた顔が皇居前
外国語しゃべる野菜が幅きかす
食べて寝てチョンだが元気身が軽い
トップにはとてもなれないお人好し

奈良県　古手川光

三十チョウ豆腐みたいに軽く言い
先例に学ばずヤコブ狂牛病
持ってると使ってみたいイージス艦
難民になることさえも許されず

奈良市　乾春雄

ふる里へ続くレールが錆びている
反逆の影絵がゆらりゆれている
野仏に抱かれて暮れる過疎の村
順風に乗った背中が狙われる

生駒市　飛永ふりこ

泥水をかけたことさえ気がつかぬ
波間にて心のちりを浮べてる
大波も小波も越えて真珠婚
しゃけ茶漬食べて拘泥り流します

京都市　清水英旺

内親王女の世紀予感する
山茶花が猫の額のアクセサリー
バリウムを飲んで俎上の鯉となる
日短く人生短くなったよう

綾部市　藤田芳郎

五割引きっと誰かが泣いている
走り続けて折々の花見損なう
昇る陽に念じて沈む陽に祈る
演壇が国の行く末棒に読む

おねがいを束にして待つ流星群
ダンボールまあるくなって故郷の幸
理不尽にすり減った角ひっかかる
明日には明日の風と寝ると決め

横浜市　三村八重子

箱解けば故郷のりんご皆美人
空爆は在庫一掃してるよう
積み残し背中押される年の暮れ
穏やかに扇がれて知る勝将棋

横浜市　秋元和可

流木が磨かれ床の間を飾る
明けぬ夜は無いと信じている鼾
居心地が良くて末席譲れない
ジェスチャーが上手になった話下手

横浜市　生坂サト子

商戦の煽りまんまんと踊らされ
フルコース一皿毎に味談義
映画観て次の予定を任される
底冷えに漬物樽も上機嫌

横浜市　石原三郎

悪筆を悩む賀状売り出され
ギャルたちが臍を隠して秋になる
アラ出さぬように無口になっている
散歩道変えて美人にめぐり逢い

横浜市　巌田かず枝

気づかれぬように手を抜く家事炊事
掛け声をかけて自分の背中押す
お判りにならない方の介護する
病院が好きと思われてるらしい

横浜市　川島良子

新年が薫る障子の白さかな
煽てには迷うことなく乗っている
理想とは理想で終り美しい
優しさが少し足りない隙間風

横浜市　北沢街湖

満腹になると思考が濁り出す
行く秋が小さな庭も染めて行き
ちょっと待て言いたいように日が過ぎる
お育ちは立居振舞いから剥がれ

横浜市　荒井広和

悪口の端に好きよと洩れてくる
年毎に細る歩幅で目指す明日
聞き役の笑顔に愚痴もぽろり出る
年毎に姉妹の糸が太くなる

町田市　土田今日子

メルヘンにバームクーヘン焼く匂い
単純な回路だすぐに作動する
お待たせはしません料理チンと出る
煽ったらいかん瞬間湯沸器

菓子よりも箱が立派で捨てられぬ
自衛隊やっぱり危ない橋がある
買うまでは効いた健康器具だった
思い出の母はほめたい事ばかり

新潟市　高野不二

災害に脆いひと科の木偶の棒
言葉より苦労の皺が証立て
明日の夢ドラマ抱かせて夕日落ち
これからは急ぐ事ない短打主義

秋田県　秋野宏

戦争はどこ吹く風ぞ千代田城
女帝論最大級のオベンチャラ
冬将軍四望の山をかけめぐる
年を経て祈りのときが多くなる

秋田県　湊修水

すき間風胸ふきぬけて友の逝く
ネクタイの横向いているちどり足
蜘蛛の足無造作に見えみごとな巣
好みの色それぞれ染めた葉っぱたち

静岡市　中西雅

やりくりを譲って妻のよく遊び
ストーブでいつも何かを煮てた母
放っとけばやがて剥がれる濡れ落ち葉
惚けぬよう心配事をくれる子ら

藤沢市　妹尾安子

父からの根分けた菊が咲き誇る
豊かさは粗食健康保たせる
キッチンに立ったら妻が強くなる
美しく想う故郷遠くなる

川崎市　浦野昭志

笑っては居られぬ鬼も師走月
栄養を言えばあれこれ鍋あふれ
流れ星見るのに髪に櫛を入れ
残菊が風に向かって自己主張

川崎市　塩沢ひで

度忘れのたびにちらつく呆けの影
砂を吐く貝のつぶやき聞く孤独
いじめられ心ぼろぼろかたつむり
愚痴不満ためずに捨てる生き上手

川崎市　小林久美子

つまみなど無くても飲める好きな酒
ネックレス豊かな胸へ眼を誘う
正直な花は手入れの程に咲く
生返事言った言わぬで縺れだす

川崎市　大島三四朗

石段の途中で母はまた見上げ
言い分はあるが妥協をしてかえり
大仏さん歩き出したらどうしよう
故郷に心を癒す川がある

日立市　加藤権悟

岐阜市　平野　あずま

東宮へ待つこと久しこうのとり
年賀状済んでパソコン冬ごもり
空き腹に赤提灯が通せんぼ
鶏肉に譲るビーフの指定席

鳥取県　下田　茂登子

ときどきは裏切り者になってみる
どうせなら抱かれてみようあの星に
うんざりとするほど子供欲しくなり
過去捨てぬ男と一生添うてきた

鳥取県　澤　裕子

生き字引母の暮らしを見て学ぶ
ハードルを下げると気持楽になる
苦労した証白髪は物語る
合掌の手から煩悩消えて行く

鳥取県　前坂　美佐枝

塩かげんひとつに踊る術をしる
私のハートに悪魔同居する
車坐になればみんながよく見える
うろうろときつねとたぬき出て困る

鳥取県　山下　節子

私魔女心に呪文もっている
ハードルの高さが合った夫婦です
一票を持っているから握手され
受け売りに尾鰭がついて後ひけず

鳥取県　福西　茶子

今日もまた読めぬ男の傍にいる
日曜日パパのサラダが主役です
傲慢な男と舟に乗り合わす
肉よりも脇のパセリのほうが好き

鳥取県　平尾　菜美

置き所わすれ我慢と共にいる
演じ切る母の舞台に袖しぼる
地だんだを踏んだ土には嘘がない
病み付きになった土への思いやり

鳥取県　西沖　彰雄

低金利余生の軌道微調整
飽きもせず白いご飯とお味噌汁
譲れない線を年毎と下げて生き
古いかも教育勅語寄りどころ

鳥取県　鈴木　一弘

庶民には縁ひとつない袖の下
幻を追って金婚夢果てず
五十年温度変わらぬ浮き世風呂
小吉を結んでかえる初詣で

鳥取県　小谷　孝美

赤い紅今日を節目と決めている
泣く理由をじっと待つのも母の愛
B型の気質でピエロ演じだす
水たまり飛び超す術をまだ知らぬ

深呼吸ときどきしてはついてゆく
外観を飾ってみても気が晴れぬ
やりくりをして晩酌を続けてる
精いっぱい走った余生徒歩でゆく

鳥取県　鳥羽直市

涸れることないと信じて水を汲む
釘づけになる程粋と言う踊り
座も譲り合って旅情の深くなり
銀行へ頭の整理して出掛け

鳥取県　竹森富久江

春が来て黒髪すこしだけ増える
逃げ足の早い黒字だなと財布
花佳人おもう黒衣の役でよし
時をみてピンクごころも着てあげる

鳥取県　池澤大鯰

午前様取り残されて帰宅待つ
冷蔵庫溜めてしなびて老いがある
遠慮して掴みそこねた運ばかり
散歩道いつも会う人夫婦連れ

鳥取県　河本晴子

悪さした事は時効のクラス会
切りのない仕事も生きている証
朝早く起す事でもない電話
言い訳を腹に納めて小言聞く

鳥取県　西垣美知子

合掌の指から愚痴が消えて行く
整理ダンス母の匂いがつめてある
不景気もあわてぬ母の太っ腹
バラバラの心まとめる母のひざ

鳥取県　奥田保子

目が覚めて今朝も生きてた有難い
金が無いそれならケチに徹したら
見栄張れば余計なお金要るんだよ
金貯めてあの世へ持って行く気かい

鳥取県　岩崎和子

北国の屋根の雫で春を知る
ブラウスが白くコーラス風に乗る
急いでも地球は同じ軸まわる
ペアルック一寸照れるが着てみたい

鳥取市　山宮愛恵

私がわたくしへ買う赤いバラ
ゆく秋の落葉は私語をそのままに
ふる里の冬の一品柿なます
母の海　東儀秀樹にのめりこむ

鳥取市　録沢風花

万民に笑顔が戻る佳いニュース
どちらにも神が後押しする主張
人間も猫も不況で背を丸め
思いがけぬところに見えた冬の虹

君見たか獅子座の星の天の舞
虹の橋渡りましようよ腕組んで（祝白岩美幸さんご結婚）
ご誕生列島歓喜の風が舞う
おばあちゃまに抱いてお貰い愛子さま

鳥取市　近藤秋星

万歳で生れた皇女天翔る
雛壇に新宮増えて親子草
落葉ふみ田舎の景色額に入れ
落葉ふみ子供の頃の音がする

鳥取市　宮脇道子

イニシャルが古いハンカチ捨てきれず
ノルマ課す万歩計には罪がない
つまずいた石に不満を言ってみる
公園は素敵な恋の演出家

鳥取市　田村邦昭

ハードルの高さに夢を持ちつづけ
正直な鏡に老いを見抜かれる
年賀状書けばあいたい人ばかり
人生は登り下りの迷い道

鳥取市　岡田信恵

単細胞福待ち顔に空仰ぐ
寝正月みかんも欠伸転げ落つ
銃捨てと子らの瞳が言っている
初日の出喜怒哀楽の友が待つ

鳥取市　谷岡清子

赤ちゃんが笑顔忘れた国怖い
厳冬の予感古傷疼き出す
青春の記憶老いても薄れない
対岸の火事でも火の粉飛んで来る

鳥取市　永原昌鼓

快復の兆し感じる温い指
お年玉もらってみたいもう一度
好きな人夢の中では王子様
これからの未来図桃に染めてみる

倉吉市　大下智子

生かされて突っ張って来て古希の坂
古里の景色心の額に入れ
寒いのは貴方のせいと言われても
以心伝心猫も私を嫌うだろ

倉吉市　前田喜美子

新世紀駆ける子馬の飼葉桶
大波小波器用に越えた母だった
五感皆まで迎えたお正月
難民にせめてジングルベルの音

米子市　猪森スミヱ

猫だけがだまって愚痴を聞いている
蓮の実が枯れてそろそろ冬支度
光なき人に冷めたきクラクション
消しゴムが欲しい人生出来心

大阪市　熊代菜月

再生のボタンを押して目を閉じる
雑踏と出店を抜けて美術館
よくわかる言われてみればしゃべり過ぎ
太陽をしっかり溜めた計算機

大阪市　伊藤博仁

チューリップ再会約し鉢を抱く
会えましたまさかの夢で嬉し泣き
振りむけばつるべ落としの陽がせかす
切り取り線わたしの残り穴いくつ

大阪市　星野きらり

来る年の明るさ予感宮誕生
流星の降る夜にひとり空仰ぐ
罰当たる石仏破壊タリバーン
消防と警察ひまなほうがよい

大阪市　中村忠敬

宝くじ外れて予定狂い出す
したたかな女泣いたり笑ったり
還暦にひっくり返す砂時計
生きようと笑顔たやさぬさくら草

大阪市　大川道子

新年へ寒い話は乗せないで
せせらぎの音軽やかに春の詩
思い出に少し切なき一人旅
年の瀬がなお急がせる人間模様

大阪市　三浦千津子

古稀の初春ゆっくり生きて行くつもり
時間たっぷり余生のパズル組み立てる
針千本飲まぬ程度に嘘をつく
人間の都合で生きる菊人形

大阪市　小泉久子

父さんがサンタに会う日を聞く息子
里の母独り暮らしを花で埋め
欲しいものあるが買いたいものはない
どことなく夫の字に似る息子の字

大阪市　中川千都子

皇室の安泰祝う旗の列
実りにもどこか淋しげ過疎の村
老体をいたわる様に靴磨く
獅子座流星次の機会に間に合わず

大阪府　前田忠子

丹波産黒い宝石送ります
柿一個残しカラスにほどこしを
北風が今年の猛暑忘れさせ
苦労してようやくここに老い二人

大阪府　東文江

愛子様生まれ明るい年迎え
一歩一歩確かめているマイウエイ
火の用心うっかりミスで鍋焦がす
アフガンの子供を照らせお月様

河内長野市　木太久正一

河内長野市　村上直樹

木枯しや今夜は鍋という予感
もてなしの鍋踊らせる囲炉裏の火
土手鍋のぐつぐつ煮えて寒に入る
あん肝の行方気になる鍋奉行

河内長野市　印籐智子

過食拒食若い娘並みにくり返す
リハビリの先輩またも天へ旅
年金で買った指輪が宝物
不況風欲しがりません買いません

高槻市　左右田泰雄

思いやる心が胸に灯をともす
悪くない女難の相と言う見立て
難局を一気呵成に切り抜ける
ばらばらにすると組み立て易くなる

高槻市　大崎侑子

戦争は神の摂理かもしれない
山の神　ほどよく強く家平和
両親の眼鏡に適う人がなく
喜べぬ眼鏡美人と言われても

高槻市　生田義一

垣根越え聞えるピアノ優雅です
ふっきれぬようだ涙が浮んでる
古稀過ぎてなおときめきを胸の奥
コウノトリ千代田の森に舞い降りる

高槻市　乙倉武史

マンネリの暮らしで愛が不足勝ち
こうのとり千代田の森に腰を据え
男には解らぬ腹を痛めた子
健康へ婦唱夫随の万歩計

泉佐野市　稲葉洋

若くない何が何でもとはゆかぬ
ローン済みあとは黄泉路の旅費を貯め
善きことはみな万歳で締めくくり
ゴミ出し日うちで無職は僕ひとり

和泉市　小坂凡英

十代のタリバン兵に罪ありや
ホモサピエンス貧富を知って苦しめり
なるようにしかならぬから逃げはせぬ
思う壺はまってばかりはめられぬ

八尾市　田中トシエ

宅配のように置いてく孫二人
ストレスとうまく付き合う非常口
錆びさせぬ辞書は手元に置いておく
旅の宿語尾のやさしい国訛り

八尾市　平川幸枝

おいしい顔みせて返したからの鉢
ジンクスの左足から穿くズボン
生きてれば父の一喝で終るはず
天高く他人を信じたくなる日

刈り具合問われ答える髪がない
存分に食べて痩せたい妻の無理
絵手紙で鯛釣りに来る小姑
今年こそと誓って何もなしに暮れ

堺市　荻野像山

新宮を祝い皇居に帰り花
気儘旅美保の松原そのまんま
ハリーポッターぼくも箒が欲しくなり
わずか三頭挙国一致で大騒ぎ

堺市　梶本哲平

喪の通知増えて年賀が減る辛さ
もうちょっと残り人生楽しもう
雲見つめ月を眺めて今日のこと
師走風傘寿の元気菊に見る

羽曳野市　山本たけし

デジタルな人は識らない佗と寂
足らざるを知った心が満ち足りる
人の世は二進法では割り切れず
改革もビジョン不在でする妥協

羽曳野市　永田章司

豆まいて用心棒に鬼も入れ
掘ってごらん春の芽がある雪の下
落ちないでこのままとまって寒椿
梅一輪咲いたニュースが南から

羽曳野市　福田悦子

その日だけ若い若いと同期会
お若いと言われネクタイ二本買う
女房が似合うと言うた帽子です
けったいなどんな帽子も似合う人

豊中市　藤井則彦

背のびした踵ふらつく武者人形
愛と言う字が大好きで書いてみる
急いではならない下り坂の足
美しく見える眼鏡で眺めた日

吹田市　木下敏子

灰色の知らせ飾らず無地でよい
喪中です葉書の束に義理を欠く
新米の新酒で祝う年新た
二世帯でパンの香りを響かせる

門真市　矢阪英雄

新宮に話が弾む夜の膳
増税に狙われている発泡酒
平凡なゴロほど捕球むづかしい
一升瓶枕に夢は七福神

箕面市　寺井柳童

筆ペンに押されて眠る硯箱
ルミナリエの光に鬱を溶かし合う
子の願い一気飲みして病むサンタ
いつもより派手に鳴ってる除夜の鐘

岸和田市　不破仁緑

引き際の手本を見せた落椿
定年と言う難しいお年頃
褒めて欲し叱ってほしい心の荷
セールスの修羅場くぐった汗の地図
豊かさに他人の痛み置き忘れ
願い事億光年の星信じ
授かった命振子を長くする
二十引く気分で生きる歳を読む
白寿まで夫婦で竹踏む夢描く
明日生きる凡夫凡婦の夢の彩
気晴らしに生前葬でもしてみよか
二週間の薬が二十も飲めました
打たれたくないから蚊帳の外に居る
膝抱いて寒いこころを温める
ペンの剣素振りで終ることに慣れ
忘れねばならぬひとなり目をつむる
叩いたら動く時計と日を過ごす
にこにこと笑顔奥の手知っている
鼻薬くすぐるこつを知っている
ボーナスでやっとしのいでいる財布

東大阪市　今岡貞人
香川県　松村輝夫
香川県　原賢
愛媛県　黒田茂代
愛媛県　花岡順子

たかが新庄されどイチローとの比較
三年を五年日記にした決意
健康の数値を支配してる酒
百円の強さをしかと知るショップ
ご安産ニュースがテロを追い払い
生涯を駄馬で終った父の背な
よかったな何も知らずでよかったな
十二月八日古いテープを巻き戻す
後編で中指刺した白い棘
裁かれてみたい気になる月明り
ノーモアと言いたいだろに石仏像
煩悩の予感の糸が身構える
中高年老年私どこに居る
新宮に子の無い人の事思い
不況風百円ショップで温めてる
口紅のひとぬりだけにある力
生きている人に合わせてする法事
くえ鍋の湯気に浮んだ亡母の笑み
日本には景気直せる人居らず
草ぼうぼう土地が余っている田舎

高知県　桑名孝雄
高知県　近森功
高知市　澤村哲史
高知市　伊野部和江
南国市　小原圭二

半世紀どっこい軍手生きている
息を吹きかければ治る児の痛み
じゃじゃ馬の手綱を持ったまま白髪
夕焼けの火種抱えて床に就く

唐津市　坂本兵八郎

肩書きが消えると威力無い名刺
食べ残す箸が家計に叱られる
理解したはずの言葉にまたも辞書
犬掻きで沖へ沖へと趣味の海

北九州市　岡田幸生

耕せば応えてくれる土に生き
誰一人遊ばぬ川でいいですか
我が道を来たと思うに父の影
夕焼けを拝めと妻が呼びにくる

兵庫県　安達厚

札束がないから硬貨貯めてある
破られる誓いばかりを聞いている
抱いている夢を笑っている鏡
疲労感そっとぬくめる旅帰り

兵庫県　山本泰子

生き甲斐を診察券と医者回り
塀越しに隣の柿の美味そうな
鍵かけたつもり元栓見たつもり
平穏な明日に望みを米を磨ぐ

篠山市　谷田多美子

頭下げわたしが嫁の実家です
ずたずたの心で心配ばかりする
この時間不吉な電話かも知れぬ
入退院ドラマの如く聞いてやり

篠山市　倉垣恵美

ハイハイと返事しながら受話器とり
ふと目線合って忘れぬ人となり
コスモスに季節を急ぐ蝶の舞
ときどきは画布にため息独り言

尼崎市　河津正治

火種まだくすぶっている落ち椿
ブランドのバッグに見栄がつめてある
夫婦でも解けぬ心の色もよう
今日の罪明日を信じ米を研ぐ

姫路市　北条てる代

不景気が疎遠にさせるネオン街
厚化粧おとした妻にほっとする
内輪揉め玉虫色にして治め
風邪気味に今日の所は玉子酒

川西市　井本清山

湯どうふを崩す無礼な妻がいる
念仏をあげて最善策を練る
一時間待つとなるほど腹が立つ
人間のコントに飽きて読む童話

神戸市　両川無限

生きるため時には心鬼にする
曽孫来てテロ思わせる部屋の中
どこへ行ったりんご担いだあの力

青森県　福士トキ

文化の日　庭の野菊も胸を張り
本能のノルマに蟻は駆け回り
虫の音が夢路に誘う仕舞い風呂

東京都　井上つよし

喪の内に歯を見せあって笑う夜
生きづらくてまなこを重く地に落とす
伏せた眼の内へ言い訳生かしとく

東京都　やまぐち珠美

好物でうちは毎日大根炊き
蟹カニかにそんなに海にいるのかな
戦うという字の裏で癒し系

京都市　三宅満子

命など惜しくはないと酒たばこ
知らぬうち輪の中にいる高齢化
有難う言われるように言うように

横浜市　金森徳三

嘶いて一歩一蹴りマイペース
寒ぼたんカイロあげたい孤の中
ジャンボくじいつか万歳持ち続く

横浜市　伊藤ふみ

ひと言が多く仲間に煙がられ
二代目のいない家業にペンを置く
植木屋に留守を任せてスニーカー

横浜市　山梨雅子

幾山河辿ってやっと喜寿の春
人柄を丸出しにして君と飲む
落ちるなよ小鳥来るまで木守柿

横浜市　平達也

怒って泣いて笑って翔んでいる私
急ぎ足とめてお空も見ましょうよ
持前の短気がさせぬ聞き上手

武蔵野市　亀井円女

大事にと育てたバラのトゲが刺す
聞く耳を持っているので頼られる
花便箋女はいつも若さ欲し

野田市　那賀島雅子

拡大鏡片手に新刊読み進め
朝電話手順がくるうことになる
貸し店舗目につく街の師走風

唐津市　岩崎實

登記簿を確かめたから帰農する
筋トレを妻がすすめる定年後
蛙にも旅の支度や幾星霜

串間市　高畑滝

行間の余白に想い沈ませる
軽口が思いがけない波紋よぶ
まだ女でいたい卒寿のうすい紅

宇部市　高山清子

新世紀トップニュースは愛子さま
テロテロとテロの遊びをする園児
さっぱりと心の迷い切り捨てる

愛媛県　山之内八重美

日溜まりへはらり枯葉のメッセージ
名案の浮かぶトイレが長くなる
禁酒禁煙ちっとも金が残らない

愛媛県　安野案山子

瞑想をしている雲が動かない
壁の耳内緒話をまきちらす
納屋の隅柳行李に父母が棲む

今治市　野村清美

プレゼント背丈と共に高くなり
不況風会議終ってテロ談議
介護税年金にまで手を伸ばし

奈良市　田中賢治

ＩＴの掛け声寒い年の暮れ
川柳で心をひらく古い友
パソコンの情報もとに本ひらく

生駒市　小西稔

鏡掛け染め抜き紋は母の里
一枚の絞り羽織りに母の愛
口げんか感謝の気持有りながら

和歌山市　吉田比佐子

虫眼鏡老眼鏡を援護する
借り農園十指が動き土生きる
白菜もネギも育む大自然

和歌山市　前岡健三郎

寒くないもう慣れてますいつもです
子供達お年玉での夢画く
不景気で年越せぬかと騒ぎたて

和歌山市　宮本三喜夫

嬉しさを記帳に残す民である
着こんでも風が温もり持って行き
小遣いで内輪のテロを鎮めます

鳥取県　松川行男

流行歌今日も屋台で酒が待つ
なるほどな苦労の涙無駄じゃない
ど根性出し牛肉も命がけ

鳥取県　蔵本悦子

ツキ変えるためにゲームの席を立つ
ど根性なく神様にすがってる
天下取る気概で生きよ子を諭す

鳥取県　岡村孝明

八十に成れば米寿と欲がでる
灯が見えた八十路の坂の米寿茶屋
白鳥も止まる場所にて絵にもなる

鳥取県　平井栄翁

冬籠もり気ままな猫がよく眠り
布団干すやっと一日冬日和
寒椿咲いて心を和らげる

鳥取県　山岡久枝

良薬もすぎると毒に化けました
ホカホカの肉饅笑顔とりもどす
ハツラツと健康茶飲み散歩する

鳥取県　藤山弘子

子離れをしろと母親破門され
柿むいてこれぞ日本の秋を干す
あれそれでなるほど夫婦よく判る

鳥取県　平木公子

先の先読める眼鏡を持ってない
合掌へ心の闇が晴れてくる
なるほどと誘いに乗った悔いばかり

鳥取県　小谷はるみ

裏方が好きで忙しく動く夫
花道を通る資格はとうに捨て
明るめの紅を引いたら気も軽い

鳥取県　橋谷静江

紅葉前線寒さを連れてやって来た
やりくりをして出た旅でバスに酔い
空っぽの懐だから動かない

鳥取県　細田裕子

死ぬ事は計算にない小銭貯め
エンマから破門されそなホラを吹く
人妻は等身大の噂好き

鳥取市　加藤茶人

百円の価値を見直すショッピング
価値観の違うところに味がある
まあまあと攻められる身も辛いもの

鳥取市　福島庸二

やじ馬にならぬつもりが声が出る
正月の晴着を選ぶ老いの暮れ
物忘れ無礼な歳の土産です

鳥取市　河田のり代

愚痴こぼし助言すなおに胸に沁む
吹雪く夜は隣の鼾暖かい
ぎっしりと積めこんだ知恵世を拗ねる

鳥取市　横田春名

花は花恋にもえるも人の花
年輪を重ねて神の恵み知る
平凡な人生今日も茶のうまさ

鳥取市　山口千代子

今日もまた恙なく明日へのページ
鳥取市　森　美智代

本当はカラオケが好き演歌好き
装飾をはずし身軽になっていく
鳥取市　渡部伯坊

第九条都合の術で破壊され
なるほどね普通に生きる難しさ
元駅舎喜怒哀楽の図が香る
鳥取市　田中憧子

招かざる客が一番先に来る
老人は買うなとちさい注意書き
くしゃみする看護婦さんへおだいじに
倉吉市　西脇日出子

手も口も元気だ今日も有難う
有難うすなおに言える嬉しい日
古新聞弁当開き拾い読み
米子市　小塩智加恵

長生きをしたいと腹は六分目
酒の味うまいといわれ調子よし
戒名をもらう和尚と仲が好い
岡山市　清水金太郎

宝くじせつなる願いわからぬか
宝くじ買うに暦で日をえらぶ
警官がめったに居ない駐在所
倉敷市　撰喜子

年金の暮し元気にボランティア
痛いとこできて体の仕組み知る
新宮の誕生街を元気づけ
広島県　福島万年

戦争が言葉を牢に閉じ込める
ただいまの声と飛び込むランドセル
鬼は外豆はたくさん持って行け
府中市　岩本雅代

飼う事を忘れて詫びる熱帯魚
暗い世に太陽のぼる新宮さん
黒髪の若者目立つ世の変化
安来市　原煩悩児

職退いて戻る故郷の青い空
鼠など見向きもしない肥えた猫
晩酌を生きる力に妻と酌む
出雲市　加藤スズコ

化粧塩跳ねて引き立つ睨み鯛
ニュースから知らない国が見えて来る
御誕生喜び胸にしめくくる
出雲市　栂ミツヱ

この一年夫を亡くして一人旅
木守柿二つ残して烏行く
テロの事いやな思いでテレビ止め

母に似た涙もろさをふり払う
生命ある限り明暗つきぬ娑婆
はつきりと脈うつ生命ありがとう

島根県　持田多輝子

人心の隙間を鳴らす寒い風
自分史を手帳に尋ね書いている
改革が右に左に蛇行する

島根県　毛利幸

理屈つけ人生いろいろコップ酒
物忘れ石ころ蹴って考える
この話深い訳あり箱に詰め

島根県　松本聖子

追いかけた運がそっぽを向いてゆき
鈍感なふりして夫をたてておく
牛肉のない食卓が続きそう

島根県　菅田かつ子

風邪引いて伏せれば髭がよく伸びる
ジングルベル聞けば師走が気忙しい
鍋つつく師走の夕餉温かい

益田市　岡田たけを

あちこちで内緒話が声になる
休日を朝寝に誘う雨の音
北風が肌を摩りに来ています

松江市　山根邦代

構えなく出合った人の人間味
ふぶく庭さざんかホッホ息を吐く
母さんのピエロ何でも丸くする

松江市　福間芳枝

医者いらず柿を残して過疎の村
列島が沸くこうのとり舞い下りて
遠い世に卑弥呼の名持つプリンセス

松江市　松本知恵子

頑なな心も愛で溶けて行く
株相場助言期待の年の暮れ
有意義に過ごせた日々を感謝する

兵庫県　黒崎美紗子

千姫のロマンを語る天守閣
戦争はしないと誓ったはずですよ
壁土で埋めておきたくなる鏡

兵庫県　広瀬房江

画いて読んで遊ぶ寂しいなど言えず
弁解をしても私が惨めだけ
言い訳でいつも逃げると責められる

兵庫県　岩本美緒子

もみじ寺南無阿弥陀仏の風に逢う
新宮の誕生祝賀かけめぐる
FAXの絵にかわいい声を聞く

兵庫県　徳平毬子

お月さんやけどせぬよう遠花火
春浅しテレビだろうか虫の声
ほら吹いて嬉しいことはおすそわけ
逢うだけで満足出来る歳になり
朝刊がコーヒー冷ますテロニュース
缶ビール食事はコップ注いで飲む
野も山もシャワーを浴びた雨上がり
定年後結構多忙家事の助手
注意した手前自分も縛られる
決断のたびにハードル下げて生き
新しい手帳に記す未来絵図
空っぽの財布を覗く冬苺
おやじの掌がむしやらの皺僕は見た
振りだしたサイコロ走る気のままに
今迄にない牛肉がこれでもか
満開の山茶花惜しむ老庭師
新嫁の介護怖くて頼もしい
節くれた指有難う老いの盃

宝塚市　飯西ミサヲ
姫路市　服部一典
神戸市　木村忠義
伊丹市　延寿庵野靄
西宮市　坪井孝一
尼崎市　尾宮弘治

マドンナもシニアグラスを光らせて
ばあさんが丸髷ゆうた写真帳
老眼鏡かけて恋の句作るなり
名も知らぬ町の消印旅便り
見え隠れコスモス畠の児の頭
うろうろとやってみたくて途中下車
訃報記事聞きたい事のあった人
一里塚あと幾つ越す大晦日
爪を剥ぎ夫婦喧嘩の武器がない
しまい風呂ゆずが頬なでキスをする
和傘さし旅の湯宿の露天風呂（山中温泉にて）
おしゃべりもピタリ止まった蟹御膳
ぼたん鍋ハートの芯がほかほかと
我が家でも料亭気分雪見酒
雪被りパンジーじっと春を待つ
柚子風呂にゆったり父の自慢歌
二言目はジョークで済ます主婦の知恵
第二子をもう待っている国民で

尼崎市　山田耕治
尼崎市　桑原東園
尼崎市　軸丸勝巳
大阪府　畑中節子
大阪府　藤井郁代
大阪府　桑田ゆきの

怨念とおさらばしたし寺参り
老醜や目立たぬ存在徹しきる
蟻地獄這い出てみえた別世界

大阪府　大屋敷　婦美子

葉を落とし北風の中春を待つ
だれにでも古きずぐらいあるものだ
独り居も考えようでまた楽し

大阪府　小　栢　こずえ

写真集裾野広がるわが家系
澄みきった夜空に星と人の数
様呼びをされてちょっとは上品に

大阪府　野　田　栄　呼

仕舞い風呂柚子に一人で戯れる
宝クジ当てたつもりの胸算用
塾女です老いていられぬ忘年会

大阪府　高　木　道　子

セールスのしつこい電話またかかる
針金はさぞ痛かろう錦松
三億の夢を楽しむ宝くじ

大阪市　中　井　正　秀

じいちゃんにギャグは少しも通じない
最安値親爺の席も寒くなり
のらくろとダン吉兄の本を読み

大阪市　中　村　叡　子

宇宙のゴミ燃えるといいな流れ星
何時のまにキムチの辛さ口になれ
手術後の未だ減塩の味けなさ

大阪市　平　井　露　芳

大阪城借景にして歴史館
うちはもう解禁ですと肉を買い
映画好きシニア料金有難い

大阪市　小　川　恵美代

主語のない会話が通る老後かな
夫との二人三脚ケ・セラ・セラ
七十路を鏡の前で華やいで

大阪市　辻　本　登季子

守備範囲広げた妻にヒゲが生え
隠し味技などないが慈母の味
寝呆け顔あれで何でも地獄耳

大阪市　岩　崎　公　誠

しくじって頭掻く子が無くなった
勤労に感謝したいがリストラに
苦の次は楽と信じるこの甘さ

高槻市　西　谷　治三郎

バージンロードすんでがっくり父の肩
馬耳東風苦労も鼻で受け止める
聞き馴れた靴音鳴って秋の燗

高槻市　執　行　稲　子

高槻市　安田忠子

新宮の誕生またれり冬ぬくし
み仏に心洗われ秋深し
雨の中それでもするかゴルフ狂

東大阪市　笠井欣子

球歴に傷つけられた月見草
有難い車椅子から見る日の出
カラオケに一興添える下手な唄

東大阪市　田中美弥子

自信喪失虹はやっぱり高すぎた
月が青すぎて昔に逢いたがる
勝者敗者へ同じ夕陽のノーサイド

藤井寺市　伊藤アヤ子

嫁姑秋の夜長のふと無口
十二月暦の丸は妻に負け
いつの世も楽な暮らしは無いみたい

藤井寺市　吉田喜代子

皇太子妃肩の荷下ろし浮かぶ笑み
お二人の見合わす笑顔常しえに
ルミナリエしばし節約忘れよう

藤井寺市　若松雅枝

つまみ食い祖母のおせちの美味いこと
リストラで家族の顔が揃う膳
浮き沈みたんと見てきた深い皺

藤井寺市　西村栄一

酒癖が別のわたしを演じきる
一病をあやしあやして達者です
曲り角風があいさつする陽気

寝屋川市　岡本勲

供養です煩悩すててする写経
親父より少しは高い山登り
各停で行くと決めてる我が余生

岸和田市　亀井皎月

生きていて良かったと言う日が欲しい
逝くまでは元気で居たく薬飲む
せっかちが直らぬままに老いが来る

泉佐野市　大工静子

喜びをあらわせられぬ私です
車椅子見て吾が足の有難し
朝は菊夕は山茶花年の暮れ

柏原市　永浜加津子

老境のふたり静かな平行線
年重ね春夏秋冬はやめぐり
包丁を研いで雑念切り捨てる

八尾市　與田明

チューハイに本音が泡になって消え
木枯らしが胸の片隅突きぬける
冬くれば冬が楽しい鍋料理

障子紙指が空けてる好奇心
遅刻したわけは時計の所為にする
ポケットで握りこぶしが我慢する

八尾市　山本宏至

新世紀小さなお手に預けられ
熨斗紙が張り替えられて回る品
おおきにが心に届く屋台店

八尾市　中島春江

お月様地上の戦笑ってる
そう言えば日本まだまだ金がある
痴呆症成りかけボタン右左

八尾市　高橋明子

親友の笑顔に会えたもみじ狩り
友と会い吹きとびました胸のうつ
七五三そろそろ歩くお姫さん

堺市　大橋錦

意地もありへっぴり腰の駄馬なれど
山暮し辛いか狸蠑死する
人生はジキルどハイドの戦です

堺市　渡辺さだを

不況風吹いて師走を馬かける
愛子さま我が家の姫は菜々美さま
どの顔も誕生祝う平和な日

枚方市　二宮紫鳳

パソコンで個性消えゆく年賀状
ボケ防止昔ソロバン今パソコン
幸せは琴の調べと初日の出

枚方市　荘司弘之

幸それぞれ肩組み合えぬ町暮し
電子音干からびさせる人の情
路地裏は情けを汲み合うごあいさつ

枚方市　大昇隆広

ユニクロで間に合わせてる此の不況
パチンコ屋ばかり元気なこの日本
満月も新宮誕生祝っている

枚方市　小川良吉

人生の仕上げの時期を考える
壁ぐらい塗ります紅も引いてます
大の字の赤子未来を握りしめ

吹田市　二宮栄子

十二月ほっと明るく愛子さま
なんとなく幸せ予感夕焼野
息切らし妻と二人の六十路坂

豊中市　源田啓生

生前の忠告死後によみがえり
暗い世に宮様誕生陽が昇る
新宮を仰ぎ記帳の門くぐる

豊中市　岸田知香子

麻生路郎物語 (2)

― 十七歳の出会い ―

東野大八

尾道から単身上阪して、船場に働き口をみつけた麻生善七は、二年間の大阪の暮しにも自信がついたとみえ、郷里から家族を大阪へ呼び寄せた。里子の路郎もこうなってはいつまでも駄々をこねているわけにはいかず、島での里子の生活も十一歳の齢を迎えて終止符を打った。そして船場尋常小学校四年に編入された。時に明治三十一年春である。

さて、麻生一家が根を下ろした大阪の船場だが、ここは商都大阪のどまん中、世にいう浪速商人の大小問屋の密集地帯で、老舗の名門ものれんを競うところだ。かつてテレビの評判ドラマの〝せんば〟は、この船場という特異な土地柄を舞台としたもので、いわば大阪商人の土根性ぶりのモーレツぶりが見せ場の一つでもあった。

江戸期における上方商人勃興のころ、大阪商人が如何に骨身を削って身代蓄積に精励したか、チリも積れば山となる式の細々とした暮しに徹しつつ、いかに商機を捉えることに異常な努力を傾けたか、儲けがケチの凄じいばかりの〝のれん〟を背にするその土根性ぶりについては、井原西鶴の町人文学の、町人もの三部作（日本永代蔵、世間胸算用、西鶴織留）に詳しい。船場とは、正しくそうした大阪商人が土根性のメッカそのものといってもよい。

麻生善七が四十も半ばといういい齢で、選りに選って大阪といっても並外れたこんな船場へ、はるばる尾道くんだりから出てきて、どういう伝手でここに住みつき、一家を呼びよせる暮し向きになったものか。詳細は不明である。山雨楼メモにつぎのくだりがある。

「尾道は花井卓蔵、山口玄道さんらを生んだところ。衆議院議員橋本左吉氏は亡き父の碁友達であった。玄道さんも父の知人であった」

この記述からすれは、善七の大阪での就職は、メモに出てくる尾道の知名士の関連する会社か、それともその伝手による縁故就職のようにも思われる。

「会社員であった父は、明治四十二年九月二十日私が二十二歳のとき、脳溢血で五十五年の生涯を終った。私には厳格な方だったが遊びは相当にやっていた。この父の挿話は、他の機会に譲ります」（山雨楼メモ）

路郎の父はサラリーマンであったことだけはこれでわかる。だが一体どのような勤め先の会社なのか、一切ふれられてはいない。他日機会をみて語るという亡き父に関しての話も同様で、山雨楼メモにはこのあと一行の記述もない。

明治三十七年、十七歳になった路郎は、この春、出入橋にあった高等商業予科（商大の前身）に入学する。この学生生活の中で、路郎は運命的ともいう、川柳との出会いがはじまったのである。

「高商予科に入学したとき、クラスで新聞や雑誌をとった。その中に読売新聞があって、

その紙上に柳壇（名称〝瘤柳〟）があった。田能村朴念仁、後に朴山人がその選をしていられた。そこにある句を読み、非常に興味を覚えてつい作句しはじめたのが、そもそもの川柳を作り出すようになった動機である。そのころ、窪田而笑子（のちの当柳壇の選者となる）も投句家の一人だった。

自分の句が新聞に載ったのはこの読売柳壇がはじめてである。そのときの句はどんなものができ上っていたのかは、切抜きや控えがないのでわからない。そのときの柳号は路郎ではのっていない。千松だった。路郎という号を使用するようになったのは明治四十三年頃と思う」（大正八年発行の柳誌「絵日傘」五月号所載のアンケート）

この辺で路郎が宿命的ともいえる川柳との出会いをみせた、往時の新聞柳壇について述べておこう。路郎のこころの底から川柳なるものを触発させた重要な役割を果たした新聞柳壇でもあるからだ。

川柳が新聞に柳壇の形をとって掲載されるようになったのは、明治二十七年の日清戦争のころ、篠原春雨が時事的なものを十七字によって発表したのがそもそものはじまりとされている。それ以前は、明治十年代に出た滑稽雑誌の柳欄が先行した形であった。川柳欄の雑誌の第一号は団々珍聞（まるまるちんぶん）である。創刊は西南の役が起きた明治十年の三月、東京神田雉子町団々社の発行である。念のため申し添えておくが、日本の新聞のハシリは文久二年に出た通称バタビヤ新聞がそれである。シナ式の和綴本で美濃紙二つ折。いわば江戸化政期の瓦版の特集号の体裁とみてよい。発行も明治の初年は三日に一回が圧倒的に多い。当時の新聞名は「中外新聞」「崎陽雑報」が一流どころで木版活字使用、あとの新聞の題号は「此花新聞」「海陸新聞」などはややまともな方で「浮世風聞」「もしお草」「そよ吹く風」といった人を小馬鹿にしたようなものが氾濫している。明治五年に「東京日日」「報知」の二大新聞が出現して、はじめて今日の活字マスコミが軌道に乗った形だ。

読売新聞の名が出たのでついでにこの新聞の題字の由来を書いておこう。創刊は明治六年十二月、日就社といって英和字典の発行元だったが、副業に当世流行の新聞事業に眼をつけた。諸般の準備整ったがかんじんの紙名が決まらず社員間で大いにモメた。まず俗談平話を旨とする故「通俗新聞」とでて、いやふりがな付だから「ふりがな新聞」「かな新聞」「やわらぎ新聞」「をみな新聞」などとてんやわんや。思いあまって漢学者に相談したら「京華流影」と命名してくれた。こんどは英文学者にきくと「東西南北」まるで麻雀屋である。新聞紙は全国の早便なれば「あきつすのはゆまぶみ」（秋津州の駅）という舌を噛みそうな題名にどうやら落ちつきかけたところ、その席上で瓦版というのに気付いたのがいて「よみうり」と出た。今日の天下の「読売新聞」の発刊時における以上が正真正銘の実話である。（昭和十年刊〝日本勃興秘史〟一元社版）

閑話休題。団々珍聞もまた往時の日刊新聞変じて雑誌形態となったしろものの一つであった。川柳はその第二六号から姿を現わした。その歴史的第一句は

—朝敵も昨日は東、今日は西

この雑誌は十六年間も持ちこたえたが、感心なことに毎号川柳数句は欠かさなかったものの、遺憾ながら徹底した狂句であった。この雑誌の川柳に眼をつけたのか、団々珍聞から少しおくれて、明治十年八月発刊した「驥尾団子」も川柳を掲載し続けた。

—穴なくば何んのおのれが二等親

これが創刊第一号の句

これにつづいて翌、明治十一年十一月に創

刊された「月とスッポンチ」も川柳を忘れなかった。創刊号のサンプルの一句

―風呂の屁で究理をしたか水雷火

以上の三誌の川柳の点者は、風也坊雪舎―すなわちのちの七世川柳である。正しくいえば七世風也坊川柳　山県氏広島久七　初号雪舎。明治十六年社中推薦により七世を継ぎ、同十九年隠退柳翁と改め、同二十四年九月六十七歳で死去。

まだある。あけて明治十二年一月「我楽多珍報」が創刊された。発行元は京都日日新聞社。さきの三社はなべて江戸は東京なのに対し、関西から似たようなのが出たわけだが、点者にこと欠き、そのためかわざと川柳を意地悪くひねってその柳欄のタイトルは「洗流」

―こりや猫だ鯰かしくの針で釣れ

創刊号のへき頭の第一句がこれである。

川柳とは名のみ、骨の髄まで悪フザケの狂句に爛れ切った活字マスコミの横行ぶりに、やがてマナジリ決して登場してくるのが井上剣花坊と阪井久良岐の両人である。

本山桂川編の「川柳久良伎全集」に拠るとそもそも久良岐が川柳との馴れ染めは

「平田篤胤の講本によって、川柳の興味あることを知り、明治十六年ごろ団々珍聞の狂句に応募した」

とある。久良岐は明治二年生れだから十四歳で川柳に手を初めたことになる。時の点者は前述の通り七世風也坊川柳である。久良岐の川柳入門はこうみると狂句というわけだ。

この久良岐が剣花坊とともに「狂句百年の負債を返えす」べく狂句追放運動に起ち上るのだが、久良岐が新川柳運動への活眼を開いたのは、正岡子規の感化によることは今井卯木著の「川柳江戸砂子」の序文の中にあきらかだ。子規と久良岐は共立英語学校の同期生であったが、在学中は没交渉のままであった。ところが世に出て子規の俳論にふれたのが久良岐二十七歳（明治二十八年）の時であった。久良岐の新川柳確立のための柳論「川柳梗概」を生む素地はここに生れた。

もっともこの久良岐にしても剣花坊にしても、渤拝として高まる往時の俳句、短歌のめざましい革新運動に刺戟されてのことだが、剣花坊は狂句を純正川柳の場に戻し、川柳詩をそこに加味する近代的川柳の確立を図るべくまず王道川柳を唱えた。これに対し久良岐は、初代川柳の柳魂に還るべしと主張したのである。ともに狂句追放への意図に他ならぬが、この両者のライバル意識がやがて、明治三十三年代における新聞柳壇時代となって花開くのである。

剣花坊の日本新聞における「新題柳樽」は明治三十六年七月三日の創設となり、一方久良岐は電報新聞に「新柳樽」の柳壇を開始したのが明治三十七年四月二十九日付からである。このほか岡田三面子が東京日日に市村駄六がやまと新聞に、田能村朴念仁（のち朴山人）が読売にと時を同じくしてそれぞれの柳壇をもって活躍した。

「岐氏は江戸趣味を唱導し、古川柳の穿ち軽味、可笑味の三要素を明治の新時代にきわめんとし、剣氏は一般文学に欠けたる滑稽が川柳の主要なる素と主張す。かかる時しも朴念仁氏は読売紙上に俳句趣味より出でたる写生を生命とする一風を唱え、ために三氏てい立の状を呈するに至った」（中島紫痴郎・

「矢車」明治四十四年二月号）

往時の新聞柳壇はこのようにして久良岐派、柳樽寺派（剣花坊）読売派（田能村朴念仁）の三流てい立を主軸としていた。明治三十八年八月紙上のこれらの柳壇選者の作風はつぎの通りである。

―殿様頬かぶり奥様編笠海水浴　剣花坊
―賞与金書入れにして質を置き　久良岐
―萩の径またぼんぼりが一つ見え　朴念仁
―御長命会申し候閻魔判　駄六

明治三十年代の世相は、政治、軍事、思想、社会各面にわたり騒然たる事件が相ついでいる。憲政・政友両党の結成。日露戦争の勃発。足尾鉱毒事件で軍隊出動。ロシア第一革命起る。片山潜・幸徳秋水社会民主党結成。ポーツマス講和を不満として東京全警察焼打ち事件。孫文東京で中国革命同盟結成。平民社解散。南満州鉄道株式会社設立ETC。

一方、詩壇では藤村が「若菜集」を発表したのにつづき、雑誌「明星」（M33）が創刊され、星とすみれの新抒情時代の幕は切って落された。若き天下の俊秀、与謝野鉄幹の新詩社にむらがるなかで、きらめくその星座に一しお輝く明星こそ鳳晶子（与謝野晶子）である。それに相拮抗するように、石川啄木が二十歳にして「あこがれ」（M38）を公刊して世を愕ろかせた。新浪曼派のけんらんたる銀河を想わせるこの新短歌時代に対し、俳壇では巨匠正岡子規が死去（M35）したが、それと同時に虚子・碧梧桐の二大勢力が俳壇を左右した。明治三十六、七年に「温泉百句」を通し両者の一大論争が展開されたあと、碧は世にいう全国行脚二千里の旅のわらじをはくのである。時に明治三十九年。

読売柳壇にはじめて川柳を見出し、その魅惑にかりたてられた路郎十七歳の多感な青春を押しつつむ明治三十年代―それは路郎の十代のすべてでもあった。

つりがねマントに朴歯の下駄を鳴らしたその十七歳の学生路郎の上に、日露戦争の妖雲がおしひろがった。その硝煙の彼方からきこえるのは、人間愛の叫びを三十一文字の短詩型のロマンにこめた与謝野晶子の「君死に給うことなかれ」の絶唱であった。

第3回井笠川柳会笠岡誌上大会
「蕊」（ひこばえ）　―応募資格不問―

課題と選者（各題2句・共選）
「前」（泉　比呂史／高岡　健太／山口　流木）
「足」（中田たつお／小林由多香／灰原　泰子）

応募料　千円（定額小為替）　発表誌皇
応募要項　B5用紙1枚に各題2句（計4句）列記　〒・住所・氏名・TEL・所属柳社を明記
締め切り　2月20日（水）
投句先　〒714-0081 笠岡市笠岡507―68　井笠川柳会宛
TEL 0865-63-5858 FAX 0865-63-6131
お問い合わせは戸田さだお迄
賞品　課題1位に句碑建立（2名）・三才に粗品皇
主催　井笠川柳会笠岡
会員募集　年会費千円（年4回あすなろ発行）

川柳とは何か
―川柳の作り方と味わい方
麻生路郎の幻の名著　価二〇〇〇円
◇お申し込みは川柳塔社事務所へ

「川柳塔」900号記念川柳大会

〈臨時同人総会〉

と　き　**5月4日（土）**午前10時～11時
ところ　ホテル・アウィーナ大阪　3Ｆ信貴の間
（近鉄上本町・地下鉄谷町六丁目下車TEL 06-6772-1441）
議　事　役員選出（総会継続審議事項）

〈記 念 句 会〉

と　き　同　日　午前11時開場
ところ　ホテル・アウィーナ大阪　4Ｆ金剛の間
開　会　午後1時　披講　午後2時
おはなし　「川柳塔900号の歴史」　川柳塔名誉主幹　橘　高　薫　風
出句締切　正午（各題1句・欠席投句拝辞）

兼　題			
「宿」	川柳塔社	奥田みつ子	選
「休み」	川柳塔社	森山盛桜	選
「囲む」	川柳塔社	高瀬霜石	選
「説得」	川柳塔社	菱田満秋	選
「葉」	ふあうすと川柳社	泉　比呂史	選
「不思議」	時の川柳社	小松原爽介	選
「パンチ」	番傘川柳本社	礒野いさむ	選
「生きる」	川柳塔社	西田柳宏子	選
「九」	（事前投句）	河内天笑	選

※4月10日までに川柳塔社事務所宛

閉　会　午後4時半予定
会　費　2,000円（記念品呈）　当日いただきます
〈懇親宴〉　7,000円（会席料理）　午後5時～7時半　4階　金剛の間
〈宿　泊〉　8,000円（朝食付）　アウィーナ大阪
〈翌日見学〉　5,000円（昼食付）
高野山川柳塔碑見学・参拝（南海電鉄特急利用）午後3時帰阪予定

◎大会、懇親宴、宿泊、翌日見学の申し込み及び事前投句は、所定のハガキ（2・3月号に添付）に明記の上、**4月10日**までに川柳塔社事務所宛お願いします。
◎懇親宴、宿泊、翌日見学の費用のご送金（当日会費を除く）も同日までに添付の払込み用紙でお願いします。
◎記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

主催　川　柳　塔　社

愛染帖

波多野五楽庵選

実柘榴に赤き迷宮あるごとし　和歌山市　木本　朱夏
吾亦紅すこうし意固地すぎないか　堺　市　山本　半銭
逢い別れ紡いだ糸に綾がある
先立たれ根無し草にも似た虚ろ　京都府　丹後屋　肇
仏名会　五体投地はまだ続く
反戦の闘士が唄う海ゆかば　藤井寺市　高田美代子
腰痛へ体当りする孫のテロ
神様を時々うらむのもヒト科　米子市　白根　ふみ
花咲いて散って冬野の真ん中に
ふつふつと冬の眼鏡がたまらない　和歌山市　川上　大輪
嬉しさが逃げないようにまるく寝る
人間に泣かされ人に笑わされ
砂時計から時々人が落ちてくる

愛憎の極みでひらく冬花火　和歌山市　福井　桂香
逆光の街でアハハと笑っとく　尼崎市　田辺　鹿太
陽が落ちる五本の指の隙間から　吹田市　山本希久子
猫と居る時間の長くなった妻
冬の絵の中に記憶をしまいこむ　大阪市　神夏磯典子
ジェラシーが匂う女の曲り角
鬼の面やましいことはありません　高槻市　乙倉　武史
風格が備わってきた負けの数
流転劇終止符を打つ墓を購う　弘前市　相馬　銀波
あちこちが痛むと老体武器にする
雪ゆきの津軽で残る青りんご　東京都　播本　充子
無造作に握手はするが孤独です
使い捨てカイロに劣る男の手　愛媛県　中居　善信
肩書きが死ねない様な気にさせる
裏道を歩いた自負を持っている　鳥取市　夏目　健一
その時は切腹などはせぬ積もり
貧乏の磁石なるほど北を指す　米子市　政岡日枝子
独り言余命に絡みついてくる
ほっこらとする席だから動けない

ばっさりと斬られ上手になりましょう　京都市　山本　礫
ハウトウリブ疑問抱えておさらばか　横浜市　山下　省子
通り雨濡れて行く子の咳一つ　高槻市　生田　義一
飽きる程一緒に生きて空気です　東大阪市　北村　賢子
御堂筋本町あたりでプロポーズ　大阪市　浦田　綏子
モンタンの枯葉流れて冬が来る　横浜市　菱田　満秋
泥臭い石だがどこか温かい　八尾市　吉村　一風
父二人母ふたり逝きわが凍土　富田林市　池　森子
佗助の白さよ愛に疎くいて　堺　市　和田つづや
墓の穴今日も五センチ掘れました　弘前市　一戸　ツネ
眼を刺した礫おろおろするばかり　弘前市　櫻庭　順風
山柿がぽとりと落ちてひとつの訃　弘前市　斉藤　劦
津軽百景愛してやまぬ土踏まず　弘前市　高瀬　霜石
人情の風まろやかな裏通り　弘前市　高橋　岳水
背伸びしたままのくらしで疲れ切り　堺　市　河内　月子

和歌山市　西山　幸
ほそぼそと私を燃やす冬籠もり

唐津市　久保　正剣
キューピッドの誤爆も捨てたものじゃない

西宮市　牧渕富喜子
一枚のメモにかすかな震度一

鳥取市　徳田ひろこ
不揃いの糸をフーフー吐いている

八尾市　井尻　民
終章の人生に置く花言葉

大阪市　三浦千津子
お互いのタブーに触れぬ微笑癖

岡山県　山本　玉恵
耳栓を外しひとりの回り椅子

高槻市　江原　秀夫
北風に財布の紐のこま結び

八尾市　村上ミツ子
ふくらませ過ぎた風船もてあます

尼崎市　春城武庫坊
老いのたつきに日の暮れるのが早くなる

寝屋川市　森　茜
つるし柿むかしむかしにある土蔵

京都市　都倉　求芽
お座りとお手で一日つながれる

鳥取市　近藤　佳子
桜紅葉最後の舞は優雅なり

富田林市　片岡智恵子
理想詰めすぎて風船墜ちてくる

今治市　塩路よしみ
介護して人のこころをとり戻す

西宮市　門谷たず子
原点に臍の緒がある母の自負

倉敷市　小野　克枝
無い袖は振るなと風があたたかい

米子市　青戸　田鶴
鐘の鳴る方へ花首かたむける

愛媛県　宮本　末子
病んでます一人も産めなかった罪

米子市　光井　玲子
やっと今古い衣を脱ぎました

河内長野市　水谷　正子
十二月八日もみじが綺麗すぎ

藤井寺市　太田扶美代
ゲームセット甘えがすぎていたようだ

弘前市　福士　慕情
カボチャだと思えばなんとかなる話

海南市　三宅　保州
種を播くことを忘れていませんか

河内長野市　加島　由一
竹とんぼ兄を越す日がもう近い

東京都　やまぐち珠美
愚かしいほどまっすぐに飛行雲

堺　市　志田　千代
介錯をされた椿はるいるいと

富田林市　中井　アキ
それぞれの秋を見ている展気楼

和歌山県　中後　清史
運命のいたずらだろうつむじ風

八尾市　高橋　夕花
十五夜のみちはあまりに無防備だ

川崎市　大島三四朗
恐山一円玉が吹き溜り

寝屋川市　籠島　恵子
お先にどうぞ道くさをするつもりです

米子市　鷲見　正子
歯車になって勝手に帰れない

倉吉市　野口　節子
不景気でうちの柱が痩せて来た

吹田市　早川　棲世
それならば別れるという妻になり

和歌山市　吉村さち子
底辺に人情あつい鬼がいる

出雲市　園山多賀子
テロ疑惑解けないままに秋刀魚焼く

鳥取県　上田　俊路
薔薇買って薔薇より好きな人と逢う

松江市　川本　畔
ヨーロピアンタイプの君の座り方

西宮市　緒方美津子
紙袋提げて広告塔となり

鳥取県　鈴木　公弘
坊さんに合掌される年の暮れ

和歌山市　楠見　章子
いくつから老後　爪はすぐ伸びる

鳥取市　福田　登美
寂しくて心の風にからまれる

和歌山市　青枝　鉄治
再審へ男のいのち賭けてみる

出雲市　板垣　夢酔
辞職して北風ばかり寄って来る

羽曳野市　吉川　寿美
わが性の深い処で水の音
大阪府　澤田　和重
試行錯誤しながら辿りついた古希
寝屋川市　江口　度
北国の痛みつららの先にある
今治市　渡邊伊津志
励ましの陽がある影がついてくる
愛媛県　花岡　順子
まっすぐな心に嘘がつけようか
大阪府　籾山　隆盛
惜別の酒がなみだの腑にたまる
和歌山市　松原　寿子
思いあたる節から傷が疼き出す
吹田市　石原　靖巳
ライバルの痛みへそっと傷ぐすり
綾部市　藤田　芳郎
ノーというキーは持たないコードレス
和歌山市　上地登美代
だんだんと昭和が遠くなって冬
大阪市　小林　周信
体重が増えてこの頃ひらめかぬ
唐津市　市丸　晴翠
新世紀まだ自画像が定まらぬ
米子市　野坂　なみ
帰命頂礼バックボーンに染みてゆく
川崎市　和泉あかり
いち抜けた穴へ自虐が立てこもる
横浜市　芦田　鈴美
合掌の指から漏れていく私欲

奈良市　米田　恭昌
ヒトゲノム福耳だけの家系です
尾道市　光吉　裕
裏切った数だけ負うている因果
横浜市　川島　良子
煽てるとテッペンまでも登りそう
黒石市　相馬　一花
ひと癖もふた癖もある後れ髪
米子市　澤田　千春
夕焼けの神にまいにち逢いにゆく
横浜市　長島亜希子
ユニクロが揃って老いのハイキング
東大阪市　安永　春
言霊の余韻ふつふつ温かい
八尾市　宮崎シマ子
その時の都合で鬼の味方する
尼崎市　長浜　澄子
反省もしきり師走の衣紋掛
横浜市　清水　潮華
年重ね重ねて夢を友達に
横浜市　金森　徳三
僕だけに金木犀が匂わない
松原市　玉置　重人
視野変えて堪忍袋縫いなおす
弘前市　宮崎ヒサ子
こだわりの一つを抱いて年暮れる
和泉市　横山　捷也
娘の愚痴を聞いて師走の遅い飯
横浜市　保田　絹子
忘れてた傷をドラマに触られる

松江市　津川　紫晃
男の城に隠し扉がひとつある
美祢市　安平次弘道
踏ん切りがつかず演技がぎこちない
米子市　林　瑞枝
会者定離　涙で腫れている小町
倉吉市　淡路ゆり子
有りがとうばかりで個性なさすぎる
大阪市　渡部さと美
封建的言いぶんですと妻が斬り
西宮市　西口いわゑ
えんぴつと深い迷いの中にいる
和歌山市　山口三千子
何か事あれば女の所為にされ
三田市　北野　哲男
定年へ十指に足らぬ辞令の字
奈良県　渡辺　富子
置き手紙白くぼつんと冬の部屋
鳥取県　田村きみ子
はったりと分っていても手強いぞ
富田林市　大橋　鐘造
失敗が続いて笑う他はない
香川県　川崎ひかり
風吹けば風に流れる山頭火
松原市　小池しげお
坊さんが飲酒運転して行った
寝屋川市　太田とし子
我が子なら仕方がないで済まされる

同人特集

夫婦百景（その一）

平成八年～平成十年
同人吟から　編集部

羊羹のことでもめてる老夫婦　路郎
小金あり梅干すことで夫婦もめ　葭乃

お互いに化け損なっている夫婦　谷口　次男
パン一つ分け合い夫婦の旅続く　竹治　ちかし
夫婦して無題の旅を考える　園山　多賀子
真珠婚過ぎても名前呼んでいる　春木　圭一郎
この坂も夫婦湯のみが知っている　福井　桂香
ああ言えばこう言う夫が居て楽し　池内　かおり
竹割ったような姉さん女房です　羽津川　公乃
伴走の妻と朱盃を重ね合う　梅田　宣司
別姓にするから妻が威張り出す　安平次　弘道
老妻病んで大技小技使い分け　小砂　白汀
亡夫と妻固くつないだ赤い糸　太田　幸枝

夫婦箸春をたしかなものにする　岩本　美智子
妻の打つ釘が近頃効きすぎる　西出　楓楽
保守的な男の妻の反抗期　瀬戸　まさよ
ちぐはぐな夫婦で離婚考えず　高須賀　金太
失速のピンチもあった夫婦独楽　青枝　鉄治
執行猶予付きで許してくれる妻　三宅　保州
スーパーの棚に合わせた妻のメモ　長谷川　呂万
ざるで水汲んで帳尻妻に来る　山口　三千子
小指ほどの虫が夫婦の中に棲む　田中　叶
明日はあす今日漫才の夫婦する　神夏磯　典子
ぼやき漫才　夫とすれば受けるだろ　桜井　千秀

することがないから妻の肩をもむ　藤解　静風
犬を叱るついでに妻に小言いう　新家　完司
いつまでもバランス続ける夫婦独楽　富田　蘭水
偏屈を通す夫をてのひらに　岩崎　みさ江
仲のよいふりをしているフルムーン　岩津　ようじ
ちぐはぐな返事で通じる老夫婦　小熊　江美
変化球妻が苦手を突いてくる　藤井　正雄
音程がずれた夫婦の隙間風　矢内　寿恵子
コーヒーがお茶に変わった老夫婦　原　さよ子
ドラマなら男の道理わかる妻　古川　喜美子
少しずつ荷を軽くする夫婦舟　都倉　求芽
のんびりとせかせか夫婦馬が合い　最上　和枝
年金と入れ歯は夫婦別べつに　小林　妻子
死なれては困る妻だが強過ぎる　岩原　喬水
せり合いになったら妻の底力　岩佐　ダン吉
夫病んで仲よし夫婦になってます　川端　柳子
持ち上げて妻の力を楯にする　寺井　東雲
つくろうた内助の傘をさしている　福原　悦子
男と書いて背中に貼ってくれる妻　千葉　風樹
回顧録　花も嵐もまだ夫婦　山門　タミ

火を守り妻のつとめを無事終わる　土橋　睦子
秋の夜パントマイムの老夫婦　池田　善守
ぬか漬けが古漬けになる老い二人　岸本　豊平次
夫唱婦随は恋の魔法が解けてから　小島　蘭幸
オイと呼びハイで築いたお城です　太田　とし子
マイホーム目ざし夫婦の白い息　須郷　井蛙
記念日や妻とタンゴを踊らんか　森井　菁居
夫婦円満たまには喧嘩したくなる　二宮　山久
賞味期限切れて夫婦の味になり　吉川　寿美
仕付け糸抜いて家内と真珠婚　古川　奮水
花道は妻と引っ張る縄電車　古谷　節夫
ケーキカット夫婦の夢は無限大　堤　邦子
装うた義務と演技の夫婦みち　成重　放任
夫婦して増えた白髪と物忘れ　川内　叭笑
色ちがい夫婦湯呑で新茶汲む　長谷川　春蘭
亭主関白許し続けて水になる　小野　克枝
リリーフの妻が後ろにいる安堵　平田　実男
ひょうきんな妻には丸い角がある　尼　れいじ
花に水やるにも妻と食い違う　美田　旋風
何もかも妻が舵とる余生です　杉本　孝男

浮き浮きとひとり旅する恐妻家　北岡波留吉
ちぐはぐな二人三脚でも夫婦　川島諷云児
秋の雨夫婦に長い無言劇　高橋夕花
残る日を温め合って夫婦椀　木村富美子
そよ風を入れて夫婦の程のよさ　片岡智恵子
別姓になっても妻の枠の中　垂井千寿子
負けて勝つ妻のいつもの手にやられ　木村貴代子
顔色を見てよみとった夫婦仲　松岡久留美
俺を引き当てたクジには弱い妻　酒井輝
ほんわかと春の音符が夫婦坂　林瑞枝
夫婦茶碗甘い言葉に飢えている　黒田くに子
夫婦とはこうでありたい傘の中　石尾かつ乃
デコボコの道に夫婦の詩がある　小白金房子
大蔵大臣わが家首相も兼ねている　前たもつ
夫婦して去年が合わぬ胴回り　渡部さと美
向かい風追い風妻の手を握り　篠原いつふみ
ほほかむりあねさんかむり雪夫婦　蒔苗果林
つづくのが不思議つづいている夫婦　三宅不朽
夫の字にいつか似てきたなと気付き　榊原秀子

溶け合えぬ色も夫婦のえのぐ皿　宮本かりん
長き夜のクロスワードを妻と解く　高橋岳水
未亡人にするぞと妻を驚かす　相馬一花
桁の傷ぼちぼち補修夫婦橋　西岡洛酔
たわいない会話恋しい単身赴任　石原淑子
おじいさんが死にほがらかなおばあさん　谷口義
遺族年金亡夫にすまぬパスポート　赤川菊野
詫び状を妻に一枚書かされる　山口高明
幸せは同じ価値観もつ夫婦　石谷美恵子
夫婦して歳だ部品を変えようか　両川洋々
お隣はいいな夫婦で散歩する　石原靖巳
僕の骨抱くのは妻と決めている　石川侃流洞
別居した日もありました夫婦墓　井上富子
夫婦喧嘩一冊本を読みあげる　高瀬霜石
妻パート男子厨房に入らんとす　津守柳伸
子が育ちやっと夫婦の身繕い　権代康女
酒夫妻はビールで共稼ぎ　板垣夢酔
四十年指輪なくても仲は良い　黒台伊佐武
一緒には死ねない夫婦茶碗かな　小池しげお

エッセー

「光秀様」

西村哲夫

「敵は本能寺にあり」明智光秀のあまりにも有名すぎる名文句である。

未だに権力者に対しこびる癖のある日本人にあって、当時光秀にとって絶対権力を持つ信長に、刃を向けた自らの葛藤を思わずには居られない。昨今では武士道日本人の「はらきり」DNAが、腹は切らなくても立場を降りれば良しと言う風潮に成り下がり、腰抜け武士道だけが生き残っている。

また、毎年必ずと言ってもいいほどに放映される忠臣蔵は、「敵討ち」DNAが引き起こす人気番組となる。吉良を主人公に物語が出来ないものだろうか。主人公は、この物語により好印象として歴史を作っていく。

今回は、私にとっての光秀像を紹介するのに他ならない、くれぐれも悪しからず。

大阪城の梅林を見下ろす所には南無阿弥陀仏の碑が建っている。これは、石山本願寺のあったことを指しているもので、親鸞聖人から数え第八代目、蓮如上人が（1497）坊舎として建てられたものである。

後に山科本願寺が日蓮宗に焼き討ちされると（1532・8・24）ここに本願寺が移された。第十一代顕如上人の時、信長と十年にも及ぶ退出命令に反発するも、勅により講和（1580・天正8春）退出するまで本願寺があった。

因みにおおさか（大阪）の文字が書物に初めて出てくるのは、蓮如上人の書かれた『御文章』五帖十五通に「そもそも、当国摂州東成郡生玉の庄内（大坂）といふ在所は、往古よりいかなる約束のありけるにや、さんぬる明応第五の秋下旬のころより、すでにかたのごとく一宇の坊舎を建立せしめ云々」と大阪の阪の字が坂の字であるが出てくる。

蓮如上人は水運の上人としても名高い。現在大阪城のあった所に石山本願寺があったことは蓮如の見聞きとも言うべきか、とても人の住める所ではなく、ただ一面葦が茂る河川敷であったようだ。

近江門徒（商人）が本願寺の移転するところに付いて行き、そこに門前町を作る。石山本願寺では一大商業都市が日本で初めて完成されるに至った。商売言葉となっている「毎度おおきに」や「おまけとさせていただきます」の受け身言葉は信仰の言葉として定着していったものらしい。（言語学者によるもの）この場所が商業都市大阪の礎ともなる所であることはあまり知られていない。

さて話を、光秀にもどさねばならない。信長は権力保持のため自らの思想を確立していく、おそらくそこには我が国だけを視野に入れず世界に向けての野望が渦巻いていたに違いない。某ら謀叛の気配が見えると、ことごとくそれを潰し、ことごとくその者を殺す。比叡山の焼き討ちはあまりにも有名だが、他に数え切れぬほどに寺社を破壊している。本願寺の長男教如は（後の東本願寺初代門首）、勘当覚悟で籠城するも約四ケ月で退去を決意信長と誓紙を交わす。その半年後石山炎上、本願寺に加担した雑賀の鉄砲隊皆殺し、それぱかりか移転した鷺の森から大阪貝塚へ逃げる本願寺へ光秀を送った。その時光秀は鉾先を本能寺に向けたのである。勝てば官軍の中、三日で落ちることとなった光秀よりも、親の敵を討った秀吉が好印象として歴史に残り、光秀は裏切り者の代名詞となってしまった。

本願寺を守り、謀叛その者は信長にあるとした、明智光秀を私は英雄視したいのである。

誹風柳多留二四篇研究 37

橋本秀信・粕谷長生
山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾
清博美・佐藤要人

289 **行平の噂ハたった二人りなり**

清 在原行平の艶聞の対象の女は、松風と村雨の二人だけ。

弟業平の、

なり平ハ高位高くわん下女小あま 安元松4

に比べると、如何にも少なすぎるじゃないの……、というのが江戸っ子の行平評。

佐藤 賛。

290 **さじの柄で妾をのける御大病**

清 殿様が大病を患われている。医者の見立ては腎虚。

そこで、医者は大病の病根たる美しい妾を遠ざけて、治療に当たる。原因が解れば、医者の治療もいらない病である。

にくひやうぶのけて法げんさじを取ル 一九2

法げんのさしづてまくら一ッへり 天八宮1

橋本 賛。

ロ〳〵に妾をにくむ御大病 三〇11

という句もある。

佐藤 賛。

291 **引ヶ四ツかなるにけいせいほれ残り**

清 張見世を仕舞う時刻になっても鎮座しているお茶引き女郎。

「売れ残り」と表現すれば済むところを「惚れ残り」と表現したのがミソ。客の方で惚れ残したので売れ残ったという理屈。

禿にも恥かしい程客がない 明三礼5

つくねんと花筵の上に三時ヶ坐し 二〇2

佐藤 賛。

292 **壱分づゝおれにわたせとこりたやつ**

清 大一座の幹事役であろう。大一座の中には、他人の褌で角力をとろうとする不埒な輩も居る。この幹事役の大将、かつてただ遊びをされた苦い経験があるのであろう。そこで、前もって遊興代を徴収する。

佐藤 賛。

293 **傘てこも追欠て行こくこん意**

清 極懇意な男が、俄雨の中菰を引っ掛けて家の前を素通り、それを見かけた家の者が傘を持ってその菰を追い掛ける。「水くせえじゃねえか、何故寄らねえんだ」とは追いついてからの台詞。

俄雨の貸傘にしては珍しい部類に属する句。

佐藤 賛。

294 **とうなすの天井をする下戸の内**

清　唐茄子は南瓜の異称。川柳では女性の好む食物ということになっており、その味は甘い。

　句は、下戸だから南瓜を好むだろうとし、植えた南瓜の蔓が建物の屋根に這い上がっている、とした句。

小栗　そのようなことかと思うが「天井をする」がよくわからず。

橋本　ほぼ礎賛。「天井をする」の駄労解。天井は、てっぺん。最上。天上する＝天へ昇る。（『江戸語の辞典』）。天上＝最高。天上する＝昇天する（『雑俳語辞典』）という意味が出ている。

　天井と天上、厳密には字が違うが、ほぼ同じ意味にとられたと考えると、下戸の家では、唐茄子が最高の美味として珍重されると解してみた。「江戸は明和八年（一七七一）からトウナスがはやりだした」（『図説江戸時代食生活辞典』）とある。この句は天明六年（一七八六）の句。

直かなって唐なす片荷ろじてあけ　三五30

山田　「天井をする」は「天へ昇る」で、礎の通り蔓が屋根へでしょう。

伊吹　「天井をする」は「天井を擦る」で、南瓜の蔓が軒先の天井を擦るのではないかと思う。

佐藤　橋本説賛。「天井をする」は、この上もなく賞味されるの意でしょう。

295 **もりあてた医者ハほどなくいたみ入**

清　一寸わからぬ句。

　さる大家の病人の治療に当たった医者、調合した薬がうまく当たって、病人は見事に全快。程なく、大家から痛み入る程の過分の御礼が届く、といった句か。

小栗　賛。「盛り当てる」は、うまくいったという語感か。それで痛み入るのか。

御うらミハ無ィに薮いハもりあてる　明八仁6

山田　賛。過分の御礼に良心がうずく。いつもは、この医者、

もりころすのて薮医者も名か高し　捻三14

佐藤　賛。

296 **銭わ通用せぬよふな中の丁**

清　絢爛豪華な夢の世界。其処に落とされる金は日千両。端な銭など通用しないように思われる。

　素一歩は用向きのない仲の町　二四22

佐藤　賛。

297 **仁王さまなりに似合わぬおぐし也**

清　仁王は仏法守護の神で、寺門或いは須弥壇全面の左右両脇に安置した一対の金剛力士。（『広辞苑』）

　その体つき・形相は恐ろしいが、髪はどうも迫力がないという次第。

おしゃぶりの骸骨を持つ仁王尊　一四三5

橋本　賛。なるほど仁王像の頭は丸坊主かおとなしい髻で、同じような忿怒像の明王などの渦巻型に比べるとおとなしそう。

佐藤　賛。

298 **手はなして川中へ出すいゝむすめ**

清　舟遊山への踊子のご指名である。

　普段は付いて歩く母親も舟の上とあって、ここは遠慮。踊子だけを仕事に行かせるのであろう。

　舟の名を書いて踊子呼びにやり　傍四25

　おつと来たなどと三味線船へ取り　一〇31

佐藤　賛。

女性コーナー

前香の花

宮西弥生選

悔しさに反応している生きている 米子市 政岡日枝子
乾いたら畳んでほしい忘れ傘 寝屋川市 森　茜
堂々と持てば百円には見えぬ 大阪市 神夏磯典子
夢を買う無駄遣いだと言われても 八尾市 村上ミツ子
始めからボタンの位置がずれていた 大和高田市 鍛原　千里
明日また仕切り直して煮大根 川崎市 和泉あかり
都合よく神を信じて暮らしてる 芦屋市 黒田　能子
握手してすべて許した訳でない 尼崎市 長浜　澄子
たった一つ全部自分の歯が自慢 藤井寺市 高田美代子
素顔でも声には紅をさしている 橿原市 居谷真理子
強い日も弱い日もある女とは 藤井寺市 太田扶美代
十人十色わたしにも彩がある 横浜市 川島　良子
不器用な田舎の風にほっとする 富田林市 中井　アキ
小さい画布にぎっしりつまっている家族 八尾市 宮崎シマ子
宇宙から見れば蟻にも満たぬ身よ 大阪府 米澤　俶子
迷っても男になれぬ私です 富田林市 藤田　泰子
逃げまわる落葉にまたの日もあろう 米子市 白根　ふみ
時々は曇る鏡が性に合う 倉敷市 小野　克枝
山茶花の垣に電飾似合わない 横浜市 秋元　和可

着膨れてまた北風と手をつなぐ 和歌山市 福井　桂香
ちらほらと梅咲いてきた許さねば 鳥取県 田村きみ子
人込みに紛れ鮮度が落ちてくる 和歌山市 吉村さち子
のんびりと雨音をきく休刊日 羽曳野市 徳山みつこ
恩あまた言葉に出来ぬものばかり 西宮市 奥田みつ子
黒豆をとろとろと煮る童話かな 和歌山市 西山　幸
痛いとは言わぬ理由は伏せておく 西宮市 牧渕富喜子
古稀過ぎて星の流れが早くなる 鳥取市 録沢　風花
食卓の椅子の決っている安堵 西宮市 西口いわゑ
生きて来た起伏と語る深いしわ 倉吉市 野口　節子
一輪の花の真面目に教えられ 横浜市 近藤　道子
青春は遠い手の肝斑じっと見る 横浜市 保田　絹子
大きく鈴ふって神さまひきよせる 米子市 青戸　田鶴
歳かしら寺がだんだん好きになり 鳥取県 石谷美恵子
焼き鳥の招く男の駅がある 倉敷市 家守　政子
大切な人だから置く車間距離 羽曳野市 吉川　寿美
峠から陽のあたる町見えてきた 米子市 澤田　千春
引き汐が奪って行った火の心 熊本市 永田　俊子
半眼で見ればすべてが美しい 和歌山市 上地登美代
とび切りの喜劇演じた勘違い 和歌山市 武本　碧
生きるとは鬼千匹を飼い馴らす 箕面市 出口セツ子
病名を知っていくつも謎が解け 横浜市 鈴江　純子
今日までの弱音は雪の海に捨て 米子市 林　瑞枝
自分史の白いページに涙あと 奈良県 渡辺　富子
わが家にもユニクロと言うブランド品 大阪市 板東　倫子

落ち椿しばし余生の夢をみる　弘前市　一戸　ツネ
何を言いに来たのか母の胸騒ぎ　吹田市　山本希久子
蟹の身の洞窟探しする如し　松江市　川本　畔
定年の峠で翼ととのえる　鳥取市　徳田ひろこ
ティッシュペーパー無色無臭の涙拭く　堺　市　志田　千代
結局はひとりと知ったメダカの子　富田林市　片岡智恵子
重い口開かせたのは無礼講　鳥取県　土橋　睦子
私の裏も表も知る鏡　岡山県　山本　玉恵
惜しまれて逝きたい介護させないで　東大阪市　北村　賢子
エプロンの母に表も裏もない　今治市　塩路よしみ
褒められも叱られもせずひとりぼち　八尾市　生嶋ますみ
美しい人美しく老いたまい　岡山県　矢内寿恵子
脇道をのほほんでゆく冬の門　寝屋川市　籠島　恵子
プライドが邪魔して楽に息吐けぬ　東大阪市　田中美弥子
もう一度したい林檎の丸齧り　寝屋川市　平松かすみ
一品を減らすやりくりなら楽だ　鳥取市　岸本　孝子
威勢良い声聞きたくて行く鮨や　和歌山市　桜井　千秀
目には目を人は悲しい事思う　和歌山市　田中　みね
献立に牛肉がまだ顔見せぬ　鳥取県　西原　艶子
猫の餌そろえて除夜の鐘をまつ　八尾市　井尻　民
自己主義と幸せの絵はまだ描けぬ　和歌山市　山口三千子
煮え切らぬ男に飲ますアロエ汁　羽曳野市　西村りつえ
柔らかな言葉の裏に棘潜む　生駒市　飛永ふりこ
長生きの母と平和な路地が好き　三田市　久保田千代
神頼みその内期待しなくなり　藤井寺市　鴨谷瑠美子

デパートの床で何度もけつまずく　東京都　後藤　早智
いい汗をかいて今年を締め括る　弘前市　宮崎ヒサ子
酒過ぎてピカソばかりとすれちがう　大阪市　川久保睦子
移り気な風が噂をかき回す　尼崎市　内田美也子
午年に弛まず手綱ぐっと引く　東大阪市　安永　春
鬱の世に明るいニュース愛子様　豊中市　樫谷　郁子
十二月喪中ハガキへ指を折る　横浜市　清水　潮華
手抜きしたしくじりの後始末　大阪市　本間満津子
子供部屋壁に脱皮の跡がある　岡山県　福原　悦子
ときどきはちょっと背伸びも生きる活　香芝市　大内　朝子
お料理を愛しています割烹着　八尾市　高橋　夕花
枇杷の花咲き出し庭も冬の景　堺　市　河内　月子
特価品もとの値札を剥いで見る　寝屋川市　岸野あやめ
あの時の傷胸の奥から出てゆかぬ　和歌山市　福本　英子
寒風へ自由が重くなってくる　和歌山市　松原　寿子
宝くじ小さな夢を見させてね　鳥取県　さえきやえ

日枝子さんの句―落ち込んだその場の躓きと焦りは次の踏台への幕開けである。生きるとは、このようなものである。**茜さんの句**―必要な時の神頼み。やがて叶うと忘れる。微塵も気にかけない。人間のエゴを痛切に斬った句である。**典子さんの句**―おどおどしてるから足元を見られる。作者は強気で強調したいのだ。百円でも商品価値の高いものが溢れている。良くも悪くもその人の感性であると。**ミツ子さんの句**―こんな無駄遣いなら決してナンセンスではない。楽しく飛躍の自分のためならば借金してでも果たしたく思う。常に夢と輝きを求める人は美しい。

どうせ

川内叭笑選

糠に釘どうせ効き目のない小言　善信
特技なしどうせ第二の職はない　旋風
二十四時所詮此の世は泣き笑い　高栄
どうせひま猫と昼寝のお店番　順子
ボトルキープどうせ会社の接待費　慕情
一張羅で済ます御祝儀義理を立て　花匠
いま夢中どうせ言うても糠に釘　時弘
嬉しいがどうせやりくり私です　万年
どうせなら美人に生んで欲しかった　久美子
どうせなら満場一致という芝居　保州
どうせ散る花もわたしもあの人も　半覚
煩悩もどうせ流れる除夜の鐘　寿恵子
どうせなら泣いて下さいこの胸で　今日子
ガン告知されて毎晩飲みに歩く　一花
四面楚歌どうせどうせと拗ねている　重人
どうせなら君と決めているプロポーズ　由一
どうせ駄目でもなお千羽鶴を折る　ヒサ子
斬られ役どうせ俺らは三枚目　水笑
あわててもどうせ遅刻と諦める　庸佑
派利派略どうせ改革ならぬだろう　英旺
この先はどうせ愛子の名が増える　和枝
どうせならけんか別れの方が楽　(稲)洋

物忘れどうせ笑って済ますはず　紫晃
どんと来いどうせこっちは丸はだか　修
可愛いいよどうせ他人にやる娘でも　喬水
有頂天どうせその内泣きをみる　清史
どうせ死ぬタバコも吸うて酒呑んで　しげお
どうせなら生前葬を派手にやる　政勝
国のためどうせ当らぬクジを買う　岳水
どうせならとことんやってみるつもり　玄也
どうせなら面をはずそう盆踊り　シマ子
一か八どうせ駄目ならやってみる　朝子
どうせ駄目ひらき直って運が向く　典子
悪いのはどうせ私になるケンカ　倫子
高嶺の花どうせ実らぬ片思い　柳弘
どうせなら銀より金がほしかった　裕峰
恨まないどうせ一度の人生だ　(川)睦子

二一

中原みさ子選

佳

どうせとかだっては言うな父の戒　綏子
どうせならお伽噺で終りたい　洛酔
輪の外でどうせ私は狂い咲き　洞庵
ほっとけばどうせそのうち諦める　大輪
反抗期どうせ一度は通る道　巳代一

人

どうせなら今夜のうちにあやまろう　霜石

地

酔う程にどうせ何時ものからみ酒　章久

天

言訳はどうせ通らぬ午前様　傍島克治

軸

どうせまた兄の古着の袖通す（八人兄弟六番目）

逢っているときは二匹の蝶になる　保州
あれやこれ二月の空は人嫌い　(川)睦子
何事も二番が僕の性に合う　劦
二番手でいつも頑張るお父さん　美也子
自販機に嫌われている二千円　政勝
玄関を二つ作って同居する　尚士
二度と無いこの良縁に賭けてみる　たえ
お荷物にならぬ努力の老い二人　巳代一
二番目に好きと孫からお墨付き　智加恵
二番手へいつも無防備してしまう　千里
振り出しへ戻る二人の飯茶碗　和重
カニ汁は二番煎じもいいものだ　次男
粋な唄枯れて堕ちるも二人連れ　虹汀
二人連れ怪しく見える歳でなし　(岩)康子
足して二で割ると平均的夫婦　岳水
価値観のちがう二人で仲がいい　朝子
大国の平行線でいる主張　充子
二回目の挨拶少し上手くなる　ヒサ子
二番手で風と仲良く生きてきた　公誠
割印に二枚の紙が重くなる　(岡)幸生
老い二人毎日肩を叩き合う　典子
心まで洗ってくれる二重唱　郁代

甲乙はつけられませんふたりの子　みつこ
感激は師から貰った二重丸　玄也
お茶の間は二階のパパを忘れてる　あずき
幸せに暮しています二DK　敏子
補聴器に二人の内緒話聞く　(清)玲子
子が巣立ち二人で夢を満たし合う　みず帆
久しぶり息子と飲んだ二日酔い　霜石
二次会の酒が本音の貌になる　権悟
二重底たっぷり虚栄詰めてあり　早智
本心をちらり二伸に覗かせる　(保)絹子
二枚舌百も承知できいている　妻子
二枚舌追い詰められているもつれ　孝雄
風除けの二番手にいる下ごころ　健一
二の舞はもう懲りました向こう脛　清史
妻の買うチョコを気にしている二月　由一

佳

人生の第二幕目はミステリアス　英旺
二人三脚あなたの足が重すぎる　英子
二言などないから父の光る位置　大輪
納得の裏になみだのふたごころ　ツネ
一対という二は欠かしてはならぬ　満秋

人

二の舞を踏ませぬ母の平手打ち　鉄治

地

とても深い河を渡って来た二人　活恵

天

好奇心二つの眼閉じるまで　太田扶美代

軸

もたれ合う人と言われている夫婦

梅

福原悦子選

梅干と番茶で朝が動き出し　勝巳
梅らっきょまだまだ亡母に届かない　重人
寒風に耐えて白梅凛と咲く　志洋
凛と咲く梅に根性試される　みね
梅花講鈴の音鳴らし懺悔する　檳榔樹
老梅と余生を競い合っている　健一
梅活けて君の吉報待っている　巳代一
二〇〇二年迎える春の梅香る　ひでの
梅漬けは亡母の手ほどき其の侭に　武史
梅干がこんなにうまい三分粥　修
梅干茶に諌められてる二日酔　碧
梅一輪だけで玄関春になる　志重
梅の花一期一会の私小説　千里
梅らっきょ女の城をまだ仕切る　(清)玲子
梅干の夢を果した宇宙食　鉄治
梅園にアングル変えて深呼吸　周信
梅齧るニッポン人を意識する　霜石
脇役の紫蘇が梅の実引き立てる　淞丘
梅匂う佳き日の使者を送る門　度
梅干に貫禄見せた握り飯　あずま
記念樹の梅を残して子は巣立ち　今日子
朝の梅脳細胞を揺り起こす　八重子
梅の香が迎える母の三回忌　圭二
梅一輪さすキッチンに春が来る　朝子
ふくらんだ梅も侘びしい過疎の駅　春雄
伝授した梅干いつか嫁の味　満秋
梅の花実のうれるころ母となる　千代
梅干が好きでたまらぬ岩田帯　一花
廃校の校庭に今年も梅匂う　寿美
フルコースよりも祖母には梅茶漬　安子
梅干は母さんほどに好きと言う　(保)絹子
ろう梅の下で別れて半世紀　綏子
一粒の梅がきいてる胃の調子　實
梅干を舐めてる孫に的絞る　ヒサ子
黄梅は待たるる春の露払い　徳三
梅林の春を楽しむ車椅子　美也子
梅に鶯似合いの夫婦ですよねえ　由一

佳

梅一枝活けて女の日に戻る　玉恵
梅一輪母の部屋にも春の彩　紫晃
万歩計梅の香りに足を止め　洛酔
年輪に負けず老梅香を放つ　寿恵子
一輪の梅が茶席を引き立てる　昌鼓

人

雪国も春一番を告げる梅　凡々子

地

寝たきりの母が待ってる庭の梅　妻子

天

感性の接点に梅白く咲く　土橋螢

軸

梅活けて梅より好きな人を待つ

初歩の教室

題 ―ふらふら

吐田公一（はんだきんいち）

十二月号の「粒」の題の佳句で、小粒でもカニはカニの構え持つ（中六）と、私の句で更生を誓う一粒の涙あと（中八）について、ある方から中六を佳句に採り、中八を軸吟にするとはどうかというご指摘を受けたことについて、私はこの教室で常々川柳はリズムが大切であると述べていることは、この巻頭を読んでおられる方はよくご承知のことと思うが、川柳の本質の一つに見付け（着想）があり、この見付けがリズム感を越えるよさを持つとき、私は破調句であっても選良とするにやぶさかであってはならないと思う（つづく）。

添削句

○ふらふらと腰をゆらしてフラダンス　忠子
　ゆらしてが冗句。

▽ハワイアン腰ふらふらと椰子の浜

○ポリシーに定職嫌うフリーター　みず帆
　中七がやや理屈っぽい感じ。

▽ポリシーがあっていまだにフリーター

○ふらふらと貴男に添うて五十年　春江
　表現のわずかな差異。軍配は原句？

▽ふらふと貴男まかせの五十年

○さあどうぞお酒注がれてふらふらだ　昌鼓
　上五が冗長。

▽一杯でふらふらになる下戸の客

○ふらふらの暖簾の中が給料日　清
　中七の意味が分らぬでもないが、もう少し分りやすい表現が必要では―。

▽給料日ふらふらくぐる縄暖簾

○ふらふらと一生生きた人がいる　アヤ子
　人がいるという抽象より具体化して、

▽ふらふらと一生生きてきた夫

○予告せずふらっと行きます嫁ぎ先　こずえ
　ふらっと出かけるのは当然予告なし。重複表現と言える。

▽ふらふらと行って困らす嫁ぎ先

○百円均一用が無くともふらふらと　比佐子
　百円均一略して百均でよいのでは。

▽百均をふらふら覗いているおけら

○ふらふらに酔ってやりたい一人酒　和香
　酔ってしまいたい内容を詠めば、

▽やけ酒でふらふらになる恋の傷

○ふらふらとスーパーへ行く目の保養　㈢美恵子
　目の保養と言えば通常高額品や美術品を見るとか、名勝地を見るのでは―。

▽目の保養にふらふらと行く美術展

○気の向くままふらふら旅に山頭火　さだを
　上六を中七にもってくると、語呂がいい。

▽ふらふらと気の向くままに山頭火

○ふらふらになるまで酔えばあと地獄　謙次
　あとが冗長な表現でした。

▽ふらふらに酔うて地獄の一丁目

○ふらふらとしないで進路定めなさい　きらり
　下六の表現がまずかった。リクルート（就職活動）

▽大卒がふらふらしてるリクルート

○ふらふらと思いたっての一人旅　三喜夫
　下十二音字を縮めると七音字に。

▽ふらふらと旧友を訪う停退後

○詰め込みのふらふら発車駅師走　トシエ
　少し内容を吟味してみると発車駅は不適。

▽詰め込まれふらふらで着く朝の駅

○千鳥足僕もふらふら真似したろ　賢治
　下五がなおざり。

▽千鳥足師走の風が身に沁みる

○ふらふらと誘うぶらぶら赤提灯　いたる
　中七の表現がいま一つ

▽ボーナス日赤提灯へふらふらと

○雪道をふらふらタイヤノーマルだ　孝美
上下を入れ替えてみると
▽ノーマルのタイヤふらふら雪の道
○一歳へ立った立ったと拍手する　ふみ
ストレートに詠みすぎ。
▽歩き初め思わず手出しする茶の間
○ふらふら三十昔の人はよう言うた　秋星
○ふらふらと未だに落ち着かない男　秋星
二句を合成すると、
▽ふらふらと三十男落ち着かず
○ふらふらとリストラの足地に付かず　ゆきの
○不況風街にふらつく人の増え　ゆきの
二句を合成すると、
▽リストラでふらふらしてる不況風
○充電にふらふらとして秋過ごす　宏子
下五の表現が単純すぎた。着想はいい。
▽充電に小春日和をふらふらと
○株の値も不況の風もふらふらと　照彦
見付けはいい。中七の表現が不味い。
▽持ち株がふらふらになる株市況
○帰巣本能だけで我が家に辿りつき　つよし
上七を中七に持ってくると十七音字に。
▽ふらふらと帰巣本能辿りつき
○わが人生凧になりたやふらふらと　勝久
凧を擬人法で用いると、
▽ふらついた凧を操るむずかしさ
○軸足を定めきれずにフリーター　章司
中七に題を詠み込むと、固い言葉も使わず
平易に表現できるのでは。見付けはいい。
▽軸足がふらついているフリーター
○大輪のバラ剣山も音をあげる　サト子
原句もいいが、
▽大輪のバラが揺れてる生花展
○ふらふらと入った店から拾い物　智加恵
拾い物＝思わぬ得な買物。着想はいいが、
から•を•で•にするといい。中七にもなる。
○ふらふらと誘いにのって財無くし　侑子
下五がストレートすぎて説明句になった。
余韻を持たすこと。
▽ふらふらと誘いにのった悔いのあと
○旅立ちへあれもこれもでふらふらだ　栄一
準備よりもスケジュールを詠んだ方が—。
▽スケジュールふらふらになる老いの旅
○ふらふらに酔ってる上司地獄耳　好勝
この場合は〝る〟より〝も〟が適切では。
川柳は一字が大切。何度も反芻して意味を
深く考えてみること。〝も〟なら佳句。

佳　句

思い切って佳句に沢山いただきました。
奈良漬が下戸の足元ふらつかせ　鈴美
フリーターふらふらしたい訳じゃない　郁代
ふらふらとジングルベルの誘惑に　錦
青空に誘われ今日もふらふらと　円女
ふらふらと見せかけ敵の不意を突く　輝夫
ふらふらになっていい湯とツアー客　妙子
打たれてもまだ立っている挑戦者　裕峰
ふらふらと転がる球がストライク　はるみ
ふらふらになっても父は親の顔　栄子
ふらふらになってゴールのうまい水　英旺
ふらふらと赤ちょうちんに吸い込まれ　文江
退院に妻の支えの試歩の朝　(山)雅子
ふらふらになりそな予感恋かしら　ふりこ
ふらふらと過ぎた人生ケ・セラセラ　登季子
ふらふらの心をいやす〝ありがとう〟　益子
手土産も一緒になって千鳥足　更紗
ふらふらとその気にさせる上手い舌　道子
ふらふらとすぐ妥協する腹の虫　美代子
ふらふらと誘いに乗れば泥の舟　(三)八重子
ふらふらと深みに嵌まる株地獄　喜代子
ふらふらと寄った飲み屋で盛り上り　弘之
ふらふらと立寄ったのがくされ縁　恵美代
ふらふらと入った店で鴨にされ　よしこ
ふらふらになって帰って来た噂　彰雄
(噂を上手に見付けられた)
ふらふらと匂い袋に逢いに行く　敏子
(中七の表現がお見事)

私の句

綱取りへふらふらになる朝稽古

秀句鑑賞

同人吟　森　茂美
―1月号から

この度、はからずも私が秀句鑑賞をさせて頂くことになりました。私は柳歴もまだ浅く大変な仕事だと思っています。でもこれも勉強だと思い一生懸命やらせて頂きました。私の目で見たこと、聞いたこと、経験したことをもとに、好きな句を書かせて頂きました。

離反者もきっといるだろう兵馬俑

野坂なみ

数千体と言われる威儀を正した兵士の像、秦（現西安）の始皇帝陵から出土しているこれらの像の中にも、忠節一徹の兵ばかりでなく、よからぬことを考え、また謀反をも考えた者達も居たことだろう。権勢を誇った秦もその後滅亡している。莫大な観光資源と、貴重な文化財を現在に遺して…。

巻舌で啖呵切りたい時もある

奥田みつ子

巻舌で言えば関東弁を思いだすが、関西弁も迫力があってなかなかいいものだ。余程気に入らないことがあったのか、または愉快なときかも知れない。楽しい句である。

写真屋の直す手の位置首の位置

海老池　洋

写真屋がシャッターを切るまでは、ずい分と時間がかかる。特に花嫁さんの場合には、花婿がいらいらするくらい、花嫁衣裳の裾を直したりする。花婿が不快を感じたりする場合があるかもしれぬ。

西窓にきちんと夕日嵌るなり

森　茜

夕日が窓の遥か彼方に納まっている。一幅の絵画を見るような見事な構成。借景を見るような感覚が伝わってきます。

戦争は儲かりますと闇の声

宗　水笑

かつての朝鮮戦争では日本経済は大いに潤ったときく。今回のテロ騒動、それに伴う報復戦で昔の夢よいま一度と願っている業者・政治家も居ることと思う。愚かなことだがこれが現実の姿だろう。早くテロも報復もない平和な地球をと願っているのは、作者ひとりではありません。

ほろ酔いの機嫌を読んで切り出そう

岸本孝子

たぶんご主人に対してのことだと思います。胸に溜まっている秘密が溢れそうになる。でも一寸言いだしにくい。それともおねだりの事かな。それだと嬉しい限りです。

混浴で値踏みされてるのは・お・と・こ

平田実男

女性が男性の値踏みをする。愉快ですね。その女性たちはおばさん族かな。それともピチピチのギャル達でしょうか。

兵器みな捨てれば足りる地球です

高野宵草

核兵器を無くそうなどとケチな事は言わないで、人間を殺傷する物はすべて廃棄すれば、この地球は平和です。世界の政治家や学者も机上論ばかり言わないで、未来のために真剣に考えてほしいと思うこの頃です。

賞味期限過ぎたワタシに役が来る

須郷井蛙

賞味期限とは何を基準にして言うのか。人間の場合は年齢とか、特に女性ですと美貌のことでしょう。うちの老妻もボランティアとかなにかでよく走り回っている。私をも含め出来ることは健康のためにも、どんどんやって置きたいものです。

歴史ある千枚田まで休耕田

菊地政勝

小泉総理も農に関することを例にとり、色々言ってますが、本当に百姓を知っているとは思えない。千枚田は先祖が人力で作ったもので、廃田にするには勿体なく、ご先祖に対しても申し訳ないことです。だが農業人口が少なくなる政策を取ってきたのも政府です。

あちこちでタカ派の卵孵化してる

都倉求芽

平和ぼけなのか、戦争好きの議員がこの頃増えてきた。心すべき事です。自衛艦の出撃等々、九条の下では考えられぬ事が次つぎと起ってきております。

ゆずられた席は情けで温かい

津村志華子

茶髪の男子が、つと立って席をゆずってくれた記憶が私にもあります。それ以来髪を染めた男の子を見る目が違ってきました。日本人にも心やさしい人は大勢います。

金運線あるのに飛んでいく諭吉

清水絹子

生命線の立派な人でも短命な人は居る。金運線が有っても無くても、金は天下の回りもの、そのうち諭吉さんが、ハイ今日はとやって来る日がありますよ。

尾を振らぬ犬で万年平社員

藤井正雄

上役に媚びず吾が道をゆく。立派なことです。いまの日本は尾を振る人が多すぎる。だから金銭がらみで政治が腐敗する。私はその平社員の気骨を買います。

重荷にはなりたくないと独り住む

穴吹尚士

全く同感。でもその裏面で老人の孤独死などと言う記事もよく見かけます。三夫婦同居の家庭もあると聞きます。戦後外国の風潮が入って核家族となり、老人は年金暮らしが増え、子は親の死に目にも会えなかったと言う話もききます。一考すべき社会問題であると思います。

実行犯連れて妊婦が闊歩する

宮川珠笑

此の頃は日曜日などによく見かける風景です。実行犯がいいですね。或いは出来ちゃった婚かも知れません。なんにしても仲のいいことは好感が持てます。

ポックリ寺へ行くのに薬飲んでから

福本英子

ユーモアがあっていいですね。人間は自分より愛しいものはありません。ポックリ寺はきっと面白い人達ばかりなのでしょう。

愚妻呼ばわりしてたお人の紙おむつ

米田恭昌

最近までうちの愚妻がと他人に言ってた夫が、その愚妻に紙おむつを替えてもらっている。なさけ無いやら済まないやらで、心の中では手を合わせているに違いない。老夫婦の情愛を垣間見るようでほのぼのと温かい。

餌よりは安い卵を産まされる

岩原喬水

狂牛病もついに日本に上陸しました。農家も大変です。スーパーの卵は日によってはおまけの対象品として売られています。戦後の宝物のようだった卵が思い出されます。

かあちゃんが互角にものを言い過ぎる

米田幸子

いいじゃないですか。それで夫婦円満なら、戦後女とくつしたが強くなったと言いますから、せいぜい奥さんにも喋らせてあげて下さい。お仕合せに。

言い訳のコントを抱いた朝帰り

杉本孝男

言い訳の問答でも頭の中でくり返しながらのご帰宅。奥さんのお顔がだんだん大きく目の前にかぶさってくる。もう止めようとこの前心に誓ったんだがまた破れてしまった。死ぬまで治らない病気かな。ゴメンね。

秀句鑑賞

―1月号から

長谷川　呂万

―水煙抄

キリストも仏もいらぬ君といる

前坂　美佐枝

ニューヨーク自爆テロで、改めて世界に認識されましたが、中近東を中心に宗教絡みの争いが絶えません。ならば信仰よりも愛を信じたい作者です。愛を大切に。

善行のニュースに今朝の茶が旨い

澤　裕子

衣食足りても礼節を知らない、金儲け中心の世相になってきました。明るいニュースは少なく、暗いものばかりです。気分よくおいしいお茶を飲みたいものです。

手を貸そう余裕はないが見ておれぬ

光吉　裕

谷底へ落ちた虎が飢えて苦しんでいるのを、通りがかりの僧が身を投げて、虎の餌になるという、捨身飼虎の話に似た、男気の強い素敵な句です。

見て欲しい見ないで欲しい薄化粧

松村　輝夫

飲んで欲し止めてもほしい酒をつぎ（麻生葭乃）の有名な句と同想と思いますが、化粧に対する女性心理の機微に迫っています。

点滅の赤信号に似た余生

近森　功

現役を退き悠々の人生を生きている方は、左右に注意し、徐行して前進する赤点滅信号と同じ、との比喩が抜群です。

職安に藁一本が見つからず

湊　修水

長引く不況で失業者が増え、働き盛りで住宅ローン、教育費などの支払いを抱え、職を失う人がいます。溺れる者藁をも掴むの諺を引用して、うまく句意を伝えています。

近いけど上げ膳据膳夫婦旅

小島　笑司

ニューヨークの同時多発テロ以来、海外旅行の不安が消えませんが、国内旅行に切り替えてもそれなりの楽しみがあり、特に奥様には煩わしい家事から解放されて満足です。

自分史の涙もにじむ名刺入れ

村上　直樹

現役時代は名刺交換で仕事が進みました。苦楽はその名刺に滲むという真面目な人柄。

わが歳を基準に見てる訃報記事

軸丸　勝巳

若い頃には見なかった新聞の訃報記事。年齢を見てはまだ大丈夫とか、もうぼちぼちかとか何となく比べている自分に気付かせる句。

四捨五入　四捨は地球のごみになり

武島　ちよえ

人が住む地球も、人の心掛け次第で無限ではなく、人が住めなくなってゆくのでしょう。地球人全体の努力で少しでも長く子孫が住み、映画の猿の惑星にならないよう望んでいます。

妻の笛がないと今では踊れない

藤田　芳郎

現役時代は亭主関白で生活していましたが、退職後は奥様のスーパーにも、「わしも行く」とわしも族になっておられ、平和です。

枝一本切るに華道の妻の指示

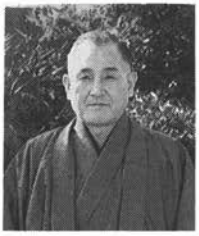
小塩　智加恵

華道師範の奥様には花木に対する哲学があり、庭木の枝にもあてはまるのでしょう。また、華道以外の生活にも当て嵌まると思います。

退院の時は暦で日をえらぶ

清水　金太郎

入院生活も終り目出たく退院の運びになりました。さて退院の日取りは大安がよいか、快晴の日がよいか、気分勝れた日がよいか。



追悼

椎江清芳さんさようなら

吉田　あずき

突然の清芳さんの訃報、思わず「ウソー」と言ってしまいました。

昨年十二月初め、藤井正雄さんからのお電話でした。正雄さんが今度出版された『なにわ柳壇二〇〇句集』を清芳さんに送られた処御子息から「父は既に十一月二十六日に他界し十一月三十日ベルコにて家族及び親戚で葬儀を済ませました。句集は父の仏前に供えさせて頂きます」と言われたという事でした。

近頃音信の途絶えていた清芳さんへ、私がお電話を差し上げたのは、思えば亡くなられる前日だった様です。御子息から「只今伏せっており、若葉の会の投句も致しかねますので、皆様によろしくお伝え下さい」とのお返事でした。早くよくなられて明るい顔を見せていただきたいと、一同念じておりましたのに…

顧みますとNHK教室からご一緒で、その後若葉の会を結成しました時、会長としていろいろご尽力頂きました。

以前からお体が悪いとおっしゃっていて、自分の体内いろんな処を病んでおり肺、S字結腸、心臓、糖尿、最近では目や骨折等、病気の巣の様な体だとおっしゃっていましたが、その割にはつやつやとしたお顔で血色もよく、いつも洒落たソフト帽を被り、モダンなステッキをついて、みだしなみのいい紳士でした。

ダム出来て桃が流れて来ない川

私がお知り合いになった頃、この句で日川協の大きな賞を取られ、その後平成四年には「一路賞」で

花束を投げると海の喪があける

の句を入賞されました。

平成十年五月に『夫婦道』という句集を出されましたが、その序文に薫風先生も「広い目くばりと、気取らない的確な表現力で、読者を深く納得させる平凡にして非凡な手法の佳句が多い」とおっしゃっておられます。

句集『夫婦道』から

蘇るいのち他人の血が流れ
浮き沈みやっぱり浮いて終わりたい
夫婦船少し傾き雨期となる
愛冷めて一輪挿しの水涸れる
見栄と無駄積んで長持唄がゆく
磨かれた真珠は海に戻れない
素うどんを食ってる方がお金持ち
ようそんな昨日の今日やおまへんか

人生の機微を巧みに捉え、ある時は重厚にあるときは諧謔に、手なれた作句をなさっておられました。

まだまだ川柳のみならず人生の先導者として御教示願いたかったと残念でなりません。

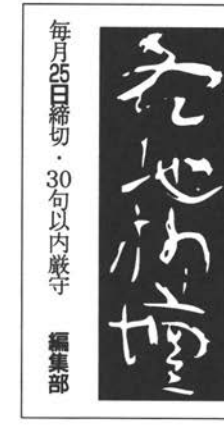
弔　吟

先輩の海へ花束捧げる日　正雄
共通の故郷の話出来ぬ淋しさ　シマ子
俺よりも若いに何故先逝った　弘直
終焉も泰然として紳士なり　欣史子
川柳の絆が一つ消えてゆく　能子
やさしさと厳しさ星となる命　あずき

法名　徳心院寿岳清道居士　享年八十二歳

清芳さんどうか天国でゆっくりお休みください。

合掌



くろぼこ川柳会　武田　帆雀報

柿みのる頃きっと喜ぶ蟹が這う　常子
あと少し欲にまみれた柿落ちる　一眸
柿八年子の成長をじっと待つ　つや子
熟柿が落ちるブライドが捨ててある　遊子
柿の木に登る少年どこへ行く　和代
柿の木を囲んで沢蟹が踊る　はるお
玉音で戦争が止み生きのびた　喬水
シャボン玉飛ばすようには憂消えぬ　幸子
豊作の玉手箱開け米余り　小生
この玉をあなたの色に染めかえる　美佐枝
期待して玉串料を積んでおく　八千代
真実の玉を毎日みがいてる　みち子
玉磨くもっときれいな手になろう　久江
叫んでも亡母遠くなる夢の中　重忠
風が叫ぶと波が答える岬です　小鹿
叫ばないのか叫べないのか僕の犬　一揆
枯れ草の中から叫ぶキリギリス　蛍
泣き叫ぶこころ誰にも気付けない　あらた
叫べども車止まらず御陀仏に　清美
怨念の叫びか黒い煙が立つ　帆雀
聞き上手へついうっかりと本音吐き　悦子
私より年上なのに若く見え　ふみ子
上役とけっこう馬が合っている　美智子
ほめ上手敷いたレールに乗ってゆき　美智代
これ以上丸くなりたくない八十路　菜美
熱弁に机上のコップ揺れ始め　静生
頬かむりして風上をすり抜ける　公弘

ローズ川柳会　山崎君子報

世の中が違って見えた車椅子　てる
老人とて突然ふえたわけじゃなし　ミサヲ
決めたのにやはり昔を振り返る　キク子
コックピットの椅子が真実知っている　哲子
リストラで苦労の椅子をはぎ取られ　トミエ
突然に偶然にあう幸不幸　貴代子
雲流る椅子にもたれている懐古　澄子
空の青突然消えてみたくなる　いわゑ
椅子に帽子が友情が待っている　武庫坊
ほっとする椅子がわが家にひとつある　年代
ふいの客お店も休みラーメンで　君子

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

ぬくもりが欲しい大都会の孤独　泰雄
年金で喘ぎながらも都会好き　柳宏子
生きてゆく音で都会の朝が明け　〆女
いばら道やっと掴んだ赤い糸　高栄
やっと来た喜寿という名の青春が　義一
脛かじりやっと働く気になった　吉之助
口下手がやっとの事で出す意見　五月
やっと手を握ったあとの曼珠沙華　秀夫
潔く散るも男の美学かも　澄子
わたくしも花も散りようむつかしい　あやめ
木の葉散るそろそろ同居考える　スミ子
散り際もお見事南海のエース　茶の子
マジックで妻切り抜けてきたピンチ　庸佑
危機管理名を上げるのも落とすのも　無禄
はじめからがっかりしない宝くじ　求芽
がっかりした鼻で整形外科を出る　晴美
肩幅と甘いマスクに騙されて　孝一
逆転のチャンスに足が動かない　節子
がっかりとしてても開く自動ドア　満寿蔵
飲んで寝て一番遅く妻起きる　紫香
失業と妻に言えずに靴を履く　尚士
飽食の地球の裏で子が飢える　靖巳
鬼が言う渡る世間は鬼ばかり　治三郎
平凡でいいさチリメン雑魚のまま　萬的
分を知りいつも無口なかすみ草　活恵
家計簿の中も紅葉のまっ盛り　(笠)恵美子
にっこりと笑うて明日が来てほしい　しげお
ブーメランのように帰って来ないでね　礫
ケイタイは持たぬ私は孤独性　武史
散ることの悲しみ知らぬ水中花　諷云児

岸和田川柳会　長谷川呂万報

後始末お願い女房今日も留守　鹿太郎
捕えたらどう始末するビンラディン　穣一
取り敢えず始末書だけという身内　蛙城

イエスノーずばりと言えぬ居候　洋
突然にずばり言うので恐ろしい　東雲
おめでたをずばり的中母の勘　俶子
ずばずばと言う妻に添い五十年　笑司
ピンチでもずばり直球勝負する　東吉
手品師がずばりと斬った美女の腹　基
ずばり決める男らしさを彼に見る　呂万
一言が目から鱗の師の教え　さよ子
婆ちゃんのいつもの台詞孫が言う　守
その台詞聞き飽きました妻の乱　岩夫
求婚の野暮な台詞と共白髪　弘子
あの時のあなたの台詞もう一度　一脩
終章の台詞決めてるありがとう　路子
捨て台詞吐いて敗者と認めてる　けい子
たんか切る台詞は私の地でやれる　冨志子
車庫入れの操作になると汗が出る　すみえ
家中を操作している妻の知恵　錬太
操っているのは兵器商だろう　ダン吉
百円で人を助ける赤い羽根　昭二
難民が援助待ってるテント村　盛之
菩薩にも夜叉にもなって児を助け　仁緑
千鳥足助けるような星月夜　甚一
消防士紅蓮の中へ命がけ　洞庵
助からぬ生命と知ってから生きる　愿
大穴をずばり当てる夢予想　狸村

川柳高知　川竹　松風報

早口になって喧嘩はもの別れ　かよ
早口で一一九へ知らす火事　かず子
早口で用件だけのカネ無心　孝雄
早口で追い立てられる粗大ごみ　幸
早口が脱線をした真紀子節　功
早口で言えば重みの無い議会　暖
長距離へつい早口になる電話　圭二
早口の妻に軍配また上がる　快風
九十年愛の悟りに辿り着く　竹萌
本心を探るその目が恐ろしい　悦子
風上におけぬ男は髭ばかり　圭風
飛行雲平和な旅であるように　和江
辛棒の二文字忘れた離婚劇　美々
沖縄の基地ため息が止まらない　京子
耐えている母の背中を見て育ち　てるみ
安っぽい女が派手に吸うタバコ　佳風
電卓のキーを打たせて派手を選る　哲史
好きな服少し派手でも気にしない　松風

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

繁栄の蔭に先祖の汗がある　あきら
豊かさに他人の痛み置き忘れ　輝夫
まん丸い月に解けゆく今日のウツ　八重子
北風にバアさんの墓寒かろう　吟笑
的少しずらし情けの矢を放つ　勝
神棚に鎮座ましますす宝クジ　ひかり
老妻を我が生涯の杖となす　文仙
同窓会酒が言わせた秘密事　治延
現代の名工友の別の顔　かおり
コーヒーの香りが今日の幕を開け　放任
不景気は何処吹く風と猫肥える　いさむ
亡母さんに一目見せたい晴姿　寿々女
誤字脱字半端ではない歳重ね　賢
柳行李母の宝も粗大ゴミ　貞月
青写真通りにゆかぬ人生路　よしみ
カラオケで歌う青春今もなお　奴凧
うかつにも追払った鳥青い鳥　坊太郎
接待のお茶にくつろぐ蝉の寺　くに子

川柳若葉の会（前月分）　**宮崎シマ子報**

日替りのコーヒー日替りのドラマ　あずき
正装の帽子持たずに年をくい　香住
鉛筆をなめなめ書いた老母の日記　会美
マジシャンの帽子からでる老いた鳩　欣史子
そよ風が帽子にからむ秋の旅　弘直
あの曲に出合うとコーヒーが旨い　シマ子

佳句地十選（1月号から）

野口節子

高い塀きっとさみしい人だろう　ダン吉
足取りに迷いなどない秋の道　登美代
見せられぬ傷を葉陰で縫っている　美恵子
曲りたい方へ曲がっている胡瓜　はじ芽
リサイクル万円札になって来い　可住
大根が一本残る冬の章　五楽庵
来年も歩くつもりの靴を買う　求芽
風の子を待って公園今日も暮れ　風花
これからが私の春と絵の具皿　蛙
一日のぜんまいを巻くおみそ汁　かなこ

一杯のコーヒー至福と思う日も　能子
枯葉にも彩あり二階コーヒー店　慶子
思い出の地図と遊んでいる帽子　アキ

東大阪市川柳同好会　森下　愛論報

こころを開く時ポンと音がする　千里
浮雲とこころが通う山頭火　萬的
こころならここにもあった裏表紙　定男
矢印の通り進んでいる不安　重人
平和すぎて進む時間を見失う　元紀
折れ合って進む夫婦の糸ぐるま　愛論
一つ鍋家族でつつくから温い　章久
保険証汚さず過ごす家族愛　雅文
天を指すほとけの指を信じよう　湖風
人を許して指をささない事にする　シマ子
真っ黒な看板老舗の顔だろう　柳宏子
火も水もくぐった老舗の床柱　弥生
若女将一歩さがっている老舗　和代
嫁ぐ娘へ団欒の椅子空けて置く　賢子
大空を味方に男立ちあがる　朝子
本当の味方黙ってついて来る　緑
頼もしい味方金庫の中にいる　しげお
七人の味方の中にいる安堵　太郎

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

風呂上がり妻は楊貴妃らしくなる　謙一
鼻水へくるりと女背を向ける　しげる
保育所で鼻水同士仲がいい　一光
鼻水は無縁与作は冬を切る　彩人

通せんぼされた夜道が胸にある　ヒサ子
暗黙の了解小指噛んでいる　北歩
鼻水を袖で拭いてた幼き日　てる
暗い世がロイヤルベビーで沸き返る　順風
地下室のワインぶつぶつ起きあがる　慕情
目礼の中に大きな餌がある　銀波
枯尾花媚薬ポトンと落ちて秋　ふさゑ
剪定の寒気に耐える水っ洟　花匠
人間の最後を媚びる薄化粧　ツネ
オーロラが消えた男に駅がない　蛙痴郎
知っているかぎりの形容詞を贈る　黙人
権力にかなわぬゴマを持ち合わせ　花峯
お洒落して男に媚びる女王蜂　一花
胡蝶蘭少うし媚びていませんか　㐂
茱萸の実の小さく揺れる立ちくらみ　五楽庵

三幸川柳教室　三宅　保州報

下積みが薬となった屋台骨　純子
薬程度でやめときなはれ米の汁　和代
嫁姑両者とんぶく欠かせない　章子
タレントの名前で薬買いにくる　鉄治
二十五時魔女の秘薬が出来上がる　和子
長寿村薬袋が欠伸する　佳世子
菊花展頑固丸出しそろい踏み　豊太郎
結納の使者お待ちする菊結び　みね
菊花展天狗の鼻が見え隠れ　一歩
菊花展苦労の末を並べてる　正甫
魯山人の風情を気取る菊膾　朱夏
入賞も無冠も香る菊花展　桂香

ぎこちない小菊のままで世を渡る　登美代
裏小路歩くと温い輪が出来る　かず子
毒舌の相手と丸い輪が描けぬ　三千子
方円の器になじむ多数決　嘉平
一呼吸丸い言葉に置きかえる　美子
丸付けて貰って守る椅子一つ　千秀
丸くなりすぎたお父さんの拳　公子
予定にはなかった道で蹴るボール　満洲子
卓袱台を囲むと笑い出すかん　当代
丸くなるまでの尽きせぬ物語　保州
札束で買ったと知らぬ達磨の目　伸二
根回しも気配りもある酒の席　昭枝
無気力で流れる雲を友にする　起世子
松茸の気高い姿拝むだけ　さち子
疑心暗鬼心の空気入れ替える　碧
擦れ違うシャネルが起こす静電気　町子
菊人形綺麗な服に水をかけ　マリ子
金貸した方が気遣いする不況　栄之進

川柳塔みぞぐち　小西　雄々報

酒飲めばぼろり本音を出してくる　康女
良薬もすぎると毒に化けました　弘子
胃袋が名水飲んで活性化　公美枝
飲むほどに酔いがまわって恵比須顔　和代
飲みこんでうなずいてから気が迷い　正光
名水の飲む一杯が血にかわる　鈴枝
飲み過ぎたピエロが一人ずつ消える　智恵子
物忘れひどくて溜る飲みぐすり　豊枝
飲み放題などと客寄せする師走　静江

良い天気飲んではおれぬ忙しい　久子
五体燃え誤解もとけた酒を飲む　雄々

京都塔の会　都倉　求芽報

体調の悪さを猫が聞いてくれ　満子
さらさらと落葉に秋の訣れ知る　〆女
銀杏はらはら箒を止めた背がぬくい　萬的
弾の跡残しし蛤御門かな　高栄
笙の音余韻か御所に風わたる　啓子
御所の秋　万華鏡にも勝る出来　幸代
格好はどうあれ母のにぎり飯　百合子
晴天が格別の日に味方する　輝美
格別の配慮へはずむ金一封　柳宏子
格式へ大阪弁が使えない　しげお
品格が言葉の奥に見えかくれ　益子
やんわりと言う人格が憎めない　澄子
血液型だけで性格決めないで　正坊
降格を承知で通す正義感　満寿蔵
欲深い人が作った狂牛病　ただし
注意ぶかい人が一瞬見せた隙　庸佑
欲深く心に無駄をためている　宏子
サイコロが疑い深い転げかた　孝一
根深い根深い心の疵は喋らない　礫
思慮ぶかい人だと思う言葉数　求芽
罪深いひとこと背負い生きてゆく　葉子
見本帳一覧わたし試される　典子
戦死者の一覧表にある無念　英一
天平の宝一覧するロマン　英旺
本番の前にも台本ざっと見る　泰雄
一覧表ところどころにあるチェック　紫香
番付の吾が子を探す虫めがね　鹿太
一通り見たが見直す書道展　シマ子
納税者一覧表にある世相　芳子
外務省一覧してもわからない　友熙

川柳ささやま　遠山　可住報

聖戦というて戦いまだつづく　純子
家伝秘話伝える嫁が決まらない　恵美
知恵出して極楽へゆく道励む　多美子
知恵がない老母豆選る手が早い　美智子
祝い酒チャンスをつかむ甘い声　八重子
近道で弥陀の掌を借る亡母に逢う　とみ子
裏読めば地獄で仏チャンス来る　靖子
石橋を叩いてチャンス見失う　つや子
何よりも身近な友がいま宝　かほる
追いかけて行きたいチャンス足もつれ　君代
このセーター着ているあなた想い編む　毬子
悪知恵に乗って案外いい気持ち　房江
嫁ぐ日も近い娘と料理する　みはる
振り向いてチャンス待つより走ります　美紗子
脇役の母の知恵からまるくなる　寿子
土壇場になると出てくる妻の知恵　冨美
東京がカラスの知恵に泣いている　可住

大原川柳社　矢内寿恵子報

文化祭巷の風になるまつり　みづえ
落ちつけと言われそうです菊の水　さちこ
合掌の中で弾んでくる期待　玉恵
自然美に太刀打ち出来ぬ見事さだ　あやこ
文化祭老いも若きも胸を張る　辰江
無になって走りつづけている余生　悦子
冬支度母はあせっている積り　喜美子
病室を出るまで嘘をつき通す　巴子
夫逝って二度目の秋の夜の長さ　しず
物憂さは老いの兆しか秋時雨　敏子
小さな内緒ばれて家族を悩ませる　こふゆ
去ってゆく今日の佳き日を抱いて寝る　南花
霜月の空が重たい老いの肩　はるみ
孫の凧自由の道を突っ走る　美佐子
祭り客送りくつろぐ熱いお茶　みさえ
留守電に弾んだ心通じない　たづ子
安らげる丸い笑顔と逢う句会　ひでの
百歳の天寿全う惜しまれて　静子
七十路心の傷も薄れて来　絹子
真相を知らぬ他人が口を出す　あすなろ
幾曲り関所の数は知れている　妻子
世の移り諸行無常も祈らねば　寿恵子

竹原川柳会　時広　一路報

ねこみたいに丸くなってる犬がいる　千枝
てっぺんを目指したこともある杖よ　蘭幸
私のハートの杖をかしましょう　孝枝
玄関で今日も待ってる母の杖　淑子
待合室話せば長い松葉杖　規代
飛び乗ったのだろう駅に杖がある　力
鬼どもの会議へ杖を持ってゆく　一枝
黄昏に杖とも頼る妻も病む　正宏

妻が杖だったと気付く定年後　静風
笠に杖大師の影は遥かなり　厚子
杖遺し父は今ごろどの辺り　万年
父の杖役立つ亡父の歳になり　菁居
小説で理想の男追っかける　民恵
ロマン追う男はいつも少年の目　幸子
プライドを捨てた男が呆け始め　節夫
亡母ちゃんは男頼りにしなかった　輝恵
この男三振するかホームラン　半覚
男らしく女らしくは禁句です　汎美
リストラが匂う懐手の男　貞子
少年が男に見えるトラクター　千代美
平成の男子厨房に入るべし　房子
釘一本打てないうちの男たち　比呂子
瀬戸内の海を眺めて竹の駅　夏喜
駅ビルの豆腐料理を忘れない　栄恵
楽しみがしっかり増えた道の駅　慶子
無人駅コスモスがゆれ恋がゆれ　笑子
いい日旅立ち虹が跨いだ山の駅　不朽
駅一つ一つ思い出生きている　一路

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

兄弟に揉まれてみたい一人っ子　緑良
闊歩する背なは野望に満ちている　稚代
百歳の愛嬌ほんまもんである　保州
温情にいつか野望も溶けてゆく　三男
愛嬌があってボスにはなれぬ猿　大輪
愛嬌の良さでリストラ免れる　鉄治
起死回生野望に賭けるとき男　輝子
喜寿過ぎて私の野望何だった　英子
燻っただけの野望をもてあそぶ　寿子
ウーマンリブが机叩いている野望　克子
野望抱くインターネット武器にして　和子
自分史に野望埋めてあるページ　順子
野望持ち旅立つ僕に母の影　和香
野望と言う鎧を脱いだ恵比須顔　佐一
泣き嗤い野望うずまく兜町　あつむ
いまに見ろと野心持ってる馬の足　和重
助走するハードル一つ越す野心　さち子
全国が気を揉みました愛子様　紀久子
揉み消したはずの火種が生き返る　優子
好奇心頭の皺を揉みほぐす　射月芳
足の裏揉んで明日を考える　桂香
面接へ明るい心売ってくる　豊太
面接で独身ですと言う美人　よしこ
面接は整形をした後にする　あき子
行く道の角度を決める面接日　佐代子
リストラの面接阻む踏み絵待ち　冨美子
未知数な私へ賭けた面接者　泰子
面接でやんわり本音逸らされる　正博
面接で決まる人生だってある　三喜夫
フィーリング合えばいいなと面接日　和

むらくも川柳会　毛利　幸報

朗らかな主婦がとりもつ三世代　定子
三歳児踊り子自慢笑い声　仲子
紅葉散り風に吹かれて踊り出す　安男
いるだけで朗らかになる君が好き　信夫
らんらんと輝く眼の秀才児　幸夫
朗らかな顔に見つけた泣きぼくろ　早苗
朗らかな夫婦二人の二輪草　幸
ふる里はなつかし思い出盆踊り　明朗
精一杯生きて明日を期待する　恵美子
秋日和友と湯の里くつろいで　寿
故郷の描写思わずあがるトーン　ふさえ
今朝の冷え離れられない床の中　島子
秋晴れにコスモスの花咲き乱れ　美喜子
今日だけは主役の孫よ七五三　昭子
秋ざくら家庭円満のどかなり　ます美
心地よいニュースに元気もらう朝　まさ子
大根も器量いいのが先に売れ　喜美

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

銀行でくれた湯呑みの茶がうまい　十四郎
銀行のロビーに友の絵画展　和子
ペイオフを恐れ不義理な預け替え　久子
舵取りのうまいお方が座を丸め　糸子
十七が舵とり直す海に出て　昭三
荒海を乗り越えて来た妻の舵　純
アフガンの民の希望は唯平和　弘治
ライバルの差も長生きで取り返し　吉太郎
大根の湯気が明日を膨らます　寛之
飼い主を捜す子猫の主になり　幸子
日だまりの考えごとに石蕗の咲く　年代
小さき花やっと咲いたよ有難う　千恵
美しく老いたし庭の寒牡丹　光穂
留守電の闇に溶けてゆく空虚　義芳

ふらついてゴミ出しにゆく冬の朝　薫
しぐれ降る母の影までぬらしてる　恵子
省略をかさねて痛む向こう脛　静
さみしいと言えばうなずく影法師　しづ子
十字架に汚れたマフラー巻いてある　武庫坊
幸せに遠くて窓を描き足した　芳子
落款を押せば我が書も肩を張り　里江
書きさしの日記に亡父の愛を知る　東園
雁が行く空の果てなるわがいのち　正子
嫁かぬ娘ともらわぬ息子いて困る　みち子
糸でんわ鉄腕アトム呼んでいる　孝一
告白に揺れて答える秋桜　満寿蔵
木枯しに追われるように襟を立て　比ろ志
晩学に青春の日の悔やしかり　半蔵門

川柳塔まつえ吟社　恒松叮紅報

逆風の中で男は酒を飲む　昭二
逆風に馴れたか風が温かい　れいじ
逆風に田んぼかかしの唄聞けぬ　智恵子
日本海から逆風が攻めてくる　螢
逆風が隣家へ落葉運び込む　素子
逆風に耐えて百歳いい笑顔　(森)ちえこ
平熱の位置に安堵の体温計　宏
大袈裟な夫体温計手離さず　(多)博子
基礎体温からご誕生に至るまで　草丘
子の熱を看取る深夜の体温計　房子
夏風邪は体温計も馬鹿にする　俊一
微熱かな気にしてはさむ体温計　政子
知恵熱へ体温計もほっとする　静恵

少子化で体温計が放せない　与根一
騒音をきらいひとりの部屋に居る　きみえ
騒音を逃れてシクラメンに逢う　久枝
騒音の中で待針うっている　満江
冬苺熟れ騒音の中にいる　桂子
補聴器を外し騒音から逃げる　多賀子
騒音の中で孤独なベレー帽　紫晃
東大生片付けなどは習わない　注湖
片付けを終えた笑顔に母の椅子　(安)幸子
片付けて月へ安堵の仕舞風呂　義良
一言で片付けられて雨が降る　畔
要らぬもの片付けてくれありがとう　日出子
珍しく饒舌になる父の酒　秀子
土地土地の珍味が好きな旅カバン　太泡
珍客に調子合わせる国訛り　茂美
珍しく鏡わたしを褒めている　淞丘
珍しいことに真っ直ぐ帰宅する　叮紅

西宮北口川柳会　亀岡哲子報

母に似た人に手を貸す歩道橋　春蘭
痩せた脛撫でなで歩く子だくさん　美代子
団欒に夕日が歩く土手の歌　奮水
業界の鬼と言われた父の背な　澄子
パチンコの下手な工業学校出　しげお
侘助が気兼ねもなしに落ちる葉　孝一
業だとは死ぬまで気づかない夫婦　求芽
少年に宇宙にいどむ明日がある　いわゑ
楽しみを少し明日に取っておく　無禄
炎えたくてロダンは明日を考える　晴美

鳩時計ポポと明るい明日を呼ぶ　義子
弱音など吐かない明日も陽は昇る　鹿太
幸せを祈る明日も明後日も　ルイ子
母の手がもう明日への米を研ぐ　富喜子
旅へ出る明日へバッグを詰め直す　たず子
今日よりは明日はいい日と信じ切り　てる
キーボード叩くと明日が見えますか　正坊
ゆったりと明日を練ってる仕舞風呂　庸佑
定年日明日から変る人生観　江美
背を延ばし明日に向って歩こうよ　トミヱ
この人ならとひらめいてから五十年　光久
ひらめきはあるが根気がなさ過ぎる　尚士
ひらめいた言葉ひとつが的をいる　能子
帰省した孫と散歩の車椅子　五月
北を指す磁石は凛と揺るがない　靖巳
ゆずの香のくず湯とろとろ冬に入る　哲子
忘れてた平気で言える年の功　いたる
老人会童謡ばかり歌わされ　房子
大将と呼ばれ屋台の二等兵　哲男
アフガンの地名何度聞いても覚えない　文

川柳塔なら　坊農柳弘報

泥吐かす拷問よりも人情味　高栄
縁あって庇いながらの老夫婦　智子
つたもみじ盆栽庇い地に根付く　カズ子
デパートとスーパー歳暮相手分け　さと美
泥仕合いテロに目覚めた平和惚け　敏子
爆弾かもしれぬ歳暮遠慮する　桜竜
来る歳暮お酒ばかりと妻嘆く　博一

農を継ぐ稲刈りせっせと次男坊　秋泉
背信の泥に埋っていた石器　良一
裏金づくり庇いきれない外務省　むつみ
テロ事件歴史に残し年暮れる　美和子
刈る稲の鎌の手止めぬ口喧嘩　章久
時雨くる母の柩を庇う傘　理恵
庇うたらあかん子供の自立心　太一
泥付きがいい朝市の芋ごはん　あやめ
万馬券つかんでからは泥沼へ　絹子
これ以上庇えば同じ罪になる　春雄
丸刈りにされた男の負けおしみ　春蘭
地下足袋の泥に男の詩がある　孝子
庇われた靴が進路を見失う　佳子
親庇う子が虐待を語らない　朝子
庇い合う夫婦絵になる遍路笠　秋雄
包み紙替えて歳暮回される　茂雄
宅急便不況の顔でくる歳暮　道子
天高く後継ぎのないコンバイン　和夫
天からの歳暮第九が流れ出す　國治
庇われてさみしい僕になっている　ダン吉
金泥で終わりの花を描くつもり　真理子
アフガンの和平を祈っている歳暮　富子
星が降る里の棚田は父が刈る　恵美子

尼崎尾浜川柳会　田辺鹿太報

隙間から洩れてくるのは妻の愚痴　鹿太
紅葉の木工事現場で色がつく　幸子
おでん鍋煮つまっている待ちぼうけ　その
隙間風口笛のごと窓を打つ　江美
カラオケではしゃいで帰る寒い家　まさ
枯葉舞いやがて木枯し冬支度　信子
すこやかに立てば歩めの親ごころ　秋子
紅葉に足元緩むハイキング　カズ子
あとで知る母の眼鏡は合ってない　耕治
すこやかな曾孫誕生祈る日々　亀与子
母嫁娘僕はひとりでテレビ観る　イサミ
歳末の主役は妻と冷蔵庫　昭三
お歳暮は見栄と義理との詰合せ　孝一
不況風超えてすこやか愛子様　弘治
単身赴任隙間を埋める花便り　正治
慢心の隙間を狙うバラの棘　満寿蔵
壁隙間こっそり妻は貯めている　十四郎
気の利いたジョークが少し隙間埋め　求芽
ミクロンの隙間棟梁気に入らず　柳宏子
人ごとでないから悲し災害地　紫香

川柳大阪　高木信酔報

どないやと聞いてやるのも友情か　春蘭
順調に今日もピエロを演じ切る　宏
その靴が昨日のワルサ知ってはる　章久
出しゃばったばかりに勘定払わされ　利昭
どないです店終いです持っていき　功
本心を隠して女パフ叩く　洛酔
お出かけは右足からと決めてある　金太
老父の背の丸さ頑固を溜めている　柳宏子
嘘隠すそのハンカチが白すぎる　柳弘
おかげさま朝昼晩のうまいめし　重人
病床で友のはげまし天の声　和子
へそ出してファッションですと闊歩する　鉄心
順調にことが運んだ金屏風　潔
隠し味共に白髪で薄くなる　喜楽
聞き役になって妥協の旗を振る　三十四
順調にいかぬドラマが受けている　比呂志
欠点を保護色にして生きていく　川童
清流の鮎はねて母出迎える　民子
人情に出合うと涙すぐ滲む　朝子
過去隠す苦労も隠すいい笑顔　一風
笑わせて泣かせて逝った志ん朝さん　照月
リストラを隠して朝は始発乗る　修
出発の声凛として初電車　一歩
隠し事みな昇華した冬木立　國治
戦場にもう出ぬ人が勇ましい　ダン吉
順調に行ってるらしい電話無い　かよこ
二本だけ寄り添うように彼岸花　美花
順調な証笑顔が美しい　柳昌
公園の風それぞれの顔がある　まつお
そっとしてやろう男の涙かくすまで　信酔

ほたる川柳同好会　田辺正三郎報

湯けむりが肌を温めて雪見酒　長一
人生の悲喜こもごもが濁り酒　ヤギエ
歓声に弾む足取りおとろえず　柳童
きびしさもほどほどになる妻の歳　正安
仮面剥ぐ酒はこの世の焙り出し　よしろう
検査結果告げる主治医のきびしい眼　直次
女房の寝息うかがう盗み酒　いさむ
民主主義きびしい父が消えて行く　セツ子

飲んべえと下戸の息子がおなじ貌　勝
平凡な寡婦も化粧し翔ぶつもり　千里志
ストレスの世に平凡こそが健康法　馬洗
しょぼくれた話はしない酒の席　久子
底冷えの京の地酒に舌鼓　信男
料理酒がまずいと主婦が味見する　契子
ブランドが平凡になるパリの街　黒兎
冬の時代せめて心は温めよう　桂子
平凡な人生嫌う子の若さ　雪子
平凡という尺度世につれ人により　禄骨
子ら帰省弾む話に夜は更ける　正三郎
平凡になって茶髪の街を行く　昭子
上達につれてきびしい師匠の目　祥風

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

波しぶき奔馬の如く日本海　春枝
逆風をひとつの毬に寒牡丹　瑞枝
人間の毒気で地球喘ぎだし　繭
子が親を裁く悲しい金あわれ　やえ
残り時間一歩一歩をふみしめる　玲子
紅葉でぐるり飾って鐘の音　すみゑ
花回廊の夢空間でリフレッシュ　てい子
ビンラディンもぐらたたきでおびき出す　田鶴
水墨画はみだしてゆく紅椿　ふみ
病弱の父の動きも亡母に似て　千秋
寝顔なれども徳仁さまをまのあたり　千代
急がねば冬将軍の到来だ　恵子
器用でもないに貧乏ばかりする　富美子
走りだした今日を大事に振り向かず　麗
鈴を鳴らして一夜を踊りあかそうか　日枝子
鈴振っておいでおいでと春をよぶ　八重子

川柳塔唐津支部　久保　正剣報

指の間からポロリと落ちた愛　兵八郎
破天荒のテロの戦に死んでいく　實
味のある話やっぱり年の功　輝夫
怖がりを見透かしている犬の吠え　水笑
お尻からオバサン席を取りにくる　高明
親の敷くレールは乗らぬパラサイト　勝視
公園に子供のいない日曜日　晴翠
やれやれと言うて二月になりました　四郎
暖かい空気が雨を提げて来た　虹汀
茶道花道浮気も長けている夫　正剣

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

改めて愛の言葉を老夫婦　弘直
満ち足りた顔を揃えて忘年会　シマ子
悪知恵も欲もほどほど平和ぼけ　香住
失った絵を探してる二度童子　あずき
満月に恋してからの不眠症　欣史子
他人とは言えぬ自分を振り返る　能子
不景気とデパート関係ございません　慶子
年の瀬に寂しい便り多すぎる　会美
冬がくるまでに別れの話など　アキ
とび込んでしまった泳がねばならぬ　喜美子

かわはら川柳会　上田　俊路報

故郷の唱歌　猪出て荒らす　寿子
なつかしい小学校歌友の顔　余吏子
村祭り氏神の歌ドンヒャララ　一薫
喜びに悲しみにつけ歌うたう　聰
祝い歌涙を見せた父の背な　泰良
迷い道一つ消しては進む道　静子
迷ったら走るのやめて空あおぐ　悦子
不安定心の迷い断ち切れぬ　輪多朗
迷ってはいても後ろは振り向かぬ　俊路

川柳塔おおとり　原　みさを報

まあまあで締めくくれそう二〇〇一　和子
まあまあと大きな荷物積み残す　艶子
兄妹げんか丸く裁いた母の知恵　風花
勉強はまあまあだけど元気な子　紀子
わが城でまあまあ紡ぐ愛の糸　登美
借金も病も持たず老い二人　孝子
まあまあが縺れた糸を解きほぐす　黙光
まあまあのお久し振りが長くなり　野草
まあまあが口ぐせになる歳になり　仁子
まあまあと丸く納める年の功　舎人
忘年会何回年を越すことぞ　義弘
充電を忘年会にしておこう　雄々
忘年会さえいかからぬ年の暮れ　美美
来る年に希望をつなぐ年忘れ　雅通
休肝日今日の忘年会は欠　由多香
母さんも忘年会か花浄土　佳子
蟹の足黙々と食べ忘年会　道子
少し酔い少し忘れる年がゆく　邦昭
暮れる彩枯れて静寂を待つばかり　大鯰

まあまあの暮らしする金ならばある　彰雄
いい出合い楽しい時はすぐ暮れる　庸二
収入がゼロでも一年は暮れる　真一
年の暮れいいことだけを書き残す　宏章
薄氷踏んでよろよろ年が暮れ　一弘
世界地図火の手あちこちつけ暮れる　小生
自らの暮れを感じる八十路過ぎ　千秋
残されて途方に暮れる明日の糧　冨貴子
飯と寝るの台詞今年も暮れていく　清子
四十七士も本懐をとげ年果てる　みさを

城北川柳会　川久保睦子報

井の中の蛙が幸せこの地球　政子
取っときの笑顔で好きな彼に逢う　ひさ乃
コスモスの田園風景滋賀の旅　登美子
孫抱いて見栄を張ってる七五三　はじめ
散って行く美学が無くて造花の美　春蘭
一生は白で生まれて白で死ぬ　昭子
生き残り過去から届く請求書　綏子
丸い背な光る年輪道しるべ　トヨ子
おしゃれ好き山のメークは四季がする　とし子
テロ募金赤い心が燃えてます　高栄
情熱が余生楽しくしてくれる　東雲
抵抗のあった茶髪に目がなれる　あい子
他人とは思えぬ人が両隣　久留美
手の数珠へ静かに暮れる鐘の声　求芽
満員車風邪の吊革かも知れず　照子
いっぺんにパニックたかが胃の手術　修
頑張れの声が聞こえる仏の灯　一枝

平凡な暮らしに刺戟欲しくなる　倫子
芸術の秋わたくしも忙しい　達子
老い先の夢は明るく丸く描く　志華子
表面は立ててあなたをこき使う　あやめ
女房の浪費が多い生活費　史風
秋風に冬の支度らし蟻の列　朝子
白旗を挙げてゆっくり風を読む　柳弘
批判票多くて向きを変えてみる　ただし
多過ぎる薬のどれが本命やら　順三
コツコツの父は道草など知らぬ　典子
錆ついた釘を抜いたら過去の傷　千里
手話の手がゆっくり愛を語りかけ　睦子
おふくろは二番彼女がイッチ好き　公一

ふくべむら川柳　橋本多哥由報

安楽死神には無礼かも知れず　洋々
懐が寒くデパート冷えている　昭恵
一期一会無礼を隠す花活ける　はじめ
暑さ寒さ人より先に感じてる　信子
人の世に無礼なければ肩が凝る　静子
寒空に救援物資早くつけ　和甫
これからも私の無礼許してよ　操子
殴勲無礼まかり通ってご当選　寛子
口喧嘩夫婦がすればなお寒い　多哥由

川崎スリーエスの会　小林久美子報

どん底を越えて笑顔の日が戻り　夕人
真っ直ぐに育って肩の荷軽くなる　三四朗
蛙の子育ってみれば蛙の子　よしじ

盆栽をのびのび伸びる地に下ろし　ひで
鍋底のこげつく匂い長電話　きよ
どん底も子供のために越えてきた　昭志
しつけ糸どこで抜こうか子の育ち　あかり
うっかりがまたも焦がした鍋の底　繁子
不景気は底無し沼のスパイラル　乃里
ポパイ様少し下さい底力　政勝
足底を刺激し元気取り戻す　吟風
非行歴親が問われる育て方　八重子
井戸の底故事来歴は謎でいい　和義
底抜けにいい人だから気がもめる　泰竜
育つ子についてゆけない父と母　尚三
茶碗蒸し底へ底へと期待する　ふみ
一しずく神秘が育つ鍾乳洞　道子
記念樹が育ち子離れ親離れ　久美子

はまゆう川柳会　中後清史報

ラーメンに落とす涙を見てしまい　生米子
ラーメンの屋台に夜業ねぎらわれ　慶一
ラーメンの湯気の向こうに母の笑み　修也
足音を忍ばせている朝帰り　雄造
忍び寄る老いの足音身構える　公治
足音で機嫌斜めの度合知る　雅視
順序よく冬の足音忍びよる　比斗志
足音が入り乱れてる舞台裏　美佐子
足音が不気味なほどについてくる　平和
紅さして足音を待つやるせなさ　サト美
足音へお帰りなさい鍋の湯気　苗子
足音を消して見舞いの重い足　太一

足音に気づかぬ人に老いを見る　恵美子
足音が慌てさせてる影二つ　泰作
ときどきは優しくされて好きになる　登
まだら仏ときどき来てはさわがせる　さだ代
年のせいときどきでない忘れ物　光
ときどきは覗いて見たい新所帯　利ぼん
時々はふっと自分を振り返る　佳子
ときどきは喧嘩もするが仲がよい　清史

南大阪川柳会　吉川　寿美報

路地裏の地蔵と古い顔なじみ　志華子
話好きもうなじんでるひとり旅　庸佑
姑になじんで姑と同じ味を出し　シマ子
知らぬ間に汚れた空気になじんでる　東雲
ユニクロの服になじんで生きてゆく　修
試されているのかバスト揺れすぎる　重人
仁王門バスト誇示する阿吽像　叡子
思春期でバストがツンと上を向く　なぎさ
グラビアから派手にバストが歩き出す　雅文
娘の育ち父も眩しく見るバスト　柳宏子
ハローワーク籌に乗って来る魔神　柳弘
魔人とはなれぬ男でビラ配る　度
憎めないたまにドジ踏む大魔神　宏
一人いる魔神淋しい影を見た　萬的
台風について来るのは魔神かも　初太郎
逆風は魔神に頼む曲り角　憲太郎
創業の涙を知っている屋号　遠野
城崎の外湯に並ぶ屋号下駄　章久
我が家にも魔神がひとり住み慣れる　ひさ乃

ラーメンを鍋から食べる不精髭　楓楽
ワンルームカップラーメン置いてある　直子
カップラーメンすすって売れないペンネーム　寿美
薄墨になじみ三山浮彫りに　柳伸
海凪いで魔神の機嫌いいらしい　ダン吉
住みなれた家で最後の日記書く　たもつ
とんぼりの屋号に今夜も途中下車　頂留子
ヘルメット脱げば近所の顔なじみ　とみ子
魔神よけふっと息つくおまじない　久子
故郷の和尚となじみ墓参り　日出子
身になじむ亡母の形見のあい大島　真砂

川柳ねやがわ　江口　度報

誕生も大安祈るおばあちゃん　かすみ
大安も仏滅もない高炉の火　博泉
大安の意味は知らないカレンダー　弘一
大安日三つ重なる駄斗袋　柳弘
いい夫で一生大安だった日々　シマ子
仏滅に嫁ぎ大安日に戻る　賢子
三度目の式も大安気にしてる　たもつ
子どもの目親の身勝手許さない　庸佑
貴女なら許す毛髪に触っても　亜成
拳骨を一つ貰って許される　仁清
ライバルの弔辞を何時か読んでやる　三郎
ライバルが誰より先に来た見舞　光子
ライバルも万年候補のまま終る　修
ライバルはいつも静かに咲いている　茜
才媛と期待をされたのは昔　ルイ子
子を語るときは才女もただの母　一風

平成の馬の手綱を取る才女　冬葉
まっすぐに才女が冷気持ってくる　度
妻は才女で単身赴任したまんま　洋
才女には一人敵がいる鏡　英壬子
そっとしておこう才女が酔っている　礫
明日香路の風に史跡のロマン嗅ぐ　時弘
この史跡まだ戦陣のひびきあり　忠央
史跡寺訪えば坊さんクラブ振る　とし子
ゆく秋を惜しむ史跡の木守柿　朝子
反抗期母の心が響かない　あやめ
響かない太鼓たたいている夫婦　メ女
打てば響く孫三人と暮す幸　勇太朗
絶妙のコンビのイキに酔うている　重人
水琴窟私一人の音で聞く　高栄

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

街灯に貰ったロマン実らせる　英夫
守備範囲決まり街灯根を下ろす　弘子
街灯をいつも点けてた母だった　八重子
街灯をとり込み蜘蛛のマイホーム　公子
少年を案じてやまぬ街灯よ　富久江
暖かいこの九州でくらしたい　武子
筋一本とおす鉛筆とがらせる　くに子
ときどきは妬いてもみます好きだから　茶子
とばっちり受けて帰らぬ籠の鳥　かつ乃
逢って来た余波ときめきが止まらない　幸枝
余波問わず力いっぱい鐘を撞く　喜与志
年末のふところ覗く繁華街　睦子
日溜りに猫の白髪が落ちている　孔美子

ドッコイショとポンコツの尻餅だ　はるお
制服の塵を払っている少女　みどり
年の瀬は旅に出払うことにする　ながこ
巳の年のしがらみ払い賀状書く　菊乃
払っても払わなくても来る年賀　汲香
残りは僅か払い続けてきたいのち　和子
いい人にされて止まらぬ咳払い　きみ子
昼の街肋骨晒してネオン管　節子
街灯が盆栽の番にはならぬ　実満
わだかまり解けず街灯が切れる　諷人
馬車を曳く昔ばなしに花が咲き　保子
景気よい馬の足音待っている　久枝
早起きの馬とかけっこしています　野草
いななきが愛と勇気を連れてくる　立亥
追風に逆らうことも知らぬ馬　みさ子
天馬から駄馬へ一夜にして堕ちる　盛桜
きみ思い馬が蹴立てる春よはる　螢

サークル檸檬　小林一夫報

横並びならば安心する世間　靖巳
ぬかるみも自業自得と言う世間　澄子
街角に世間のあくた積んである　義子
まだ世間許してくれぬ尊厳死　智恵子
自惚れはぼくの綺語から始まった　哲夫
秋蝶の迷い花の名聞いてから　希久子
時に甘く時には牙をむく世間　房子
垣間みた世間もうちも同じ顔　保子
叩いたら夢から覚めた古時計　いわゑ
気配りで鬼も仏になる世間　遠野

若者の奢り世間を敵視する　あずき
自分だけ悲劇と言っている喜劇　楓楽

倉吉川柳会　松本よしえ報

高齢者医療制度はありがたい　志郎
年金にやさしい声が忍び寄る　悠子
危険から遠ざけた子が落とし穴　紀美子
怒り声できないカタコトありがとう　智子
先生がニヤニヤ笑う放課後だ　一夫
ありがとうやっと蛇からほどかれる　和歌子
有難う最初に言って世話になる　(西)喜美子
玄関の戸もスムースに動いたぞ　久子
ありがとう其の一言を待っていた　康子
突っ走り過ぎたか運を見落した　和枝
前触れが無くて雷鳴突っ走る　和子
声あげてサギは中州を飛び上がる　賀寿恵
雪吊りを突っ張る木々の縄のれん　日出子
火の中へ入れたくはない自衛隊　克枝
三十万キロ無事故無違反ありがとう　重忠
アーアブナ危なかったと穴の蟹　十三男
十二月あぶない人が増えて来る　完司
突っ走る道はどっちか闇に聞く　照彦
倦怠期女のうしろから煙　螢
はらはらと危ない事の好きな夫　ゆり子
年の功突っ張りながら急所つく　睦子
張り切って危い橋を突っ走る　幸子
火の車尻叩かれて突っ走る　かつみ
其の言葉残してくれてありがとう　(前)喜美子
火の女大蛇になって突っ走る　石花菜

意地を張り突っ走り最後破産した　季芳
突っ張りのあの子が今は篤農家　よしえ
再婚もせずに父さんありがとう　秋草
紅白とくじら幕とが両隣　次男
鉛筆の削れぬ人がナイフ持つ　忠良

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

叱りかた知らないママが多過ぎる　たけし
妻の目が尖っているぞ三本目　吐来
よその子を叱る勇気のない寒さ　重人
皿割った父さん誰も叱らない　泰子
ぐずぐずと両手が迷うキーボード　耕策
果報者ぐずぐずしてて残り福　敏
八起き目だぐずぐずしては居られない　洞庵
核ゼロをぐずぐず延ばしてる地球　ダン吉
ぐずぐずもいらちも同じ二十四時　絢子
読書好き秋の夜長はサスペンス　かつみ
サスペンス日本の行方気に掛かる　利武
神様はとてもサスペンスがお好き　みつこ
炭疽菌地球を駆けるサスペンス　りつえ
小五郎になったつもりで推理する　志洋
行間を走る心のサスペンス　満寿蔵
ヘソクリが消えた我が家のサスペンス　一知
終章は真っ白でしたサスペンス　六点
結婚式さあサスペンスの幕が開く　桂子
物欲を捨てて心が満たされる　章司
欲捨てた人はなんにも怖くない　一壺
疑いが晴れると食欲がもどる　扶美代
半額を待ってる主婦の長い列　専平

欲失せて日々闊達に生きる父　みよ子
気持だけ貰うと欲のないお方　庸佑
欲望の赴くままに塀の中　久仁子
欲の皮はがす手だてに苦労する　昇
王様の耳も欲には動きだす　敦子
欲ですか百まで生きる共白髪　聡
欲張って見ても両手で持てるだけ　柳宏子
大きめの笑い袋は欲ですか　美代子

岬川柳会　八十田洞庵報

矢面に立って男をとり戻す　勇
社長より度胸据った秘書がいる　俶子
女一人強かに生き動じない　和香
万点を褒めつつ妬心覗かせる　みやこ
見舞客みんな元気で楽しそう　とみ
ずっしりとチラシが今日も迷わせる　里子
信心の火渡り母の度胸知る　悦子
ママ御免度胸だけでうそが下手　富美子
大犬に向かう子猫の度胸見た　茂平
男の子ほんとは弱いと知っている　和美
健康より妬ましさからダイエット　朋子
インディアン酋長の重み羽根飾り　昌夫
みことのりずっしり重い幣を振る　東雲
誕生へずっしり重い母子手帳　令子
ポリシーがずっしり重荷背負い投げ　孝子
父逝きてずっしり重い家長席　桜琴
ずっしりと支える掌と掌ボランティア　みつこ
秋風にずっしり重い吊し柿　勝
度胸ってどんなものかと孫が聞く　よし子
頭角を現す人は妬み買う　鉄男
仲良しのふりして陰で競い合う　年子
この美声この顔神のいたずらか　ユミ子
朝を出る男にずっしり重い靴　洞庵

富柳会　池森子報

野の花と咲いてどっこい悔いはない　和子
まだ続く我慢がまんの三宅島　三和子
大器晩成信じて母のきび団子　潤子
ゆるやかな流れに出逢う露の私語　アキ
露ほども知らずに生きた風の恩　登子
露草は青ひそやかに恋の闇　夕子
追憶のかけら滴る露の舞　紅紫朗
途中下車して広重の秋探しに行く　作二郎
友達の出世がしらのダンゴ鼻　花梢
エンドレステープのように妻の愚痴　亮幹
一人旅やっと見つけた露の宿　一夫
反抗期の団子が串を抜きたがる　正美
無芸大食いつも元気なパートナー　たかし
天命の続くかぎりは美しく　巳代一
右腕の露いささかも疑わず　射月芳
桃太郎の団子に捏ねた智仁勇　しげお
一滴の露を演出したピエロ　年人
野仏も目を閉じ給う秋残照　初太郎
神話くずれて千の祈りの鶴を折る　呑舟
だんじりの屋根で野心が燃えつきる　冨美子
私の夏限定の好奇心　扶美代
シーソーの相手に笑われないように　夢成
手放せぬ手帳私のパートナー　春蘭
しぶ柿もわたしも熟れてゆく白露　恵子
露草を身近きものとしてしゃがむ　翠公
明日へと続く足音なら聞こう　拓治
明日へ灯をともし続けてゆく未来　一慧
突っ込みとボケに徹した共白髪　淳一
次の世もパートナーです花手桶　典呼
哀しみをかきまぜながらエンドレス　森子

川柳クラブわたの花　吉村一風報

行水と塀の節穴なつかしい　正純
校門を凧の緒が切れ走り出す　一道
秋刀魚焼くまだこだわっている炭火　ますみ
抱いている妻の不満に火傷する　トシエ
木の心知って匠の腕冴える　まさと
悪友も中にはいるが友を持つ　いつふみ
人間の顔して暮らす座敷犬　春江
ゆるやかな傾斜でほっと紅葉狩り　知佐子
病院で次回予約を迫られる　美代子
恋の火をわたしに点けてそれっきり　民子
満月がビルの谷間でかくれんぼ　明
ゆるやかに流れを変える母の堰　八寿子
家族みな風邪で仲よく寝正月　(増)道子
女房と同じコップで水を飲む　宏至
ぼくが肥え財布どんどんやせていく　ミツ子
これだけはと自信の喉も嗄れて　(二)道子
ジンクスに耳を貸さない青りんご　君江
ガスレンジ我が家は今もマッチ擦る　(馬)宏
火が消えたみたいな母のいない部屋　春子
旨いうまい水流れても村貧し　一風

日によって好きだと思う曼珠沙華　幸枝
釣り馬鹿へ生きてるさかな島で売る　隆盛
若気の至り水に流して老夫婦　晴美
秋月の影を探して手を握る　俊子
花びらを折ってジンクス確かめる　恭一
ゆるやかに煙るタバコに物想い　奈良司
ああ定年よちよち孫をつけられる　友甫

川柳塔打吹　米田　幸子報

トラックのまわりで遊ぶ子の危険　久芽代
胃カメラで死角にガンがかくれてた　貴恵
世の中の死角探して生きている　勝見
宣伝の利子にだまされパーになる　和子
落し穴不倫みすみす深くなり　小生
神様の救いとどかぬ死角に居る　克枝
アフガンの霰はひとを殺しだす　忠良
白バイに死角の位置を教えられ　幸香
トタン屋根あられ太鼓が攻めまくる　重忠
父母の死角子供の心読めません　芙美子
掃除機の死角に溜まる塵埃　京子
ペア組んでマンチャラをして賭けに勝つ　友楽
赤信号バスが死角で足すくむ　善江
胃カメラの死角に悪魔身を秘め　龍枝
花びんを斜めに見ればトリカブト　和歌子
あの二人何処にもペアで足はこぶ　一夫
死角だと知らずおだてに乗っている　照彦
死角です弾丸は頭の上を越す　かつみ
エリートの死角で今日も耐えている　睦子
馬小屋の死角でキリストが生まれた　石花菜

太陽の死角に生きるホームレス　和枝
ペアでつくった等身大の桐の箱　螢
残り火を死角に隠し風を抱く　雄々
喜寿を過ぎこっそり買ったペアパジャマ　順子
ペアだからけんかしないで折れてやる　しろう
金運が死角に入り掴めない　博丈
女人禁制ペアには辛い掟です　玲坊
神様の死角で茶漬食べている　芳光
雨霰受けて立ちます鬼瓦　節子
教壇の死角で授業受けている　幸子

いずも川柳会　佐藤　治代報

鉄板でジュージュー嘘を焼いている　多喜
やさしさに鉄の心も溶けてくる　篤子
火の中に難なく溶ける鉄の意思　芙佐子
貧乏に笑いがあった鉄拾い　治代
鉄瓶の熱で私も溶けていく　美江子
鉄の楔打つもう死ぬことはないだろう　文子
共演の映画がとりもつ恋女房　多輝子
不景気風だ寅さん映画でも見るか　ちえ
映画見る百の吐息の中で見る　久子
熱弁が無声映画に興そえる　まこと
虚を突いた映画人生燃えさせる　芳枝
風雲児映画にバイバイして消える　水煙
みなし子を助けるサンタの夢袋　蘭水
もう一度助走してみる青い空　寿美
助ける側に居る幸せを噛みしめる　昌枝
石垣の石は根っ子に助けられ　章峰
具がいっぱい温い心も入れてある　歌子

禅ごころ一汁一菜箸拝む　多賀子
汁の具が笑ってくれて和む朝　紫晃
一汁一菜玉子こつんとひとつ割る　きみえ
一汁一菜それで百まで生かされる　茂美
Uターン決心させた蜆汁　玲子
うまい汁吸うて太って搾られる　竹夫
一汁に甘んじ読経澄んでくる　叮紅
みそ汁の美学は姑に負けている　桂子
靴下を二枚重ねてボランティア　満江
靴下の穴に男が夢の跡　昭二
靴下に心の闇を見透かされ　圭詩朗
靴下を干して勤労感謝の日　房子
母さんのくつ下借りたイブの夜　れいじ

翠洋会　穴吹　尚士報

出番なしベンチの隅をあたためる　さだを
わが家でも職場と同じ隅の席　昭
隅っこでセリフ覚えるニューフェイス　舞夢
総会の席に溜っている本音　富子
功成って一隅照らす灯をともす　さと美
隅っこで仲間をふやす蟻でいる　春
うすうすと感じていたがお邪魔虫　会美
矢印の通りに進んで出られない　蕉子
美人ではないが頼りになるガイド　正坊
いいお茶に案内されて重い腰　日の出
ご祝儀の催促兼ねた案内状　尚士
案内して生まれた町が好きになる　真理子
夢だけは持って生きよう老いの辞書　蛙
今年また矢張り黒豆煮ることに　伽羅

また会おう清い別れのベルが鳴る　照子
聞きかじりのニュースでつなぐティールーム　澄子
だまそうと狐と狸塗りたくる　東雲
さよならは言いたくはなし散るもみじ　千梢
つるし柿目につくほどに師走風　絹子
孫の手にへそくりそっと握らせる　叡子
十二月いつものとこで待ってます　義
書き捨てた方に本音がある手紙　正雄
喜寿の春これから先は風まかせ　志華子
ゲートイン駄馬駄馬なりの鼻の息　恭昌
泣き顔が素敵と変な褒め言葉　靖巳
罪のない話で今日を生きのびる　千歩

横浜あおば川柳会　清水潮華報

賀状書く背後で鬼が笑ってる　和可
子を叱る形相を知る三面鏡　鈴美
見送りの孫に泣かれて迷う足　サト子
まだ親が頼りにされる不況風　三郎
褒め言葉どれにも贈る菊花展　ふみ
鬼ごっこ恋のいろはになる芽生え　句多留
大国の奢りにゆれる世界地図　徳三
送迎のパパのお役目保育園　良子
評判の親孝行でまだひとり　政勝
鬼だとて歓迎します独り暮　街湖
親を看る話がとんと進まない　道子
リストラを恐れ仕事の鬼となる　純子
父母の汗詰めて季節の段ボール　達也
連弾を前に親子の息づかい　笑子
鬼の面つけて支えた屋台骨　今日子
高熱をおして仕事に出かけてく　亜希子
姑と価値観ちがう鬼がすみ　かづ子
優しさで人をなごます鬼あざみ　嘉信
身中の鬼を追い出す仏の掌　八重子
被災地へ送られてくる不用品　絹子
見送りに出た娘迎えに行く夜更け　敏
鼻先にワタシキレイとぶら下がり　省子
親の世話新居は近いとこに決め　雅子
加害者の親の哀しみには触れず　為佐子
鬼は外妻から豆が飛んでくる　裕峰
厚化粧落とすと母の顔になる　広和
夕飯に鬼が帰ったかくれんぼ　あらた
慢心の土俵を襲う乱気流　潮華

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

柚子三つ浮かべ一人の湯にも馴れ　満寿巳
節目には一言のある父でした　英子
人生の節目節目にある思い　庸佑
節目越え友は淋しい笑い顔　つえ子
節目には子等が祝をしてくれる　吉太郎
節目です離婚したいと妻が言う　萬的
新しいネクタイ締めてゆく節目　重人
やきもちはふっくら焼ける程がよい　靖巳
温暖化　未来を憂う雪達磨　周信
頂点に立つと不安になる未来　諷云児
雲の峰あなたに未来見えますか　求芽
少年の宇宙への旅　夢を追い　和子
電線の星揺れている虎落笛　高栄
隠れんぼみたいに動くビンラディン　ただし
弱音吐く夫の尻を叩く妻　柳宏子
這い上がる土壇場からの娘のパワー　知香子
デパートの地下不景気はどこにある　慶子
化粧品売場で相手にもされず　寿美子
馬鹿らしい話になって酒にする　紫香
良い話　語りも上手く化粧され　見清
ひとり旅落葉のささやき聞いている　〆女
辞めてから惜しい男と言われても　正坊
辞書を繰る少々腹を立てながら　しげお

川柳ふうもん吟社　杉本孝男報

美人という武器でハードル越えてきた　洋々
肩叩きされたら叩き返したる　鬼桜
余命表神が渡さぬから困る　忠良
ど根性据えて始めた川柳よ　蟹郎
ポケットの拳なだめて妥協する　美恵子
にわか雨善意の傘を差し出され　裕子
つまづいた素早くどうぞ手が温い　すなお
荒れた田で熊と狸がラブゲーム　(蔵)悦子
ど根性今時かっこ悪すぎる　美雪
もう歳と悟りハードル低くする　一京
雅子妃へどうぞ安産無事祈る　徹子
納得のいかぬ言葉をかみ砕く　雅女
ど根性の座った石と対話する　茂登子
ハードルに見られた足と腰の萎え　志げ緒
いくつものハードル跳んで君といる　金祥
ど根性無くてもいいねスヌーピー　修
つかんせえ薬一本にすがりつく　健一
あの世へはどうぞお先と妻が言う　喬水

ライバルと恋のハードル競い合う　益子
一人旅どうぞといわれ友になる　のり代
尊厳死願望というど根性　螢
ハードルの高さに父の背ながある　無限
芸のため裸になったど根性　圭一郎
ハードルを跳び越え進む若さあり　宗明
赤い羽根どうぞ気持をこの箱へ　信子
出世にはどうぞと甘い罠が待つ　春名
リストラに耐える力はど根性　はつ江
ハードルを等身大にして疲れ　一瑶
平成の子にど根性死語となり　毅
どん底の試練をバネに這いあがる　孝男

川柳藤井寺　高田美代子報

若葉マークすいすい前を抜いてゆく　みよ子
新米の艶に苦労がしみている　キミ子
新米と呼べばふくれるニューフェース　一筒
太陽の味新米に生きている　龍一
七人の敵と新米食べくらべ　敦子
新米の医者に長生き保証され　桂子
豊作の新米農家浮かぬ顔　史郎
もう沢山夢の中まで二日酔い　喜代子
たっぷりと食べてる割に痩せてはる　志洋
沢山の恵みで深い森になる　千里
挨拶は沢山知っているオウム　瑠美子
沢山の子を持つタラバガニの冬　昌子
ちょっとだけボケてる人はたんといる　六点
七彩の尾鰭がついていく噂　花梢
妻ボケて僕を沢山使います　栄一
コスモスの海に沢山ある記憶　ア キ
応援が沢山あって敗けている　井 竿
たくさんがええなあ夢も思い出も　美代子
感情線を乱し始めたストレート　悦 子
ストレートな息子へカーブ投げてみる　よしえ
ストレートな一撃でした父の檄　扶美代
めし風呂ねるストレートでは味気ない　昭子
ストレートに生きて孤独に慣らされる　鐘造
青年の矢はまっすぐに飛びたがる　重人
胃の中へストンと落ちてきた台詞　絹歌
真っすぐな意見が敵にかこまれる　和樹
子沢山枕を武器にするけんか　利武
京野菜たんと上がっておくれやす　かつみ
直球で攻めるあなたの口説き下手　一知
沢山の耳が喜ぶ種を蒔く　婦美枝

うぶみ川柳会　上田 宣子報

懐と相談すれば横を向く　ユリ子
相談に乗ったばかりに丸裸　芳江
何もかも許し相談受け入れる　睦子
手に残る胼胝が昔の苦を語る　重忠
名月の明るさ世界に残したい　華子
宿の下駄ポツンと切れて気が重い　一枝
挫折してポツンとひとり涙のむ　あづま
核家族いずれポツンと暮すだろ　くにお
おでん屋で残業してる事件記者　黙光
風の樹に愁いを深めゆくポツン　美ッ千
わたくしがポツンと歴史上に居る　螢
ＩＴで景気上がらず大誤算　和
誤作動が恐い科学の大進歩　天 人
誤魔化して番外に居る煙草の輪　健 三
手間かけた割には見ない正誤表　よしえ
かずかずの誤算をわらうルビー婚　ひろこ
繕って月と命名する茶碗　登美枝
相談のできるコンセントはひとつ　宣子

長柳会　加島 由一報

核家族盆と正月のみ集う　輝子
十七歳家族の和から抜けたがる　和代
句読点打つと抜け出せそうな疵　芳野
お洒落かなサンタクロースの赤い服　正一
大家族いつの間にやら二人きり　英美
リストラを乗り越えてきた家族の輪　正美
家族の輪温め直した里帰り　三和子
すきなのにうそを言ってる赤い顔　輝治
年の瀬が赤字の山を高くする　たけし
手抜きした料理はめられ面映ゆい　もこ
家族です大きい顔する猫一匹　マサ
赤紙を思い出させる派遣隊　ひろし
三代に囲まれ百寿祝う母　靖子
一抜けてみんなが散った茜雲　潤子
散歩する妻の歩幅に追いこされ　良男
駆け抜けたこの道はるか走馬灯　直樹
夕映えに我が青春の憾みあり　敬二
かくれんぼやさしい風が抜ける路地　一慧
華やかな過去に真っ赤な愛と憎　和子
トンネルを抜けて許せる事ばかり　冨美子
野仏も赤い帽子で冬仕度　けい子

肩の力抜けば世間がよく見える　幸雄
新世紀竹の園生に家族増え　正子
ライバルが笑顔で私抜いて行く　由一

岩美川柳会　石谷美恵子報

ラブゲームピリオドうって嫁にゆく　蟹郎
全没の癒しを貰う昼の蟹　公乃
蘇るたびにピリオド打って置く　睦子
歯ブラシを持てる間は歯を磨く　完司
ピリオドが悲しく光る夜の空　克枝
機関銃敵も味方も磨いとる　石花菜
ポケットに磨いて欲しい石がある　孝男
自画像の一つを埋める白昼夢　静生
白い髪母は苦労を語らない　雅女
昼あんどん戦士のころの髭のまま　一瑶
犬だけが歩く昼間の商店街　芳光
昼からは心が変わるかも知れぬ　かつみ
ピリオドはうたれ点滴だけ続く　喬水
年の瀬へ磨く心と窓ガラス　圭一郎
昼下り一円玉を数えてる　一夫
自分史のピリオド雪の絵を画こう　季芳
どん底を見た日もあったいい白髪　八重
ピリオドを打つ後編を書いている　きみ子
熟年の魅力白髪も花となる　たぬ
昼間から商店街は軒聞く　和枝
慰謝料のことでピリオドまだ打てず　よしえ
ピリオドの音を冷たく胸で聴き　一京
玉になるまで磨いてみがく女　和歌子
生きている悦びのぞく掛け鏡　重忠
昼飯にご前酒欲しいお爺さん　はるお
六波羅蜜の修業をつんできた白髪　蛍
昼ドラマ喫水線を越えたがる　忠良
共白髪誓った夫三回忌　裕子
夢一つ磨き続けてまだ未完　節子
ピリオドの迷いへ続くそばの花　美恵子

川柳さんだ　北野哲男報

病得て無沙汰の息子顔を出す　章子
覚えとく事も憶えず忘年会　忠
定年後何時の間にやら本の虫　歳子
この人に流せば噂走り出す　俊昭
和太鼓の響きふる里包みこむ　サクラ
記念写真カメラ横にし縦にする　久恵
ジャンボ籤夢の期限は一ヶ月　正行
校訓が和でいじめなどありません　正和
回覧板噂とともにお隣へ　藤朗
何と言う平和朝から五七五　千代
平和呆け九月十一日覚める　哲男

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

ジンクスを笑う一途のカタツムリ　洋
ジンクスを重ねてばねにする飛躍　弥生
ジンクスでないが老いては赤を選る　シマ子
ジンクスにデートの足をすくわれる　ミツ子
ジンクスはおまへん真ん中を歩く　ダン吉
ジンクスを味方に入れた処方箋　年人
ひと言でピリオドになる父の釘　ますみ
物語り終り歴史は終らない　弘一
千羽目の鶴折り終る青い空　ひさ乃
皆元気ハッピーエンドとしましょうか　きよみ
燃えつきた女静かに終電車　昌子
木枯しに山は有終乱舞して　加津子
それぞれに何をしていた終電車　春蘭
ゆるやかにカーブを切って流れよう　森子
ゆるやかに寿命を終えたいいお顔　巳代一
ゆるやかに心に沁みる祖母の文　柳伸
母送り次は我身と身構える　せつ子
脳死から次の命になる臓器　欣之
物置きでダルマが泣いている次点　とみを
次次と詐欺師の知恵は良く回る　まさと
野に立って次の思案をねる男　民
敗軍の将も次の術もっている　幸生
妖怪の出る家を借る安いから　度
妖怪を手玉に酒豪ようしゃべる　一風
嫉妬する妻は半妖になっている　千里

うぶみ第十回記念　紙上投句川柳大会

締切　二月二十八日　**投句料**　千円
兼題　「希」　八木　千代・石谷　忠良
「幾」　藤原　鬼桜・山本　礫
「器」　池　森子・門脇かずお
「起」　神夏磯典子・上田　宣子
「自由吟」一句（他は各題二句・共選）
投句用紙　自由・住所・氏名・所属柳社
投句先　〒680-0913　鳥取市安長三八〇―七
徳田　ひろこ

京都塔の会

三十周年記念句会

日時　三月二十五日（月）午後一時

会場　京都市北文化会館 三F創造活動室
京都市北区小山上総町四九
地下鉄「北大路」駅北出口①
エスカレーター上すぐ
TEL075—493—0567

お話　阿萬萬的氏

事前投句　「遥　か」　都倉求芽　謝選
（締切　三月十日）各題2句

兼題　「未　来」　岸野あやめ　選
「年ごろ」　神夏磯典子　選
「習　性」　長浜　澄子　選
「重ねる」　安藤寿美子　選
「三寒四温」　西口いわゑ　選
各題二句　締切一時三十分（欠席投句拝辞）

会費　千　円
（呈・塔の会合同句集『千社札其之六』）
昼食はお済ませの上ご来場ください

◎事前投句及び連絡先　都倉求芽
〒600—8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル
弁財天町328
TEL075—351—4109

西宮川柳会200号記念川柳大会

日時　平成14年3月10日（日）
11時30分開場　正午より受付

ところ　西宮市民会館（4階中会議室）
阪神　西宮駅下車　市役所口出口より北へ、一つ目の辻を東へ徒歩3分
JR　東海道線西宮駅下車、南出口より国道2号線沿いに南西へ徒歩約10分

会費　1000円（記念品・発表誌呈）

兼題・選者
「息」　斉木敏子　選
「早い」　土井喜久栄　選
「スリル」　田中正坊　選
「汚す」　佐藤純一　選
「線」　小松原爽介　選

◎各題　2句　席題なし　投句　拝辞
出句締切　13時30分

賞　各題3才に爽介主幹の短冊を進呈

◎多数のご参加をお待ちしています。

主催　西宮川柳会

第53回 三原市・神明祭協賛

川柳大会

とき　2月10日（日）午前10時開場

ところ　三原市民福祉会館5F
JR三原駅前南へ徒歩3分
TEL・0848—63—4077

事前投句　「妻」　杉原　正吉　選
2月1日必着　欠席者千円同封

宿題　「渚」　森中恵美子　選
「雲」　泉　比呂史　選
「鍵」　中田たつお　選
「巣」　定本　広文　選
「二　月」　小島　蘭幸　選
席題一題・各題二句・出句締切11時30分

会費　二千円（昼食・発表誌呈）

懇親宴　三千円（大会終了～午後7時）

投句先　723—0012 三原市旭町124
八島　白龍　宛
TEL・0848—63—2947

主催　備後番傘三原万松川柳会

柳界展望

★第7回名張市民文化祭・番傘川柳会20周年記念川柳大会は、11月23日に名張シティホテルで開催された。当日の本社関係受賞者は次のとおり。

〈名張文化協会賞〉

紫の炎と化した恋蛍　大内　朝子

★第2回井笠川柳会誌上大会「蘗（ひこばえ）」は、380名の参加で11月25日に締切られた。本社関係者天位は次のとおり。

大好きな人と芒が原にいる　小島　蘭幸

なお、この句は同会によって秋頃句碑にされる。

★第13回兵庫ふれあいの祭典川柳祭は12月2日三木市文化会館に於て開催、事前投句者631名、当日投句者は190名であった。本社同人の入選句は次のとおり。

〈特選〉壁のない暮しさんまが焼けている　小林妻子

〈準特選〉清流が自慢の故郷職がない　北野哲男

★第34回島根県芸術文化祭は、12月9日松江テルサで開催された。当日の本社関係受賞者は次のとおり。

〈銀賞〉

液晶の中に子供の部屋がある　竹治ちかし

〈銅賞〉

人並みに生きていきたい　水加減　伊藤　玲子

★第20回鳥取県没句川柳供養大会は、12月9日鳥取市全労済ビルで、出席者117名・投句者54名の参加を得て開催された。当日の天位受賞者は次のとおり。

越える日を願って破門言い渡す　鈴木　公弘

君が代を忘れた無礼者がいる　土橋　螢

〈総合成績一位〉

両川　洋々

★京都塔の会は平成13年度成績を発表した。

〈最優秀句〉（2回獲得）

都倉求芽・桝本宏子

〈得点賞〉（○内順位）

①大野百合子②桝本宏子③山本礫④松川芳子⑤都倉求芽　以上の各氏

★いずも川柳会は平成13年度いずも賞を発表、1月20日の新年句会で表彰した。本社関係受賞者は次のとおり。

〈いずも大賞〉

いまわたし荒野を抜けてゆくところ　青山　久子

〈いずも奨励賞〉

惚けぬよう捻子を巻いてる古時計　佐藤　治代

〈同友大賞〉

一通の手紙と山を越えて見る　津川　紫晃

新同人紹介

坪井孝一（つぼいこういち）

―薫風・紫香・いわゑ・澄子推薦

小谷はるみ（こだにはるみ）

―岳人・洋々・公弘・完司推薦

小谷孝美（こだにたかみ）

―岳人・洋々・公弘・完司推薦

加藤茶人（かとうさじん）

―岳人・洋々・公弘・完司推薦

下田茂登子（しもだもとこ）

―岳人・洋々・公弘・完司推薦

〈ユーモア賞〉

つまみ食い口も心もウッフフ　伊藤　玲子

▽表　彰△

■小林由多香氏（参与・鳥取市）は、鳥取市文化賞を受賞した。同賞は鳥取市の芸術文化に功績があった人に贈られるもので、共感を呼ぶ作品と県川柳作家協会長としての活躍が評価された。（11月8日発表）

★橘高薫風名誉主幹は、川柳『黎明』№11号に「友情は快楽」と題して、エッセーを発表した。

★播本充子さん（理事・八王子市）は、水環境問題の事業誌『水』新年増刊号に、川柳遊歩道と題し32句を発表した。

★木本朱夏さん（常任理事・和歌山市）は『川柳オホーツク』12月号に「川柳の自己規定」と題してエッセーを発表した。

★朝日新聞12月26日の「詞華の森」に、俳人大石悦子氏の同人誌紹介があり、川柳は季語や切字の制約がないかわりに、丸腰で立たねばならない文芸であると言う。本誌12月号から、谷口義さん（同人・東大阪市）の3句が河内天笑選としてとり上げられて、「綯帯を一人で巻いて月を見る」は、深い切れ味のあるうがちの作品で、さらりとした哀しさは俳句では出せないと評された。

▽御芳志御礼△

■井上ヒサヨさん（井上白峰氏御遺族）・金井文秋氏ご遺族・大坂形水氏ご遺族・高杉千歩さん（高杉鬼遊氏御遺族）から、高野山合祀御供として金一封を拝受。

★平成14年本誌発送予定日

1月26日（土）・2月27日（水）・3月27日（水）・4月26日（金）・5月27日（月）・6月27日（木）・7月27日（土）・8月27日（火）・9月27日（金）・10月26日（土）・11月27日（水）・12月27日（金）

▼訂正とお詫び▲

■**9月号**＝P103下段18行目、**10月号**＝P113上段18行目、**11月号**＝P115下段11行目、美祢子→**美弥子**

■**1月号**＝P22上段4行目、「なにげないその一言に身は凍る」を、本人の申し出により削除　P38下段7行目、山口美千子→山口三千子　P133下段6行目、清廉太郎→**滝廉太郎**　P134中段3行目とP135下段21行目、度→**たもつ**　P135下段10行目、待ち時間→**持ち時間**　P144中段6行目、名刺→**名利**

■**天根夢草代表還暦祝賀会**

日時＝2月17日(日)13時開場

会場＝ホテルアイボリー。℡06―6849―1111　阪急宝塚線豊中駅下車北へ5分。**宿題と選者**＝「知」門脇かずお「休」新家完司「川」金築雨学「自由吟」天根夢草。各題3句、出句締切14時。祝宴1万円。**連絡先**＝℡06―6844―0865　赤松ますみ方

■1月常任理事会＝1月7日（出席者20名）決議事項①2月8日常任理事会は参与以上を招集し葉書で案内する②900号記念大会の祝辞人選、謝礼、記念品を検討③臨時同人総会開催を決定④地方との連携について検討⑤同人8名承認

▽常任理事会△

■2月8日(金)13時～アウィーナ大阪4階マーガレット

生田義一（いくたよしかず）
―紫香・柳宏子・諷云児推薦

左右田泰雄（そうだやすお）
―紫香・柳宏子・諷云児推薦

西谷治三郎（にしたにじさぶろう）
―紫香・柳宏子・諷云児推薦

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	16日(土)午後1時から 余計・ぐずぐず・メール・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8　神夏磯典子
川柳会梨花	16日(土)午後1時から 平均・休む・利用・くどい 雑詠	鳥取市勤労者総合福祉センター1F会議室（鳥取駅南） 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4—268—205 宮木方　坂田和歌子
岸和田川柳会	16日(土)午後1時半から 杖・丁寧・当然・泣く	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610—85　芳地狸村
川柳ねやがわ	17日(日)正午から 醒める・遅刻・磨く・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
岬川柳会	17日(日)午後1時半から 二月・北風・そっくり・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい川柳会	18日(月)午後1時から にこにこ・蹴る・人気・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801　田中正坊
川柳クラブわたの花	22日(金)午前10時から ステップ・挑む・ぞっこん・浪人	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
堺川柳会	18日(月)午後1時から 楽しい(共選)・その後 いけず(折句)	堺総合福祉会館 2F 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3　河内天笑
東大阪市川柳同好会	23日(土)午後6時から 寒い・早い・サロン・愛	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
はびきの市民川柳会	24日(日)午後1時から 探す・チーム・意外 「まだまだ」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳ふうもん吟社	24日(日)午後1時から 外・ややこしい・スロー	JR鳥取駅構内　シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2　植田一京
京都塔の会	25日(月)午後1時から 列・おんぶ・中止	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔みぞくち	25日(月)午後7時半から 冬・針・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々
南大阪川柳会	27日(水)午後6時から 狂う・救・ツンドラ・抜け目	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

2月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎いくしま	1日(金)午後1時から 馬(午)・命・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F　阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17　春城年代
富柳会	2日(土)午後1時から 正面・寒い・自由吟	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
倉吉川柳会	2日(土)午後1時から 椅子・寺・つなぐ	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔な　ら	7日(木)午後1時から 吹き・マナー・世間	船橋フロムワン（船橋商店街内） 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
川柳塔唐津支部	7日(木)午後1時半から バッグ・もう・目	唐津市　栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13　宗　水笑
川柳塔打　吹	9日(土)午後1時から ラップ・父権・辻	倉吉市上灘町　上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21　野口節子
川柳塔まつえ	9日(土)午後1時半から 雑談・人生・犬	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22　三島淞丘
川柳塔みちのく	9日(土)午後4時から チャンス・研ぐ・税	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5　波多野五楽庵
八尾市民川柳会	10日(日)午後1時から アリバイ・変る・うっすら・律儀	山本コミュニティセンター内3F学習室（近鉄山本駅） 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15　宮崎シマ子
川柳塔わかやま	10日(日)午後1時から 二・追加・毎日・まごころ	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良
西宮北口川柳会	11日(月)午後1時から 仮面・あらゆる・満・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515 山本義子
ほたる川柳同好会	12日(火)午後1時から 市場・主役・閉める	豊中市立蚕池公民館 阪急・モノレール蚕池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1—7—5　田辺正三郎
尼崎尾浜川柳会	12日(火)午後1時半から 安心・手袋・自由吟	尼崎市立立花公民館　尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス㊽番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47　田辺鹿太
高槻川柳サークル卯の花	14日(木)正午から 行方・それぞれ・底 無造作・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3—8—8　川島諷云児

編集後記

☆本社1月句会は、会場の都合で15日に開催され、本号には無理で3月号掲載となる。些か淋しい2月号であるがご辛抱願いたい。

☆寒い時期の3ヵ月、午後1時からの句会になったが、12月134名、1月129名の出席者があり、試みは好評を得たと言えよう。2月までの結果は、今後の句会のあり方を考える大きな指針となることであろう。

☆12月初旬の8日間、地中海のマルタ島で羽を伸ばしてきた。同時多発テロから日も浅く家族から止められもし、現に海外旅行者が激減しているとも聞く。直前まで迷っていたけれど、物は考えようで飛行機事故でアッと言う間に、この世におさらば出来れば幸せと言うもの。旅行保険も加入しているから、子孝行にもなる。などと憎まれ口を叩き度胸を決めた。(と言えば太っ腹そうだが、その実、飛行機が少しでも揺れると震えていた)

☆海外旅行は飛行時間や時差の関係があり、体力勝負だからできるだけ今の内に行っておきたい。住友生命のアンケートによる「定年」は、海外旅行74・65歳とか。あと何回行けるだろうかとあせりを覚える。(ちなみに恋愛は70・47歳、運転は69・49歳)料金も近頃リーズナブルで、国内旅行より安くとても行き易い。

☆テロの影響はさしたる事なく、頼れる編集スタッフのお陰で十分に英気を養うことができた。次は何処で羽を伸ばそうかと、時差ボケの頭で校正をしつつすぐ考え始めていた。(ふ)

ひとこと

解り難い句だ!

娘に「最近のお父さんの句、前と比べて解りにくくなったよ」と言われた。ショックだった。

柳歴十年足らずの私が三年ほど前に『初心時代』という小句集をだした。それを縁に毎月何回かの句会、投句、大会等に参加してきた。ひたすら抜けたいという一心から、言い回しを凝らしたり、曲げたりして抜けた句は、娘の理解にほど遠い句になってしまった。特に課題吟では一句建てではピンとこない句を、当然の如く見せびらかしたりして、お恥ずかしい。

誰が読んでも頷ける句、それでいて妙を得た句。つまり穿ちを含んだ句だ。こりゃ大変だ。しかし、それが適ってこそ、大衆文学としての川柳ではないか…と思う。

かたつむり一歩一歩の難しさ

(小野句多留)

★二月に入ると思い出すのは何年か前に行った札幌雪まつりである。着いたのは昼前であったが、街はすでにマイナス七度、雪国育ちのひとにはわらわれるが、寒いより顔が痛い感じ。冬山歩きは完全防備と心得ているが、ちょっとお洒落をしたのが間違いの元。早速毛百%のストールを買いこんだ。会場は市内から真駒内と広く移動のタクシーはスイスイ走る。外を見るとキャアキャア言っているのは観光客だけ、地元の方は颯爽と歩いている。次の日層雲峡氷瀑まつりに行った頃は少し慣れてきた。

★旅行は体力プラス金力なりとつくづく思い知る。しばらく前から膝を痛め、日常正活にも支障をきたした。ひとり暮らしの頑張りぐせで皆のひんしゅくをかったが、昨今ご好意に甘えることを覚え、ありがたきかな。

★医師曰く、とにかく体重が膝にかかる骨の老化だ、体重を落とせとのご託宣。

★オホーツクの流氷、雪原に舞う鶴、瓢湖の白鳥などまだ見残したところ多々、膝を治してまた行くつもり。

★川柳もまた体力なり。昨年は西に東にと句会にお誘いをいただいた。只今は療養専念。春になったらまた行くつもりでいる。

皆様、ご無事にこの寒さをのりこされますことをお祈りします。(よ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**4月号**）　地名　　姓・雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

きりとりせん

本社2月句会

とき　2月6日（水）午後1時・2時半締切

ところ　アウィーナ大阪　4階
天王寺区石ケ辻町19－12　電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題「テスト」　平松かすみ選
「大」　岩佐ダン吉選
「勝つ」　安藤寿美子選
「心」　板尾岳人選
「揃う」　河内天笑選

席題　1題　当日発表（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円

3月本社句会　7日㈭午後5時半から

兼題　「マドンナ」「歌」「招く」
「呪文」「結ぶ」

作品募集

4月号発表（2月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　板尾岳人選
愛染帖（3句）　波多野五楽庵選
茴香の花（3句）　宮西弥生選
課題吟（3句）「バッグ」　野坂なみ選
「もう」　増田紗弓選
「目」　三好専平選
初歩教室「勝つ」（3句）　吐田公一担当

5月号
課題吟　「用」「そのまま」「階段」
初歩教室「鍵」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。

(2)愛染帖・茴香の花欄・一路集（課題吟）および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。

(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

夜市川柳募集

第9回「浮く」　前田咲二選
ハガキに3句　2月末締切
投句先　〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇〇二年（平成十四年）二月一日発行
編集兼発行人　河内權治
印刷所　美研アート
〒545-0005
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六六一六九一四番
振替　〇〇九八〇―五―三三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可

KANSAI MAN

【イメージ・キーワード】
“Value for Human”
バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール

SUPER OSK by OSK

オーエスケーの
紳士服

株式会社オーエスケー
〒540-0024 大阪市中央区南新町１－４－７
(06) ６９４１－９６３１

自費出版
川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします

美研アート
〒530-0022 大阪市北区浪花町９番４号
TEL（06）6372－1178

雑誌　05703－2